

もう限界なので休ませてください。。。。

キャラメルマキアート

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

その日、283プロダクションに激震が走る……!!

※Pixivでも連載しています。

目次

無限殘業編	1
王国崩壞編 I	6
王国崩壞編 II	13
王国崩壞編 III	24
王国崩壞編 IV	37
王国崩壞編 V	49
王国崩壞編 VI	61
王国崩壞編 VII	85
日常侵食編 I	99
王国崩壞編 VIII	109
愚憐無限殘業編	118
天獄慘悔編	131
大紅蓮無間地獄編 I	143
天体觀測者編	153
大紅蓮無間地獄編 II	162
大紅蓮無間地獄編 III	175
大紅蓮無間地獄編 IV	186
旺裂仕舞學校編 I	197
大紅蓮無限地獄編 V	210
大紅蓮無限地獄編 VI	226
幻想遊行夜光虫編	245

## 無限残業編

あれ俺がんばりすぎじゃね？

それを男が思ったのは21時を過ぎた事務所のデスクで一人次の企画を纏めていたときのことだった。

283プロダクション。

7グループ計25人の女性アイドルが所属しており、全員が全国区の知名度を誇る中々な規模の芸能事務所である。

それを支えるのはこの芸能事務所の社長と事務員兼トレーナー、そしてこの283プロで唯一の正社員（当時）であり、プロデューサー兼マネージャー兼運転手兼事務員兼トレーナーの彼である。

ここで恐ろしいことに気づいた人はいるかもしれない。

そう従業員が実質2名しかいないのである。

いやいやおかしいだろと男は自身へツッコんだ。

なんで俺一人で25人のアイドルをプロデュースしなくちゃいけないんだよと。

てかプラスでマネージャーも運転手も合わせてすることじゃないだろと。

分身どころか多重影分身でないと間に合わないレベルの激務である。

しかもである。

アルバイトに大きな負担を強いるのは正社員であるこちらの立場からしても心が痛いので、担当してくれていたボーカルやダンスレッスンも最近では男も担当している。

会議もテレワークで済ませ、外出もできるだけ最低限に抑えた。

これは営業をしていた最初の方はこちらから出向かなくてはいけ

なかったが、所属アイドルが売れている今では寧ろ先方から来ること  
が多いため営業活動もあまりしなくて済むようになった。

ここまで来れたのはアイドルの魅力やその努力が評価されたのは  
あるが、裏方である男や事務員さん、社長の力でもある。

いや、だいぶ俺じゃないだろうか。

男はそう思っていた。

そもそもアイドルのグループ名や編成、方向性など企画したのは俺  
だし、アイドルのスカウトもオーディションの面接も全部俺じゃな  
かっただろうか、と。

曲や振り付けはプロに発注して作ってもらっていたが、最近では一  
部ではあるが男が作曲してそこに歌詞と振り付けを依頼することも  
多くなった。

あれ、俺ってよくこの仕事量こなしているなってか死ぬんじゃない？

しかも所属しているアイドルも中々に癖が強い子が多い。

明るく元気な子や真面目な子、しっかりした子もいるが中にはめ  
ちやくちや暴言を吐いてくる子や何を考えているか分からない子、く  
そ生意気な子、めちやくちや我が強い子など常人ならメンタルが砕か  
れていてもおかしくない面子が結構いる。

中にはオーディション合格後、未成年には親御さんの許可が必要な  
のだがそれを偽造してくる子や、男にスカウトしてもらったために個室  
に監禁し、スカウトしないと襲われたと声を上げると脅迫してくる子  
などよくよく考えたら普通に犯罪行為をされていた。

特に前者はマジで事務所存続の危機までいきかけたので本当に危  
なかつた。

そしてそんなアイドル達の中には色々なバックボーンを抱えて  
いる子たちがたくさんいたのだ。

詳細は省くが、例を挙げれば親と上手くいっていない子などは親御

さんへ必死にアイドル活動のメリットや活動方針など懇切丁寧に説明し、ライブへのチケットを手配し見てもらうなどの対応を行い、アイドル自身にはひたすらに話しを聞いてその子が今何を思っているのか、不安なこと何なのかを聞き出して一緒に解決していった。

勿論、その子だけじゃなく他のアイドル全員へ同じ対応をした。不公平は反発を喰らい雰囲気悪くするからである。

そう男は頑張ったのだ。

給料のために。

男が金を欲しがるのは一つ早期リタイアの為であった。

彼は根っからの働いたら負けの精神の持ち主であり、できれば家でゴロゴロしていたのが本音であったがそんなこと到底無理なのは分かっていた。

故に金を稼いで余生はひっそりゆつくり過ごすのが夢であった。

話しは戻るが結果的に全員がかなりの売れっ子アイドルになり男の懐は潤った。

その代償のこの激務ではあるのだが。

そして問題はアイドルだけではなく、事務所自体も曰く付きであったのだ（言い方は酷いが）。

この事務所の社長と事務員さんは実は単なる雇用主とアルバイト（当時）ではなかった。

別段愛人関係であるとかそういったドロドロしたものではなく、事務員さんの父親が社長と親友であったのだ（さらに言えば事務員さんの妹がこの事務所ですべてアイドルをしている上、男を監禁脅迫したとんでもないガールなのだがここでは割愛する）。

それだけだったら縁故採用という奴なのかぐらいにしか思わないが、その事務員さんの父親が10年程前に亡くなっていたのだ。

死因は過労死で、しかも母親は病気で入院しており家の経済状況を支えるために結果的に事務員さんは掛け持ちで色々ところでアル

バイトをしているとのことだった（だから正社員ではなかったのかと聞いたときに少し納得した）。

ここまで聞いたら分かると思うがめっちゃくちゃに関係性が面倒くさいのだ。

捻れて捻れて解けないゴルディオスの結び目みたいになっていたのだ。

社長は負い目を感じていて事務員さんは同情して欲しくないとか、傍から見たらというか誰しもが深く関わりたくないものだった。

だが、男は頑張ったのだ。

事務所運営を円滑にするために本人や関係者からの情報収集、そして飲みや食事、雑談などで必死に心の扉を開けて（特に社長は大変だった）漸くその真意を聞き出し、二人を引き合わせどうにか円満に解決させたのだ。

事務員さんの労働環境を改善するのは本当に大変だったと男は染み染みと思っていた。

なぜか事務員さんの母親のお見舞いに同行し挨拶する謎イベントはあったがその甲斐あって凝りは消滅し、事務員さんもつい最近漸くアルバイトから正式に正社員（事務処理の都合上来月から）になり、掛け持ちをしないで済むようになった。

合わせて事務所の雰囲気も元から明るくはあったのだが違和感が消え、本当の意味で明るくなったのだ。

アイドル達や裏方メンバーもそうだが、彼はプライベートのほぼ全てを利用して漸く働きやすい職場（雰囲気）を作り出したのだ。そしてここまで来て男は思った。

「もう限界なので休ませてください……………」

有給はたっぷり残っているし、この日のために業務関連の引き継ぎ資料も毎日更新し続けていたのだ。

最低でも3日は休みが欲しい。

今思えばここに転職してからまとまった休みは一回も取つていなかった気がする。

「よし決めた。来週いや再来週……半年後に連休とつて旅行に行こう」

とりあえず京都かな？

そうと決まれば引き継ぎ資料をもつと見やすくしておかないと、男は現状の業務の見直し作業へ入る。

アイドル達は既に立ちしもう俺なしでも十分芸能界で活躍できるのだが、もし辞めるとしてももう少し貯金をしなくていけない。だがそれまでに限界が来ては意味がない。

そう、この旅行は必要経費なのである。

この作業の後、男は自宅へと帰還する。

その時間なんと23時。

更に翌日紆余曲折あってこの引き継ぎ資料がある人物に漏洩し、不穏が波及していくのを男はまだ知らない。

そしてそれが後に283プロダクション全員を巻き込む大騒動になるのだがそれはまた別の話。

## 王国崩壊編Ⅰ

「~~~~~♪」

その日、283プロダクションの事務所で、楽しそうに事務仕事をこなす女性がいた。

あからさまに機嫌が良さそうで、彼女の周囲からは音符のマークが何個も浮いているような幻覚が見える。

「あ、そうだ。そろそろプロデューサーさんが外回りから帰ってくる時間」

すると彼女は一度事務処理を休止し、席を立つとどこかへと向かう。

その足取りもどこか嬉しそうである。

彼女の名前は七草はづき。

この283プロダクションの事務員でありボーカルやダンスレッスンを担当し、所属するアイドルの衣装すら作成するなど裁縫スキルもとんでもないスーパー事務員でもある。

季節ごとに事務所内でコスプレしている姿を見かけることはザラであり、彼女のコスプレで季節が変わったことを自覚するものも少なくなかった。

「プロデューサーさんは少し冷まさないとすぐ飲めないのよね」

現在、彼女は事務所内にあるキッチンでコーヒーを抽出していた。

彼女が待つプロデューサーはこのプロダクションの全アイドルをプロデュースする敏腕である。

現状所属するアイドル全員が毎日何かしらの番組に出演するレベルで売れており、そのアイドル達のスカウト、オーディション、企画、方向性、選曲など全てを担っていた（最近ではアイドル達に任せている部分が多くなってきたが、最終的には彼の許可が必要になっていく）彼を事務所の皆は超人と称していた。

そんな彼は猫舌であり、熱いコーヒーも少し時間を置かないと飲めないという超人と称されている彼からしたら想像できない弱点が存在した。

だがそんな部分のはづきを始めた他アイドルからは手がかかるも可愛いと評価されている。

故に帰ってくる少し前からコーヒを淹れ始めているのだが、そんな手間も全く気にしていない様子のはづきはやはりルンルンであった。

「はぁ……プロデューサーさん……」

そして気づいたら溜め息が出てしまう。

最近のはづきはいつもこうだった。

プロデューサーのことを気づいたら考えており、そして溜め息が出てしまう。

しかしその溜め息は負の感情由来のものではなく、寧ろ真逆のものであった。

こうなつたきっかけは簡単に言えばプロデューサーにまるでヒーローのように助けられたことから始まる。

はづきは10年前に父親を過労で失っている。

更に言えば母親も病気を患っており、まだ幼い妹もいる中で生活は苦しかった。

父親は弁護士をしており、残った遺産もあつて困窮したわけではなかったが母親の医療費もあつて無駄遣いできるわけもなく節約の毎日であった。

アルバイトが出来る年齢になり、はづきはそこからひたすらにアルバイトをしていた。

大学に行くかも迷つたが結局そのまま高校を卒業して働いた。

昔から器用で、ある程度のことなんでも出来たはずきはアルバイトでそれを遺憾なく発揮して仕事をこなし、お金を稼いだ。

そしてある日亡き父親の親友だった男性と知り合う。

彼は父親が生前に顧問弁護士を担当していた会社、現283プロダクションの社長である人物であった。

アルバイト先を増やそうと思っていた矢先にうちで働かないかと言われたのだ。

最初は同情されるのも嫌で、しかも過労で亡くなった父を考えるとその原因の一端を作った人物に対して複雑な気持ちを抱いていたが

生活をするには背に腹は代えられず、少し迷って283プロダクションで働き始めた（給料もかなり良かった）。

そしてその人物、社長と関わって分かったことがこの人はかなり不器用な人物であるということだった。

生前、父親は仕事人間であまり家庭を省みることがなかった。

ただ今だからこそ分かるが、それも全部家族である自分達のためだということも残してくれた遺産の額で分かったし、死期を悟り残された遺書にもそう書かれていた。

でもそんなの関係なく家族と一緒に過ごして欲しかった。

反抗期気味だった自分はともかく、特に当時小さかった妹からしてみればそれが一番の願いだった。

それは父親が不器用で一番家族へ出来ることが働いてお金を稼ぐことだったのだろう。

そんな父親と社長はどこか共通点があり、憎むことはできなかった。

だがそれでもぎこちなくなってしまうのは仕方のないことだった。

しかしそんな時だった、283プロダクションに一人の男性が入ってきたのだ。

それが現283プロダクションのプロデューサーだった。

彼の第一印象は物腰柔らかかでカッコいい人だなというもので、印象はそれだけであった。

それだけで生きていける程社会は甘くないし、芸能界に関わるこの仕事であれば尚更であった。

しかしいざ働き始めるとその凄さは明らかになった。

アイドルのスカウト、オーディションを進め、単独デビューではなくグループでデビューさせることを提案し、編成とコンセプト、方向性、プロデュースの計画を纏め、社長と私にプレゼンテーションをし、決裁を勝ち取った。

そこからは破竹の勢いでプロデュースを進め、殆ど計画通りにことは進んでいった。

正しく救世主だった。

事務所の知名度はアイドルの知名度に比例して上がり続け、今ではあの283プロと言われるレベルになったのだ。

更に彼はそれだけではなかった。

コミュニケーション能力が凄まじく、難しい年頃のアイドル達と仲良くなっていた。

そしてそれはアイドルだけでなく裏方であるはづきや社長もその対象であり、最初は壁を作っていたが気づいた時には自身の過去を泣きながら居酒屋で話し始めた。

それを聞いた彼は一言、優しい表情でこう言った。

「頑張りましたね、はづきさん」

なぜかその一言に救われた気がして、涙が止まらなかった。

そんなはづきの側にプロデューサーはずっといてくれたのだ。

そしてそんな彼に、もう思っていることは全部吐き出しましょうと言われ、後日社長とプロデューサーとはづきの三人で個室の居酒屋をセッティングされ、そこで全てをぶちまけた。

あまりはづきの記憶には残っていないが、そこで初めて社長と真に打ち解けたのだ。

そこで来月から正社員としてここ一本で働いていくことも決まり、生活も健康面も安定するようにもなって母親は喜んでいた。

元々色々なところで働いているはづきを見て心配していた母親ではあったが、やつと安心できたと罪悪感も重なって涙ながらに言っていたのを覚えている。

病弱で働くのもままならず、はづきに頼っていたそんな状況。

少しでもはづきの負担がなくなるならばそれほど嬉しいことはなかったのだ。

はづきは泣いた。

母親も泣いた。

一緒に病室へ来てくれたプロデューサーはただ黙って側にいてくれた。

プロデューサーには感謝してもしきれなかった。  
故にはづきはそんなプロデューサーのことを

「ただいま戻りました」

そして時間通り彼、プロデューサーは外回りから帰ってきた。

その声を聞いたはづきの表情は先程よりも嬉しそうであり、意気揚々とコーヒーを持って事務室へ向かう。

足取りは軽かった。

「おかえりなさい、プロデューサーさん」

「あ、はづきさん。ただいまです。あとこれ、先方からのいただきものです」

デスクにコーヒーを置くとうろごいまずとプロデューサーはリュックタイプのビジネスバッグを置きながら言う。

はづきがクロスカウンター気味に受け取ったお土産を確認すると美味しいと評判の〇屋のお高いドラ焼きであった。

「あら、有名なやつじゃないですか」

「はい。なので早い物勝ちで皆に食べて貰おうと思ひまして」

そう言うとプロデューサーはメモ用紙にペンで何かを書き始め、はいとはづきへと見せた。

そこにはこう書かれていた。

『〇〇社からのいただきものです。お早めにどうぞ！』

そのメッセージの余白部分には可愛らしいクマのマスコットキャラクターが両手にプレゼントの箱を差し出している様子が描かれている。

「ふふふ、可愛いですね」

口元に手を当てて微笑むはづきであったが内心穏やかなものではなかった。

プロデューサーさん可愛いすぎないですか？

何なのだろうかこの人は。

はづきの心臓は現在進行系で高鳴り続けている。

身長187センチで顔は男性アイドルグループのメンバーの一人と言われても違和感はなく、性格は誰にでも優しく気配り上手でめちやくちや仕事ができる。

車の運転も上手でしかも趣味はお菓子作り。

それに加えて猫舌、可愛いキャラクターもスツと書ける器用さのギャップ。

それも相まってプロデューサー沼に陥っているものは少なくないだらう。

現にはづきは既に第五深層辺りまで入り込んでいた。

うん、この人は本当に何なのだろうか。

再度はづきはそう思った。

「けっこう可愛く描きましたよ。ユアクマ」

そうニカツと笑みを浮かべながら言うプロデューサーの背後には小動物が見えた。

いや可愛いのは貴方ですからとはづきは言葉が出かけるが何とか抑え込む。

まるで中学二年生の妄想ばりの感覚をこの歳で味わうとは思ってもしなかった。

「コーヒーとっても美味しいです」

いつも飲みやすく助かりますとそんなことを言われたら、はづき的には寧ろ逆なんですけどねとまた思いが零れそうになる。

何ならプロデューサーの為に良いコーヒー豆をと、はづきが個人的に買っているくらいである。

ああ、この短時間で何度呼吸が苦しくなるのだろうか。

「あ、そうだ。はづきさん、これ見てくださいよ。帰る途中で居たんですけど」

そう言ってプロデューサーはスマートフォンを取り出し操作し、写

真を見せてくる。

「あら可愛い猫ちゃんですねぇ」

そこに三毛猫が仰向けになってお腹を見せている写真だった。

「はい、なんか人馴れしてるみたいでこっちにすり寄ってきて超可愛かったんですよ」

ニコニコしているプロデューサー。

うん、だからそんな貴方が可愛いんですよ。

確かに猫は可愛いが、普段見せている仕事が出来るプロデューサーとのギャップで猫どころではなかった。

はつきり言っってはづきはキレそうになっていたのだ。

意味が分からないが。

「うん？ すみません、ちよつと電話出ますね」

プロデューサーはそう言うスマートフォン画面をスライドさせ、電話に出るとお世話になっておりますと話を始めた。

一瞬で仕事モードになるプロデューサーに対して少しときめいていると、ふとパソコンのデスクトップに視線が釘付けになった。

『引き継ぎ関連資料』

その瞬間はづきの頭は真っ白になった。

## 王国崩壊編Ⅱ

「あー疲れたー」

「ちよつと浅倉、寝転がるなら汗拭いてからにして」

その日、283プロダクションの提携しているレッスンスタジオで浅倉透と樋口円香はダンスの自主練習に勤しんでいた。

「はい……樋口、タオル取って」

「自分で取れ」

再度浅倉透は間延びした返事をしてバッグからタオルを取り出して拭き始めた。

それを見た樋口円香は少々の溜め息を吐きながら自身もタオルで汗を拭くと、スポーツドリンクに口をつける。

○塚製菓から出ている青いあれである。

「透せんぱくいいー」

レッスンスクの扉が開かれると、ふわふわな雰囲気を纏った少女が現れる。

表情筋がもうニパーツと開放されていた。

「もう！ 走らないでよ、雛菜ちゃんー」

そんな少女の後ろから小柄な少女が追走してくる。

その様子から普段から振り回されていることが容易に想像できた。

「……雛菜、騒がしい」

「あー円香先輩お疲れ様」

雛菜と呼ばれた少女、市川雛菜は透の持っていたタオルを取って髪を拭いてあげながら円香の方を向いて言う。

「うーん、雛菜もうちよつと後ろー。かゆい」

「あはー。痒いところはありませんか？」

透と雛菜は二人で何やら小芝居めいたものを始めている。

「小糸、そっちはどうだった？」

「あ、うん！ きちんとやってきたよ！ 途中、雛菜ちゃんが飽きそうになつてたけどね」

ふんすと返答する小糸と呼ばれた少女は福丸小糸。

後半の発言を聞いた円香はやっぱりねと思いつつ、いつものことかとすぐに気にしなくなつた。

彼女たちは『Noctchill（ノクチル）』。

283プロダクションが誇る幼馴染4人組で結成されたアイドルグループで、業界でもかなり珍しい組み合わせの彼女たちは透明感溢れる独特の世界観で人気を博しており、割合女性人気の高いグループでもある。

現在彼女たちはこのレッスンスタジオで、ダンスレッスンとボーカルレッスンに分かれて練習をしていたのだった。

「そうだと。ねえねえ、お昼食へに行こ〜?」

透の汗を拭き終わった雛菜がそう提案し、確かに時間的には丁度良いなど円香は納得した。

どうせ自主練習は午前中で終わる予定だったし、確かに空腹気味にはなっていると。

「いいね。何食べよう? …… 小糸ちゃんは何が良い?」

「ぴえっ! え、えつと……」

まさか自分に振られるとは思わなかったのか、いつも通りの可愛いらしい奇声を上げ、思案している。

基本的にこういう場合、透か雛菜の食べたいものを食べに行くことが多い。

勿論、円香や小糸が食べたいものを食べに行くこともあるが、割合的には少なかつたりする。

「雛菜はね〜、ラーメン食べた〜い」

すると雛菜の口から彼女のチョイスとしてはかなり珍しいメニューが放たれた。

この四人でラーメンを食べに行ったことは片手で数えられるくらいだろう。

確かに透か雛菜のチョイスになるとは行つたがファーストフードやファミレスが主体であり、専門の店に行くことは割りと少なく、特にラーメンというのは女子高生4人組としては少々ハードルの高いものであつた。

「……雛菜ちゃん、珍しいね。いつもならハンバーガーとかなの  
に」

何故か小糸は恐る恐るといった様子だった。

そう、ここで小糸は何か嫌な予感を感じていたのだ。

たかがランチに何を食べるかを決めるだけなのに。

小糸は昔から勘が良かった。

良かった故に起きる弊害というべきか。

「うん、プロデューサーと前に二人つきりでラーメン屋さん行ったん  
だけどすごく美味しかったから」

そしてやはり予感は的中した。

明らかに4人の間に流れる空気が凍っており、体感温度も下がって  
いる。

もし第三者がこの場にいたら、即時退散するオーラが場を支配して  
いた。

「……へえ、雛菜。プロデューサーと二人きりで食べに行ったん  
だ」

透の声色は酷く低い。

明らかにランチ前のテンションではなかった。

「うん、プロデューサーの大好物なんだって。大盛り食べてて男の  
人って感じだったよ」

雛菜の声色は変わらない。

その表情はとても幸せそうに見える。

まるで私は彼の私生活を知っているとマウントを取る悪女のような  
だった。

「あの人、アイドルに対してよりもよってラーメンって……」

円香の声色は酷く苛ついている。

アイドルは見られる仕事である。

だからこそ身体はしつかりと維持しなければならぬ。

そんな自分たちを連れて行くお店に選択するのがラーメンという

のは納得がいかなかった。

「え〜。でも円香先輩、雛菜達だって普段からハンバーガーとか食べてるでしょ〜?」

それに雛菜はその辺りちゃんとしてるよ〜と煽るように言ってくる。

そう、それは円香自身分かっていた。

普段からトレーニングや私生活で健康管理はしっかりとしている。アイドルという仕事を始めてからそれは切っても切れないものになった。

応援してくれているファンが見ているから。

決してあの人に見られているからとかそういうった事情はないと円香談。

「……それでも二人つきりで行くっていうのも、そこでカロリーの高いものを選択するのも、アイドルとしてどうかと思うし。それにあの人もあの人」

「円香先ぱ〜い。雛菜がプロデューサーの好きなものが食べたいって言ったんだよ〜」

———なんでプロデューサーを責めるの〜?

雛菜の声は深淵の奥底から聞こえる魔性そのもののように思えた。  
「び、びえええっ……」

小糸はその瘴気に当てられて、産まれたての子鹿の如く震えていた。

「……私も今度プロデューサーとラーメン食べに行こ」

「は?」

「あは〜」

「びえっ」

そして透の一言でさらに泥沼が加速した。

なぜプロデューサーとラーメンを食べに行っただけでこんなことになっているのか。

別にアイドルだから食生活に気をつけろだとか、二人きりで行くこと（これは多少問題ではある）を問題にしているわけではない。

プロデューサーは周りのことをよく気にしている、いやしてくれている。

食事に行く時は相手の状況で判断して店を選択しているため、ノクチルの4人は今までファミレスやお洒落な喫茶店などの選択肢が多かった。

故にプロデューサーの好きなもの、という選択肢であるラーメンは誰も行ったことはなかったのだ。

あの自分ではなく周り優先のプロデューサーの好きな店に連れて行ってもらった、これが4人にとって一番重要であり、引っかかっているところであった。

「やっぱり。みんなお疲れ様ー」

その時であった。

凍結した空間を粉碎するかの如く、スタジオの扉を開けて現れたのは件のプロデューサーであった。

タイミングが良いのか悪いのか。

彼の表情はのほほんとしている気がした。

「やは〜♡ プロデューサー〜。雛菜頑張ったよ〜」

そしてそんなプロデューサーの元へいち早く駆け寄り、抱きついたのは空間を凍結させる原因を作った雛菜。

その速度、縮地の如くであった。

「っと、こら危ないだろ。でも頑張ったなら褒めないかね。偉いぞー」

プロデューサーはそう叱りつつも、よしよしと頭を撫でた。

まるで愛犬を撫でる飼い主のようである。

「あは〜、くすぐりたいよ〜」

雛菜はそうは言いつつもめちやくちや嬉しそうである。

そう建前というやつであった。

以前プロデューサーはそう言われて、撫でるのを止めたら不機嫌になつて仕事にほんの少し支障がでかけたことがあつたため、取り敢えず撫でるのは止めないのである。

「ひ、雛菜ちゃん、ちよつと………」

そして小糸は小糸で万能地雷グレイモヤと化した幼馴染の暴挙を止めるべく動こうとする。

本来ならばここでこの状況を止めることが可能な人物がいるのだが。

「………」

「………」

今円香と透は無言で制汗スプレーを全身に吹きかけていた。

何ならタオルでさらに汗を拭き残しがないレベルで拭いていた。

彼女たちは今日の自主練をボーカルレッスンにしておけば良かったと後悔していた。

ダンスレッスンはボーカルレッスンに比べて汗を掻く。

当たり前のことであつた。

「小糸もありがとね」

するとプロデューサーはスマートフォンを取り出し、何かを打ち込むと小糸のポケットが振動する。

少しびっくりしながらスマートフォンを見るとメッセージアプリの『CHAIN』の通知が来ていたので覗いてみると。

『小糸にはいつも助けてもらつてるな。雛菜のこと本当にありがとね』

それを見た小糸はすぐに顔を見上げ、プロデューサーに視線を向ける。

プロデューサーはニコリと小糸にウィンクをして微笑んだ。

本当にプロデューサーさんはわたしがいないとダメダメなんですから………！

彼女も彼女で駄目な様子であった。

既に小糸の表情は後方彼女面というべきか、周りのちよつと子供っぽい友人達を大人っぽい彼と並んで笑いながら面倒を見てると言うやつだ。

やれやれと言いつつも嬉しそうな一昔前のラノベ主人公のようでもある。

「貴方はいつまで雛菜と抱き合っているつもりですか。ミスター・ロリコン」

そして全身フローラルな香りに身を包んだ円香は漸く復帰したのか、いつもの罵倒混じりのコミュニケーション方法でプロデューサーへ寄っていく。

ロリコンと言う割りには円香も円香でプロデューサーと一步半程の距離まで近づくあたり、本心では思っていないのは確かであった。「いやこれは抱き合っているというか、抱きつかれたというか……」  
「雛菜のせいにするんですね。そういうの責任転嫁って言うんですよ」

「疑わしきは罰せずという言葉があつてだな」

「プロデューサー、別に雛菜は良いんだよ」

「……っ！」

「そんな鋭い眼光で睨まれてもなあ。あと小糸、スマホ見てニコニコしてないでこの子達止めるの手伝って」

「えい」

そしてそんなやり取りの最中、プロデューサーの背中から挟み込むように汗対策ばつちりな透がピツタリと抱きついた。

淡いサボンの香りが立ち上がる。

実はプロデューサーがここに来た時点で一目散に行きたかったのは透であった。

故のこの行動（バックスタブ）である。

「こら透。俺の背後を取るとは……やるな」

「うん、みんなに構ってばかりで隙ありだったよ」

透の何故か自分を少し責めるような発言にプロデューサーは脳内にクエスチョンマークが浮かんだ。

彼はただ仕事の合間を縫って、練習の様子を見に來ただけだということに。

この状況、理不尽極まりない。

「透も早くその男から離れて。貴方もされるがままなのは何なんですか。女子高生を侍らせて楽しいんですか、ミスター・ハーレム」

「うん、まあ性犯罪者とか言わないでくれたのは良かったかな」

プロデューサーが引き剥がさないのは下手に触れてセクハラになるのを恐れているからである。

先程雛菜の頭を撫でていたのは関係性からそこまでは許されているのを確信しているからこそその言動であり、且つ雛菜の機嫌が良くなくなり、仕事にプラスになるのであればやらない手はない、というのがプロデューサーの出した結論であった。

まあ、円香の当たりの強さは今に始まったことではない。

初めて会った時からである。

悲しくはなるが。

「そうだ、ちようどお昼の時間だから一緒にご飯食べに行かないか？奢るぞー」

プロデューサーは思い出したかのようにそう提案する。

そもそもの目的は様子を見に來たというものはあるが、実際は昼食を奢りに來たというのがメインであった。

こういった積み重ねが仕事のしやすさに直結するのである。

「行くー♡」

「うん」

「い、行きますっー！」

「…………… 相変わらずご機嫌取りが上手ですね」

円香に関しては分かりづらいが全員が行くと、承諾してくれたようだ。

プロデューサーは少し安堵した。

この謎の状況を取り敢えず打破できたのは僥倖なのか。

この所、こういった事例が発生することが多くトラブル解決能力が上昇していると少し思い始めたプロデューサーであった。

まあその分財布が軽くなっているのだが。

「みんな何か食べたいのがある？」

この付近だとランチをやっている喫茶店やスペインバル、イタリアンもしくは普通にファミレス辺りかなと目星をつけるプロデューサー。

プロデューサーの基本スキルとしてスムーズに店選びが出来るというものがあり、これは取引先との接待で身につけた技能である。

こういった時、慌てなくて済むのは習得できて良かったとプロデューサー談。

「プロデューサー（貴方）（プロデューサーさん）の好きなもの」「二人の二人称は別としてシンクロしたその要望はプロデューサーを困らせるものだった。

そんなこと普段彼女たちは滅多に言わないのにと、頭を抱えそうになる。

「……うーん、そうだな」

ここで再度、彼女たちに問いかけても同じ返答しか帰ってこなさそうだと判断したプロデューサー。

少し思考の海へと入る。

さあ、ここでもうお分かりだとは思いますが彼女たちはプロデューサーに対して複雑な感情を抱いていることは最早言うまでもないと思う。プロデューサーの好物を食べたいというのはそういった感情から来た可愛い要望なのである。

浅倉透は過去にある公園のジャングルジムでプロデューサーと出会った。

曰く、一目惚れ。

樋口円香は幼馴染みが突然アイドルになると言い出し、それを心配して事務所に突撃したときにプロデューサーと出会った。

曰く、監視のため。

市川雛菜はアイドルになった幼馴染みに影響され、オーディションへ参加し、そこでプロデューサーと出会った。

曰く、幸せのために。

福丸小糸は幼馴染み全員がアイドルになり、置いてきぼりになるのを恐れ、オーディションへ参加しそこでプロデューサーと出会った。

曰く、追いつくために。

各々が自身の目的のためにアイドルになった彼女たち。

ここまで来るのに様々なことがあったのだが、今やアイドルになる前の4人とはかなり変わった。

良い意味でも悪い意味でも。

抱えていた彼女たちの問題をプロデューサーが親身に解決した結果である。

彼女たちの世界は彼女たちの世界で完結していたのをプロデューサーがこじ開け、世界を広げた。

彼にその自覚はないが、彼女たちは全員の共通認識である。決して口には出さないが。

思春期とも呼べる多感な時期に出会って（喰らって）しまった強烈な男性観破壊。

既に彼女たちは元には戻れなくなっていたのだ。

元の男性観に。

「じゃあ、俺がよく行く町中華にでも――」

その時、彼のスマートフォンが鳴った。

ごめんと一言良い、電話に出るともしもーしと会話を始めた。

どうやら仲の良い仕事先の人のようだ。

4人は少しムツとしつつも仕事の邪魔はしてはいけなさと少し静かにする。

するとそのままプロデューサーはスタジオを出ていった。

この時、4人を謎の直感が襲い、スタジオの扉へ向かい、そして少しだけ開けた。

プロデューサーは少し離れた自販機の近くで会話をしているよう

だったが声を聞き取ることができた。

「ええ、はい…… ああ、大丈夫ですよ」

「にこやかに話を進めるプロデューサー。」

良い仕事が出来たのか、そう4人は思っていたがその先の言葉を聞いて時間が止まることになった。

「俺もあと半年なんで、ちゃんと引き継ぎの準備は進めてますよ」

## 王国崩壊編Ⅲ

「なーちゃん、どうしたの……？」

283プロダクションは事務所とは言うが作りは住宅のようになつていた。

そのリビングスペースと皆が認識しているその場所に二人の少女がいた。

大崎甜花と大崎甘奈の双子の姉妹アイドルである。

姉妹でアイドルというのは昨今珍しくもないが、双子ともなれば希少性は増す。

そんな彼女達はオーディションで採用され、今はもう一人のメンバーと『ALSTOROMERIA(アルストロメリア)』というアイドルグループに所属している。

そんな二人は現在、ソファに並んで座り、そのもう一人のメンバーを待っていた、のだが。

どうもなーちゃんと呼ばれた少女、大崎甘奈の様子がおかしいようで、姉である大崎甜花は心配そうに妹を見ていた。

「…… あっ！ ううん、何でもない。大丈夫だよ」

ごめんね甜花ちゃんと、甘奈は明らかに大丈夫ではない様子でそう言う。

その様子を見た甜花はあわあわと両手が行き先を探して宙を泳いでいた。

今の甜花にこの状況を打破する方法はあるのだろうか、そう考えているとピコンと頭上で何かが光った。

「お、お菓子食べようか……」

何だそれは、その手は弱すぎる。

それで何を打破できるのだろうか。

この姉、生まれて十数年、妹に介護されてきた女である。

「ごめんね、甜花ちゃん、お菓子持ってくるね」

逆に妹に気を使わせてしまったと甜花はソファに転がることになった。

甘奈はお菓子を取りにソファから立つと、キッチンへ向かう。甜花はその様子を無力にもただ眺めることしかできなかつた。

「なーちゃん、どうしたんだろ……」

しかし、大事な妹がこんな様子なのは本当に心配である。

今日は朝、甘奈に起こされて甘奈の作った朝食を食べてその後甘奈に髪の毛のセットと化粧をしてもらい服の選定をされ甘奈と一緒に家を出て事務所に行って時間を潰してプロデューサーに車で撮影スタジオ（女性ティーン向けファッション雑誌の撮影）に連れて行ってもらう撮影が終わってタクシーで事務所に帰ってきたところだ。

今日は一応朝食を最後まで一人で食べられたので頑張ったはずである。

あ、もしかしてと甜花は閃いた。

「……プロデューサーさん、途中で帰っちゃったから、かな？」

本来ならば今日の撮影は最後までプロデューサーと一緒にいたはずだったが、途中で別の仕事ができしまい抜けることになってしまった。

それを告げられた甘奈が、儂げに大丈夫と笑っている顔が甜花には印象深く残っていた。

強がっているのが明らかに分かる程であったが、プロデューサーがごめんの後に一言。

『俺はいつも甘奈には助けられてる。そんな甘奈だからこそ安心して任せられるんだ』

だからお願いなど、そう言われた甘奈は少し頬を緩めて微笑んだ。

『甘奈に任せて、プロデューサーさん』

そんなやり取りをしていたなど甜花は思い出す。

甘奈ちゃんは相手に尽くす自慢の妹だなど、改めて自分は恵まれていると思つた。

しかしそこでふと甜花は思った。

このやり取りをしている可愛い妹のどこに曇る様子があるのだろうか。

思い返してみても思い当たらなかった。

「うーん……」

甜花が唸って考えていると、両手にお菓子を抱えた甘奈が戻ってきた。

最後までチョコたっぷりなやつに太陽神の名を冠するやつ、コアラ  
の行進曲など他にも様々なお菓子があつた。

「にへへ……なーちゃんありがと」

お菓子が大好きな甜花は先程のことを一瞬忘れて笑みを零す。

この姉は。

「お菓子は皆食べるからたくさんストックしてるんだー」

この事務所は基本的に十代半ばの女の子がほとんどを占めている。

かつ事務所自体居心地が良いのか、よく屯してお喋りをしていることが多い。

お硬い事務所ではないので余程の事が無い限り、それを注意することもないので、彼女達の中では家みたいな感覚で過ごしている。

社長も特に何も言わないのでプロデューサーも許しているどころかそれを利用して、アイドル達とのコミュニケーションを深め信頼を積み重ねている。

例えばここにあるお菓子は色々な人物達が買ってはストックしてを繰り返しているが、実は最初に始めたのはプロデューサーであった。

アイドルからの信頼を勝ち取るために様々な施策を講じている彼であつたが、アイドル同士のコミュニケーションも重要である。

なぜなら彼女達の仲が悪いと、この事務所の居心地までもが悪くなってしまう、それはプロデューサーにとって一番忌避すべき事であつたからだ。

故に円滑に仲を深めるためのサポートとしてお菓子を置いていたのだが、今ではアイドル達がたくさん持ち寄るようになったため、プ

ロデューサーもその頻度は減っていった(それでも置いてはいるが)。  
「……それ珍しいね」

甘奈が持つてきた多数のお菓子群の中にはドラ焼きがあり、青い猫型ロボットが食べているイメージが甜花の脳内に浮かんでいた。

「うん、プロデューサーさんがお仕事先で貰って来たんだって」

そう言いながら、甘奈は徐ろにスマートフォンを取り出し操作すると、それを甜花に見せる。

「……にへへ、可愛いね」

そこにはプレゼントの箱を差し出すユアクマが描かれたメモが写真に収められていた。

相変わらず上手だなと、甜花は前にデビ太郎の絵を描いて貰った事を思い出す。

あれはまだプロデューサーとそこまで仲が良くなかった頃、事務所でたまたま一人になってしまった時だった。

不安を抱えながらソファでじっとしていると、そこにプロデューサーが帰ってきた。

かなり気まずかったのを覚えている。

挨拶をした後に少しの沈黙。

するとプロデューサーはメモ用紙に何やら書き始め、それを甜花へ見せてきた。

『じゃーん。見て見て』

メモにはデフォルメされた可愛いデビ太郎が描かれていた。

思わず可愛いと呟いた甜花。

プロデューサー曰く。

『可愛いぬいぐるみ持つてるなって思ってたさ。デビ太郎って言うんだろ？ けっこうグズズとか出てるのなー』

そう言ったプロデューサーに思わず、デビ太郎のことを力説してしまったのだが、言つてすぐに後悔していた。

いくら話を振ったのがプロデューサーとは言え、1を振って10が返ってきたらドン引きされるのではないかと、そう思っていたのだが。

『ううん、寧ろもつと聞きたいよ。だって甜花さんが居なかつたら俺はデビ太郎について知らなかつたかもしれないし。あと甜花さんともう少し話してみたかつたんだよね』

そう言ったプロデューサーは少し恥ずかしそうにしながらも笑っていた。

それを見た甜花も釣られて少し笑った。

最初のイメージがカッコいい大人のお兄さんというイメージだったのだが、可愛いところもあるんだなと甜花は認識を変えることになったのだ。

そんなきつかけから甜花のプロデューサーへの壁は少しづつ崩れていき、今ではプロデューサーとは二人きりでも問題なく話せるようになったどころか、甘奈と変わらない距離感で接せられるようになった(?)。

ちなみに現在プロデューサーのデスクの上にはデビ太郎にユアクマ、エン次郎(デビ太郎の弟)のマスコットが置かれている。

「……はあ、ほんと可愛いなあ」

写真を見る甘奈の表情は恍惚であった。

これは可愛いと認識しているのはユアクマの絵ではなくそれを描いているプロデューサーに向けてのものだろう。

現に彼女のスマートフォンの写真フォルダにはプロデューサーのメモシリーズが何枚か収められている。

これもちなみにはあるが、甘奈と同じことをしているアイドルは他にも何人かいたりする。

「ごめんね、待たせちゃって」

するとガチャリとドアが開く音がする。

そこには二人よりも歳上の女性がいた。

桑山千雪、二人が待っていたアルストロメリアの最後のメンバーである。

「千雪さん、ごめんね。お休みだったのに」

甘奈は千雪へ謝るとお菓子どうぞと言ってお菓子群を指した。

「あらこんなにくささん…… ドラ焼き? 珍しいわね、しかも○

屋……」

「プロデューサーさんが、貰ってきたんだって……」

甜花がそう言うと、甘奈がスマートフォンを千雪に差し出す。

「ふふふっ、可愛いわね」

千雪の表情が緩み、微笑んだ。

やはり思う感想は皆一緒であった。

しかし千雪の感想は、ユアクマとプロデューサー、どちらに対してなのだろうか。

どちらもなのか、そういったことに疎い甜花には分からなかった。

「それで、甘奈ちゃん。どうしたの？ 話って」

各々お菓子を食べつつ（皆ドラ焼きを最初に食べていた）、少しお喋りをしていると、本題を千雪が問うた。

そう、今この時間事務所に集まっているのは甘奈の提案であった。

本来仕事も午前中の撮影で今日は終わりであり、千雪も休みの日であったのだが、甘奈が大事な話があるとグループCHAINにメッセージが来たのだ。

あつと甜花は思った。

その件で甘奈の様子がおかしかったのかと。

「うん、あのね。実はプロデューサーさんのことなんだけど……」

「プロデューサーさんのこと？」

ゆっくりゆっくりと話す甘奈。

あのいつも明るい甘奈の様子から見てただ事ではないと思った千雪は慎重に問いかける。

「これを見て欲しいんだけど……」

差し出されたスマートフォンには先程のユアクマのイラストではなく、別の写真が表示されていた。

「これって……」

「な、なーちゃん……？」

衝撃があまりに強かったのか二人の表情が困惑で染まる。

甜花に至っては持っていたコアラの行進曲を落とす程であった。

そこに写されていたのは――

プロデューサーが女性と町中を歩く姿であった。

「うん、甘奈もびっくりしちゃって……」

甘奈の表情が曇る。

そう、甘奈の衝撃は相当なもので、それは休日たまたま一人で買い物をしていたときだった。

スーツ姿ではあるが知らない女性と楽しそうに街を歩いているのを見かけてしまったのだ。

思わず写真を撮ってしまったのは仕方のないことだった。

甘奈はプロデューサーが好きなのだ。

勿論恋愛的な意味で。

本気で恋する5秒前とかではなく本気で恋して31536000秒後（実はそれ以上）と言ったところである。

多感な年頃の女子高生で普段は姉の面倒をたくさん見て頼られる側だった彼女が、アイドルになって出来た頼れる歳上の男性。

しかも容姿端麗で身長もかなり高く、物腰も柔らかかたまたま出る子供っぽいところまで甘奈にとってみれば最高に突き刺さっていた。

どストライクどころか貫通した弾丸は地球を一周していた。きっかけは何だったのだろうか。

出会いから蓄積していったものはあっただろうが、引き金を引いたのは学校の同級生にプロデューサーと一緒にいる所を見られた事がそうかもしれない。

夕方からの仕事で学校にプロデューサーが車で迎えに来た時だ。

プロデューサーは気を遣って校門から少し離れたところに車を停めて待っていたのだが、それでも見られてしまうのはどうすることも出来なかった。

たまたまプロデューサーが近くの自動販売機に飲み物を2つ購入しに行き、車に戻ったときに甘奈が居た。

時間より少し早い到着ではあったがプロデューサーはごめんと謝って鍵を開けた。

そこで一言二言会話をしたのだがそれを見られていたようで、後日同級生からは追求を受けた。

同級生の評価はカッコいいや頼りになりそうなどの良いものばかりであり、甘奈はその時何故か自分のことのように嬉しかったのだが、その後爆弾を放り込まれた。

『あんなカッコいい人が近くに居たらそりや学校(うち)の男子はガキにしか見えないよね』

そう言われて気づいてしまったのだ。

甘奈の人生において男子に告白されたことは結構ある。

しかし一度も告白を受けたことはなかった。

勿論嬉しい気持ちはあったが、それでも何か違うと感じていた。

そこで甘奈は告白してきた男子をプロデューサーに置き換えたことで答えを見つけてしまったのだ。

妄想の自分はその告白に対しオーケーの返事を即答していた。

なぜ、と思ったがプロデューサーとなら付き合ってみたい、それどころか一緒に住んで料理を食べてもらって一緒に寝て両親に挨拶をして結婚をして家族が増えて――先の方まで妄想が止まらなかった。

それ以降、甘奈はプロデューサーへの好意を完全に自覚したのだ。

故に甘奈が街でプロデューサーを見かけたときの絶望は尋常極まらないものであった。

「み、見間違いつてことは、ないのよね……？」

そう訊く千雪の表情は何かに縋るような危うさがあった。

「甘奈がプロデューサーさんを間違えることはないから…… うん」

「なーちゃん……」

甘奈がもし恋心を自覚していなければ見間違いの可能性はあったのだが、自覚したことにより常日頃彼の姿を追いかけてしまうように

なってしまうた。

だからこそ向上した認識能力はかなり精密なものになってしまっていた。

それ故の”確定”という悲劇。

その日、甘奈は枕を濡らした。

「でも、まだプロデューサーさんこの人がそういう関係とは言い切れないんじゃないかしら。お友達の可能性もあるわけで」

千雪の言葉は間違いではない。

何なら甘奈の状況判断が尚早過ぎるのだ。

確かに好意を抱く甘奈だからこそ最悪の方向へ考えてしまうのは仕方のないことかもしれない。

「でも、多分だけど仲良さそうに歩いていたし」

「そうだとしてもこれだけでプロデューサーさんに恋人が居るって判断は難しいと思う」

ただ街を異性が一緒に歩いているだけで恋人と断定するのであれば私達はどうなるのと、その千雪の発言で甘奈はハツとした。

プロデューサーとこの事務所のアイドル達の距離感はかなり近い。

それは傍から見ても明らかで、楽しそうに会話しているのを見て少しモヤモヤするアイドルも多い。

そう、そうなのだ。

確かに仲良さげで歩くだけで恋人になれるのだとしたら、とつくに甘奈とプロデューサーは恋人同士じゃないかと。

しかしその事実はいええない（今の所）ので————とどのつまりそういうことになる。

甘奈の瞳に少しではあるが光が戻ってきた。

「……………千雪さん、す、すごい冷静だね。か、かつこいい」

甜花は自身の妹を闇から引きずり出してくれた千雪に羨望の眼差しを向ける。

「流石、大人の女性だ。」

あるアイドルが事務所に所属するまでは最年長であっただけあると、めちやくちや失礼なことを考えつつ。

願わくば千雪に読み取られないことを祈るのみである。

「そんなことないわ、甜花ちゃん。私も実際にその場面に遭遇したら多分甘奈ちゃんと同じこと考えていたかもしれないし」

甘奈が焦燥しているのを見て逆に冷静になった千雪。

彼女の言うことは本当であった。

友達などのグループでお化け屋敷に入った時に、周りが凄く怖がっていたら逆に怖くなくなるあれである。

そもそもであるが、プロデューサーに恋人がいるという事実は千雪にとつて今一番恐れていることである。

想像するだけで気持ちが落ちていってしまうが、ある意味甘奈の陰でそれは防がれた。

ここまで来たら分かると思うが、桑山千雪はプロデューサーに好意を抱いている。

勿論、恋愛的な意味でだ。

初めて会った時、スーツのボタンが取れかかっているのを見かねて直した時から千雪はプロデューサーに対して一目惚れをしていた。

そもそも普通に考えて初対面の男性のスーツのボタンをその場で直してあげるなんてありえないだろう。

人間というのはそこまで出来た生き物ではないのだ。

逆に考えればそこまでしてあげたいという気持ちの表れといつてもいいだろう。

そして千雪からしてみれば年齢的にも近く、互いに成人していることもあり歳下のアイドル達の面倒を見るといっても共通事項が多い。

そしてお酒を飲めるといっても成人組はたまにプロデューサーと飲みに行くことがある。

以前、どうにか個室の居酒屋で二人で飲むという状況まで持ってい

き、酒類をどんどん頼んでいったことがあった。

完全に女を喰うヤリ○ンと同じ手法である（お酒は用量用途をきちんと守って楽しく飲んでください）。

こちらの好意に気づかないプロデューサーへのある種の奥の手であつたのだが、結果はまあお察しの通りである。

アルコール耐性がランクAくらいあつたのだあのプロデューサー。

最終的には酔いつぶれた千雪を自宅まで一緒にタクシーに乗ってきちんと送り届け、終電も終わっていたので徒歩で2時間程かけて帰った男だ。

なんだこいつは、据え膳を知らないのかと罵倒されてもおかしくないが彼は真性のプロデューサーであつた、それが答えである。

後日ひたすらプロデューサーに謝り倒したのは言うまでもない。

今思えば、あそこまで積極的だったのは自分が少しおかしくなっていたのかもしれないと反省する千雪であつた。

しかしである。

前述の通り、千冬は未成年のアイドル達と違ってかなりのアドバンテージを有している。

有しているのにこの鉄壁ぶりなのである。

千雪の容姿は一言で言えばかなりの美人だ。

スタイルもよく巨乳である。

並の男なら秒でノックアウトされるのは必至であるのだが、そんな手法が通じない鉄壁のプロデューサーだからこそ、ある意味逆の信頼感があつた。

この人の恋人になるのは並大抵のことではない。

故にプロデューサーに恋人がいない理由付けになっていた。

勿論確定ではないのだが。

「でもこの女性が誰なのかは気になるわね。一体誰」

「戻りましたーって、あれ？」

さあ件のプロデューサーである。

「あ、プロデューサーさん！ おかりなさい！」

「にへへ、お、おかえりなさい」

「プロデューサーさん、おかえりなさい」

3人は先程まで会議をしていたとは思えない様子で彼に対して挨拶をしていた。

表情は笑顔である。

「撮影終わったら直帰じゃなかったっけ？ それに千雪は今日休みだったよね」

プロデューサーは当然の疑問に帰結する。

確かに居心地が良いのかたまに休みなのに事務所に来てお喋りしているアイドル達を見るが、それでも疑問には思うのだ。

「あ、うん。それは――」

「この後、二人とお出かけする約束をしてたんです。なので事務所集合にさせてもらいました」

すみませんと、甘奈への千雪のナイスアシストが炸裂する。

これによりプロデューサーの彼女たちへの疑問は消滅した。

甜花は心の中で拍手を贈る。

「それなら大丈夫だよ。ただびっくりしただけだから」

はははと笑いながらビジネスリユックを置いて、持っていたペットボトルの飲み物を飲む。

クラフト〇スのブラックコーヒーであった。

「あとはずきさんはお出かけ？」

「……郵便局に行ったよ。出すものがあるって」

オーケーありがとうとプロデューサーはお礼を言うと、ぽんぽんと甜花の頭を叩くように撫でた。

これもきちちゃんと距離感を理解しているプロデューサーだからこそできる芸当である。

少し嬉しそうにする甜花とそれを見て羨ましそうにする甘奈と千雪であった。

「あ、ドラ焼き食べた？」

そこから始まる雑談に花を咲かせていると、プロデューサーのス

スマートフォンが鳴った。

「ごめんと行って、少しその場を離れるプロデューサー。」

仕事モードのプロデューサーは相変わらずカッコいいなと改めて思うアルストロメリア。

短時間ではあるが彼女達の視線がプロデューサーの方へ注がれる。

「はい、そうですね。その件に関しては既に話を進めております」

プロデューサーがめちやくちや仕事が出来るといふのはこの事務所  
の共通認識である。

この事務所で彼の仕事に文句を言うものは誰一人としていなかった  
(表面上は別であつたりするが)。

「……はい。ああ。その件につきましては既にメールで関係者全  
員に送っておりますので詳細はそちらをご確認いただければと」

いえいえ大丈夫ですよと返すプロデューサー。

どうやら順調に仕事の話は進んでいるようだ。

そんな様子を見て安心する3人であつた。

言い方はあれだが、多忙なプロデューサーなら恋人を作る時間は無  
さそうだなと、あの女性とはそんな関係ではないと、そう自分達の中  
で一つの区切りとして“確定”させた。——はずだった。

「え？　ああ、はいとても順調ですよ。——まあ  
恋人みたいなものです」

はははと楽しそうに笑うそんなプロデューサーに対して、3人は上  
手く笑うことが出来なかった。

## 王国崩壊編Ⅳ

「むむ、これは……?」

283プロダクションのキッチンにプロデューサーが描いたであろうユアクマの絵がメモ用紙に描いてあり、セロハンテープで箱に留められていた。

中にはドラ焼きが何個か残っており、どうやら早いもの勝ちということらしい。

「ふむ…… 美琴さんに持っていこう、と思っただけど……」

食べてくれるかなあ、そう思いつつドラ焼きを2つ取ったのは七草にちか。

彼女は『SHHis(シーズ)』という二人組のアイドルグループのメンバーの一人であり、この事務所の事務員の妹でもある。

そう例のプロデューサー監禁脅迫事件の当事者である(なお知っているのはプロデューサーとにちかだけである)。

美琴、というのは同じグループのメンバーでにちかが敬愛してやまない緋田美琴のことである。

確か彼女は近くのレッスン場で自主練習をしていたはずと、背負っていたリユックにドラ焼きを入れるとスマートフォンを取り出した。

「ど・ら・や・き・も・ら・い・ま・す・ね、と」

あとお仕事も終わりましたと、慣れた手付きでメッセージを打ち込んだのは自身のプロデューサーの個人CHAIIN。

そのプロデューサーとの最新の履歴は今朝、午前5時24分のメッセージのやり取りは以下の通りである。

『おはようございます』

『おはよう』

『今日は一人で現場行ってきますね』

『悪い、頼むよ。いつものスタツフさんだから問題ないと思うけど、何かあったら連絡して』

『はい。あ、ちゃんと朝ご飯食べてくださいよ。カ〇リーメイトと

かじゃなくて』

『はいはい、分かってるよ』

『ほんとにわかってます?』

『あとでちゃんと朝飯の写真送る』

『それで良いです!』

そしてその約一時間後、車内で撮影したであろう朝ご飯のハムレタスサンドイッチ1つとタマゴサンドイッチ2つに蒸し鶏入りのサラダとペットボトルのブラックコーヒーの写真が送られてきていた。

プロデューサーさんって案外たくさん食べるんだよねえと、少しニヤニヤしながら合格ですと描かれたスタンプを送ったの数時間前の話だ。

実はプロデューサーが健啖家というのは283プロダクション内でも少しづつ広まっている情報であった。

彼は普段アイドルの前ではそこまでたくさん食べたりはしない。

それはアイドル達と食べる時間を合わせるためである。

量が多いとそれだけ時間がかかるが、量を調整すれば早く食べ終わるにしろ遅れることはない。

まあ、それでも時間はピッタリと合わせるのがプロデューサーであるのだが。

ちなみに彼がたくさん食べることが知ったアイドル達はいつも通り食べて欲しいと言って、その姿をニコニコしながら眺めていた。

「あ、返信来た」

スマートフォンが振動し、画面を開く。

そこにはOKと描かれた看板を持ったデビ太郎のスタンプが表示されていた。

「む、スタンプだけ」

少し待ったがこれ以上返信は来ないようだ。

そのことにちかかはムツとしつつもスマートフォンを仕舞い、美琴のいるレッスンスタジオへと向かうことにした。

「…… お疲れ様とか送ってくれてもいいのに」

ボソリと呟くにちかの表情が曇っていく。

スタンプ一つで雑に返されたことがお気に召さないようだった。

いや、にちか自身分かつてはいるのだ。

プロデューサーはとても忙しい。

CHAINにすぐ返信してくれたのだって、たまたますぐスマートフォンが見れる状況だからなのだろう。

もしかしたら電話が入ったのかもしれない。

それならメッセージを送信出来なくてもおかしくはないし、なんなら長文で入力中の可能性もある。

か。  
なぜこんなにモヤモヤしなくてはいけないのだろうか。

そこはにちかも分からなかった。

心に針が刺さったような感覚。

タスクの優先順位があることくらい分かっている、分かっているのだが彼女はまだ子供である。

それ故に感情が優先されてしまう。

芸能界というある意味で一番厳しい社会に入った彼女もその部分は大人には成り切れていなかった。

「あ、にちか」

事務所から出ようとドアノブに手をかけたところで呼び止められる。

「なあにお姉ちゃん、今から美琴さんのところ行くんだけどー」

彼女を呼び止めたのは、にちかの実の姉であり事務員でもある七草はづきであった。

その手には封筒が握られていた。

「郵便局行ってこないといけないからちよつと留守番してくれる？」

出鼻を挫かれるとはこのことなのだろう。

ただでさえプロデューサーから返信が来ないにちかにとってそれはイライラを加速させるものだった。

それにいち早く敬愛する美琴の元へ向かいたいというのもあった。

「すぐ戻ってくるし、それに今日もう仕事も終わりでしょう?」

「えーやだー。この時間だともう少しで誰か帰ってくるでしょ」

それは急ぎなのかと、にちかは続けた。

実の姉ということもあり、そのやり取りは気安さがある。

これがかもし別の所属アイドルや社長であれば断ってはいなかっただろうが相手が相手なので、にちかも拒否という体勢になった。

「別に急ぎじゃないけど、忘れないうちに出しておきたいの」

「それなら忘れないようにメモでもしてればいいじゃん」

「……あのね、少しくらい良いでしょう。何か予定でもあるの?」

「ありますー。美琴さんにドラ焼きを届ける用事がー」

「それこそ後でも良いでしょう」

「あー今日は業務終了で――あつ」

姉妹の言い合いに火花が散りかけたその時、ポケットでにちかのスマートフォンが振動した。

サツとすぐに画面を確認するとそこにはプロデューサーと表示されていた。

『撮影お疲れ様。スタツフさんから頑張ってたって聞いたぞ』

『鼻高々ってこういうこと言うんだらうな』

『寄り道しないで気をつけて帰りなよ』

そしてユアクマのありがとうと描かれたスタンプが来る。

にちかの心に刺さっていた針はいとも簡単に抜けてしまった。

そもそも刺さってなどいかなかったのではないかというレベルで彼女のメンタルは全快していた。

「ごめーん、行かなきゃー!」

「ちよ、ちよつとにちか!」

韋駄天の如く、事務所から走り去っていくにちか。

それを後ろで溜め息を吐きながら、ガクリとするはづき。

「……反抗期、かしら」

まあ誰か帰って来たときで良いかとはづきは切り替え、プロデューサーが貰ってきたドラ焼き食べようとキッチンへと向かった。

その戻り際、彼の描いたイラストを撮影して。

「……………返信遅いんですよ全く」

そしてにちかは事務所から少し離れたところで止まると、CHAI Nを開き返信をした。

気のせいか打ち込む速度がいつもより早い気がする。

『当たり前じゃないですか。もうアイドルになって一年も経つし、私だって成長してるんですよー!』

『えー! 女子高生に寄り道しないでとか過保護でおじさんみたいみたいですよー!』

『どうしよつかない。寄り道して帰っちゃおうかなー』

ニコニコしながら文章を打ち込むにちかの姿は誰が見ても嬉しそうだった。

『それは分かっている。にちかは毎日ちゃんと成長してるよ』

『過保護とそれは関係ないだろ。でもおじさんかー。まあ26ってアラサーだし仕方ないね』

『はいはい、寄り道して良いけど気をつけて帰りなよ』

そしてプロデューサーからすぐに返信は返ってきた。

ニコリ表情の丸顔のキャラクターのスタンプを送ると、プロデューサーから同じく頷いている丸顔のキャラクターのスタンプが返ってきてにちかは大満足した。

彼女はよく彼が歌っている鼻歌を歌いながら、足取り軽やかに最寄りの駅まで歩いていった。

「ドラ焼き? ありがとう、にちかちゃん」

ダンスレッスンの休憩中、スタジオにやってきたにちかからドラ焼きを貰うのは件の緋田美琴である。

彼女はつい最近までゼリー飲料やブロック栄養食などしか食べていないという、全く食に関心がない割りとやばい食生活をしていたのだが、にちかやプロデューサーによって漸く少しはまともな食事を摂るようになった。

「プロデューサーさんがお仕事先でもらってきたらしいです！しかも高そうな箱に入ってたので美味しいはずです！」

「ふーん、そうなんだ。じゃあ食べないとね」

にちかにそう力説され、少し微笑みながら早速ドラ焼きを開封し食べる美琴。

「ん、甘いね」

「はい、甘いです」

休憩スペースのベンチに並んで座り、仲良くドラ焼きを頬張る二人。

暫しの沈黙。

だからといって気まずいということもなく、ドラ焼きを食べ進めた。

そしてドラ焼きを先に食べ終わったにちかが切り出した。

「美琴さんはこの後はどうされるんですか？」

「うーん、もう少し練習していいこうとは思ってるけど」

続いてドラ焼きを食べ終わった美琴は包み紙をまどめながらそう答えた。

「美琴さん、何時から練習してます？」

「ここが開く時間から、かな」

このダンススタジオの始業時間は8時からである。

現在の時間は13時半過ぎ。

既に5時間以上ぶっ続けて練習をしていることになる。

「……お昼は食べました？」

「うん、食べたよ。サラダチキン一個」

「……それだけですか？」

「うん…… あ。あとゼリー食べたよ、マスカット味」

「…… 美琴さん、ご飯を食べに行きましょう」

「どうやらまだ食生活の完全改善には至らないようだ。」

「にちかはスマートフォンを取り出すと付近の飲食店を調べ始める。」

「でもあまりお腹は空いてないよ」

「プロデューサーさんがそれ聞いたら多分怒りますよ」

異常な食生活を送って倒れそうになったとき、珍しくプロデュー

サーは怒っていた。

怒るといつても怒鳴るとかそういったものではなく諭すような言い方ではあったが。

「むっ、それは良くないね。プロデューサーの怒った顔は見たくないし」

プロデューサーと言われ、意見を180度変える美琴に苦笑いするにちか。

美琴はレッスンの鬼でその制御は難しいところがあるのだが、プロデューサーを絡めればある程度の制御が効くのであった。

それを見ていたにちかは少し呆れながらこう思っていた。

？  
—— プロデューサーさんのこと好きすぎじゃないですか

勿論、信頼という意味なのだろう。

あのアイドルになるために生まれてきたような美琴だ。

そのトップアイドルを目指すストイックな姿勢からは、どう見ても恋愛にうつつを抜かしているようには見えなかった。

「にちかはそんな美琴のことをとても尊敬しているし、そんなところが好きであった。」

「じゃあ、行きましようか。近くにヘルシー路線のカフェがあるみたいです。それにまだランチタイムにも間に合いそうですし」

「そう言いながらベンチから立ち上がるにちか。」

美琴もそれに合わせて立ち上がり横に置いていたポストンバッグ

を持つと、あつと声を出した。

「ねえ、行くんだったら。あそこが良いかな」

スマートフォンを操作し、にちかへ見せる美琴。

にちかは珍しいなと思いつつ、画面を覗き込んだ。

「中華料理、ですか？」

まさかのチョイスににちかは驚いていた。

確かにこのスタジオから近い距離にはあるのだが、ヘルシーとは真逆とも言えるそのチョイスをまさかあの美琴の口から聞くのは初めてであった。

「うん、プロデューサーに前連れてってもらったの」

そう言う美琴の表情はいつもキリリとしている彼女からはあまり想像できないような穏やかさであった。

食に関心がない彼女が行きたいということはそれ程までに美味しいお店なのだろうか。

「プロデューサーがよく行くお店なんだって言ってたよ」

青椒肉絲が好きでよく食べているとプロデューサーが言ってた、美琴はさらに続けた。

なぜかにちかの胸にチクリとした感覚を襲った。

「でも美琴さんが食べられる料理あったんですか？ 中華って脂っこいの多いですし」

「私は棒棒鶏を食べたよ。あとプロデューサーの青椒肉絲も少しだけもらったけど」

なるほどちゃんと食べられるものがあるお店に連れてったんですねと、にちかは納得した。

最初は美琴へのお店のチョイスとしてはセンスないなとにちかとは思っていたが、彼女のこの様子だと満足したのだろう。

プロデューサーさんも中々やりますね。

美琴の食生活改善はかなり難しいのであるが、プロデューサーのまさかのチョイスで改善は進んでいた。

そんな彼に負けられないとにちかは思いつつ、私もそのお店へ連れてって欲しかったと寂しさも感じながら地図アプリで先程のお店を検索した。

「じゃあ、そのお店に行きましようか」  
にちかの進言に美琴は頷くと、レッスンスタジオを後にした。

「まあまあでしたね」

プロデューサーに連れて行ってもらったという中華のお店は“T H E 町中華”と呼べる中々にレトロな店構えであった。

美琴は以前にも頼んだ棒棒鶏セット、にちかは青椒肉絲セットを注文した。

にちかは美琴の棒棒鶏も少し貰ったのだが、味に関しては可もなく不可もなく、といったところであった。

値段は意外に安めではあったが。

ちなみに美琴はにちかから青椒肉絲は貰わなかった。

「ん、そうかな？ 食べやすかったよ」

美琴は味について特に言及しなかった。

いや彼女に関しては美味しさにそこまでのこだわりがないだけなのであるが。

「…………… 次はプロデューサーさんに連れてってもらおう」

「…………… にちかちゃん？ どうかした？」

少し俯き何かをボソツと呟いたにちかへ、美琴は問いかけた。

聞き取れなかったためもしかして何か変なことを言ってしまったのかもしれないと少し心配していた。

「あっ！ 何でもないですよ！ 今度はもっと美味しいお店に行きましよう！ プロデューサーさんに奢ってもらって！」

ハッと我に返ったかのように、にちかはいつもの様子へ戻った。

美琴はその様子に安心した。

なぜなら先程のにちかは普段のにちかとは似ても似つかないオーラを出していたからだ。

一瞬無表情になったように美琴は見えていた。

「……………そう、だね。でもその時は私も私もお金出すよ」

「むっ……………それなら私も出しますよー！」

まあ結局プロデューサーが奢るって聞いて聞かないのだろうけど、そんなやり取りを二人はしながら帰路へつく。

練習に戻ろうする美琴を何とか抑え、にちははショッピングへ誘い  
どうか彼女にオーバーワークをさせないで済んだ。

「……………そうだっ」

するとにちははスマートフォンを取り出しCHAINを開く。

『美琴さんが練習続行しそうだったので一緒に買い物行ってきます  
ねー』

プロデューサーは美琴の過剰な練習を止めると褒めてくれるのだ。  
それはにちかの経験則だった。

『よくやった！』

『ナイスだ、にちか！』

『にちかが居てくれてマジで助かるよ』

『ありがとな』

そうやってプロデューサーはいつもにちかを褒めてくれたのだ。

それがにちかにとって、とてもとても嬉しかった。

後は返信が来るのを待つだけだと、そう思っていたときだった。

「プロデューサーからだ」

スマートフォン vibrations が聞こえる。

だがそれはにちかのもものではなく、美琴のものからであった。

しかもメッセージではなく電話。

「はい、もしもし。どうしたの？」

一瞬期待したのに、にちかの頭はスーッと冷めていく。

———  
なんだか納得がいけない。

「ああ、うん。この後はにちかちゃんとお出かけ」

「どうやらプロデューサーは自主練習をしている美琴を心配しての電話であったようだ。」

「練習に集中している美琴はメッセージでは反応しないのを見越しての電話なのだろう。」

「心の中で渦巻いていた気持ちをにちかは少し抑えることができた。メッセージを送った直後に電話がかかってきたということはタイミングがほぼ同時だったということだ。」

「決してにちかのメッセージを無視したわけではない、はず。」

「うん、うん……うん？　良いよ。ちよつと待って」

すると美琴はスマートフォンを耳から離し、画面のスピーカーボタンを押した。

『にちか、聞こえてるか？』

「聞きたかったプロデューサーの声に、にちかの心が少し舞い上がる。」

「にちかはやれやれといった体で声を出した。」

「はいはい、聞こえますよー」

『ありがとな、美琴を止めてくれて』

「ふふーん。もっと感謝してくれても良いんですよ」

「……私ってそんなに信用ないかな」

「少しシヨボンとする美琴。」

「こと過剰な練習において美琴に対する信用はあまりになかった。」

『ははは、ごめんごめん。そんなつもりはな———』

「私、プロデューサーの言う事ならしっかり聞くよ」

「なんでそんなこと言うの、美琴の声が一瞬で険しいものになっていった。」

「その声は街の喧騒の中でもしっかりと通っており、隣にいるにちかも思わず黙り込んでしまう。」

『……ごめん、そうだよな。美琴はちゃんとやってるよ。いつもあ

りがとな』

そのストイックな姿勢にいつも助かってるよ、そうプロデューサーは続けた。

「……うん、それならいいよ」

雲散霧消。

美琴が纏っていた鋭利なオーラは最初からなかったかのように消え去った。

にちかは無意識の内に安心して息を吐いていた。

『あ——————はい、あー！ お世話になっております————』

すると電話先でプロデューサーは誰かに声を掛けられたようだ。

少し会話が聞こえてきたが、仕事先の人のようだった。

電話を切つても良いような気がしたが、美琴はそれをしなかった。

寧ろ仕事中のプロデューサーの声を聞いていたいという気持ちが  
あり、そのままにすることにした。

にちかも気持ちは一緒であった。

プロデューサーも電話を切るの忘れているのか、その会話が漏れていた。  
いた。

『ははは、お久し振りです。ええ、ええ————』

プロデューサーの声はすっかり仕事モードに入っており、いつも彼女たちの隣で聞く彼のものになっていた。

それは所属アイドルたちが仕事中に一番安心できるもので、この声を聞くと緊張も解れた。

故に、にちかと美琴は電話を切らずに繋げたままにしてしまう。

それが二人にとって不味いものだった。

もし電話を切つていればあんなことにはならなかったのに。

『————あと半年になります、よろしくお願いしますね』

あと半年、彼のその言葉の意味をにちかと美琴は理解することが出来なかった。

## 王国崩壊編V

都内某撮影スタジオのとある楽屋。

今日はバラエティー番組の撮影があつたのだがそれも15分程前に既に終了していた。

つまりは現在、この楽屋には撮影が終わったキャストがいることになる、のだが。

「ちよつとあさひあんた！ 大御所の人になんて態度取ってんのよ！」

一人の見た目清楚に見える少女が鼻息荒くキレていた。

「えーでもあのおじさん笑ってましたし、後で良かったって褒めてくれたつすよー。冬優子ちゃん硬いっす。愛依ちゃんもそう思わないうっすか？」

あさひと呼ばれた小柄な少女はケータリングのお菓子を貪りながらそう返した。

ポリポリと食べているのはノレマンドである（美味しいよね）。

「あははは、まあまあ良いんじゃない？ 怒られたわけじゃないし」

愛依と呼ばれた明らかギャルな少女は苦笑しつつも二人を宥めようとしている。

どうやらこの三人の立ち位置はこういうものであるらしい。

怒っていた少女は黛冬優子、怒られていた少女は芹沢あさひ、そんな二人のクッションを努めていた少女は和泉愛依。

彼女たちは283プロダクションのアイドルグループの一つ、『Straylight（ストレイライト）』のメンバーである。

今日の撮影、バラエティー番組の出演は終始和やかに終わり、コーナの最後にはきちんと告知もできた。

成果としては上々で特段問題はないように思えるのだが。

「あのね、今回は良かっただけでいつもこんな感じに進むとは限らないのよ………」

冬優子は頭を抑えながら溜め息を吐く。

番組のゲストに大御所の有名衣装デザイナーの男性が来ていたのだが、その人物に対してあさひは――

『その衣装キラキラで眩しいっすね。目が痛いっす。どなたっすか？』

確かに。

確かに彼が来ていた和服はなぜか金のスパンコールでド派手であった。

だがそれは彼のパーソナルカラーであり、誰も指摘はしないのである。

そんな暗黙の了解をあさひという少女は真っ向からぶち抜いた。さらに言えばどなたというめちやくちや失礼な態度をとる彼女。

番組の空気が一瞬凍ったのはキャスト全員が分かっていた。

『ワタシくらいになると輝いて見えるんだヨ』

『誰も眩しい理由は聞いてないっすよ』

しかし彼はそんな彼女に怒ることはなく寧ろ気に入ったと喜んでいた。

冬優子と愛依が慌ててフォローしたのもあるのだろうがデザイナーは関心していた。

それによりキャスト全員が胸を撫で下ろしたのだ。

そして現在、このシーンが切り抜かれてトレンドに乗り、あさひ人氣に拍車を現在進行系でかけており、SNSを盛り上げていた。

「あとあのおじさん、なんか今度衣装作ってあげるヨって言ってたっすけど、ド派手過ぎるのは嫌だって断っておきました」

「あんたはほんとに何をやってんのよ……！」

「あははは……うん、それは、ね……」

まさかあの気に入った人物の依頼しか受けない彼の申し出を個人

の判断で断るなど流石に冬優子と愛依も思っていないかった。

いやあさひならやつてもおかしくはないかと納得はしていた。

普段からマイペースの極みとも呼べる態度で周りをハラハラさせていたのだが、最近は大きなことはやらかしてはいなかった。

しかし今回の件は流石にと不味いと二人は脳の思考はフル回転させていた。

事務所に所属している彼女たちからしたらそんな勝手なことは許されないのだ。

もしこれで干されるような自体にでもなつたとしたら、考えるだけで恐ろしかった。

干されるということは芸能界において致命傷になりかねない。

判断は慎重にしないとイケないのだ。

「……いや、でもほんとそれどうすんのよ。流石に不味いわよ」

「……そうだね。取り敢えずプロデューサーに連絡しないと」

本気で不味いと二人は考えながらあたふたする。

そんな二人を横目にあさひはノレマンドに飽きたのか、今度はカントリーマ〇ムを食べていた。

するとコンコンとドアのノックする音が聞こえた。

「はっ——どうぞー♪」

冬優子の声質は先程と打って変わり、ワントーンいやツートトーンは上がっており、表情も笑顔になっていた。

その早変わりの様子はまるで中国秘技である変面師を彷彿とさせるものがあり、見る人見れば拍手喝采であろう。

「おつかーれ」

ドアが開き、そこには見覚えのあるスーツ姿の男性がいた。

彼女たちのプロデューサーであった。

背中にはいつも背負っている有名ブランドのビジネスリュックがある。

ちなみにこれは先日、事務所の皆でお金を出し合ってプレゼントしたもので、その時のプロデューサーは本当に嬉しそうにしていた。

「ちよつと、あんた。聞いてよ、あさひが——」

「プロデューサー！ どうしよう」

ドアがパタンと閉まったのを確認し、冬優子と愛依はプロデューサーへ詰め寄った。

現状起きている下手をしたら事務所全員を巻き込む自体になりかねないやらかしを伝えようとする。

「アーデザイナーさんの件でしょ？ 大丈夫大丈夫。それはもう解決はしているから」

あっけらかんとプロデューサーは当たり前のようにそう告げた。

彼の言葉に冬優子と愛依は目が点になっていた。

「おーい、あさひー」

「……？ はいっすー！」

プロデューサーはちよいちよいとお菓子を食べているあさひを呼んだ。

するとあさひはお菓子から完全に興味を失い、一直線に彼の元へ駆け寄った。

「聞いたよ、流石だな。気難しいあの人に気に入られるなんて」

「そうなんすか？」

「そうそう、マジですごいぞ。あの人嫌いな人とは目も合わせないし会話一切しないっ！とか言う人だしね」

プロデューサーはあさひの頭に手を置いてすごいぞーと褒めるように撫でた。

そんなプロデューサーにクエスチョンマークを浮かべつつも、撫でられるのは悪くないとされるがままになっていた。

「ワタシの衣装を断るなんて全く面白い女だヨって、あの人笑ってたよ」

俺もそれ聞いてちよつと笑っちゃったよと、ニコニコしている。

「だから俺から一緒にあさひの気にいる衣装を作りましょうって言ったんだ。デザインはあさひが気にいるまで何度でもリメイクして良いつてことらしいから、どうかな？ 一応断れるけど」

「うーん、わたしだけじゃ嫌っす。冬優子ちゃんと愛依ちゃんも一緒にじゃないと」

そこで初めてあさひが衣装作成の申し出を断った理由が分かり、冬優子と愛依の二人は複雑な気持ちになるも少し気持ちが暖かくなっていた。

自分たちのために、というあさひの気持ちは単純に嬉しかったのだ。

「ははは、あさひならそう言ってくれらると思ってたよ。実はそのことももう言ってるね、先方もちゃんとわかってくれたよ」

あさひは優しい子だから自分だけ、というならば絶対に受けないとプロデューサーは既に伝えていた。

デザイナーも構わんヨと、気持ちよく了承してくれており、この件は既にプロデューサーによって何の問題もなくしつかりと解決していたのだ。

それを聞いていた冬優子と愛依は、呆れつつもこのプロデューサーならそれくらいやるかと納得した。

あさひはプロデューサーの言葉になら良いつすと、嬉しそうに返事をしていた。

「でも、あさひく。今度からは俺に聞いてからにするんだぞく」

プロデューサーはあさひの頭をまるで茹でる前のラーメンの麺を解すようにワシヤワシヤする。

お仕置きだべくと。

かなりの絶妙な力加減であった。

「ぶ、プロデューサー。崩れるつす、崩れるつすよく」

「今回は大人しくやられときなさい」

「うん、あさひちゃん。少し我慢して」

あさひは顔を少し赤くしながらプロデューサーの手の甲に自身の手を合わせて抵抗するも全く抵抗になっっていなかった。

それを見ていた冬優子と愛依は何故か少し羨ましいと感じつつも、まあこれで手打ちかと思っていた。

「ご、ごめんなさいっす。次はちゃんとプロデューサーに言うっす……」

あさひの言葉になら許そうと、プロデューサーの手が止まった。

彼はあさひの髪をスツと整えて、頭から手を離すとスマートフォンでスケジュールを確認し始めた。

何故かあさひは離れた手を目で追っていたが。

「てかなんであんたは知ってたのよ」

冬優子の言う通りであった。

今日の撮影はプロデューサーは付き添いが出来ず、撮影中に来た様子もなかった。

どこでこのこと知ったのだだろうか。

「え？ ああ、前からこの人はあさひみたいな子を気に入りそうだなって思ってたね。少し前に連絡を取って色々話をしてただけど、したら偶然今回のゲストがあの人だったから」

撮影終了後、彼のスマートフォンにデザイナーから連絡があった、というのが真相であった。

しかし考えてみれば、つまりプロデューサーはある程度どころか殆ど事情を知っていたわけで、下手をしたらこうなることも予見していた可能性がある。

あのあさひを制御できる数少ない（というか他にいるのか？）プロデューサーであるならば。

「……じゃあプロデューサーは知ってたんだねー。へー」

愛依は目を細めてプロデューサーを睨む。

睨むと言っても本気ではなく可愛いものではあったが。

「ははは、ごめんごめん。でもほんとに偶然なんだよ。それに――」

皆のこと信じてたからね。

プロデューサーのその何も疑っていないというその言葉に冬優子と愛依の心臓は強く打ち抜かれていた。

彼はすぐにこういうこと平気で言う男なのだ。

しかも本心から言うのが性質（タチ）が悪い。

この軽率な言動に何度ヤキモキさせられたことか。

両の手では収まりきらない数、である。

「冬優子は2人をしっかりとまりまとめられて愛依は2人を後ろから支えてくれている。だからマジで心の底から助かってるんだよ」

プロデューサーのその言葉に2人はまた心が暖かくなる。

先程とは違う、別の暖まり方ではあるが。

「プロデューサー」

するとあさひがプロデューサーのスーツの袖をクイクイと引つ張った。

引つ張られた彼はあさひへ視線を向ける。

「わたしは？」

「うん？」

不満げな表情を浮かべあさひは言った。

「わたしはどうなんすか？」

その目は不満と不安が入り交じったもので、気のせいか少し虹彩が揺れていた。

「あさひは2人を引つ張っていく存在なんだよ。皆ストレイライトに欠かせない大切なメンバーなんだ」

俺はそんな3人にいつも助けられているんだ、安心する優しい笑顔でそう彼は続けた。

彼の本心からの言葉にストレイライトは――――トウクシていた。

芹沢あさひ、黛冬優子、和泉愛依の3人は少なくともプロデューサーに対して何かしら特別な気持ちを抱いていた。

いや予想は出来たかもしれない。

彼女たちは結成してからいざこざが多々発生していた。

一度見たダンスをすぐに踊れるようになるなど怪物とまで呼ばれる天賦の才を持つあさひと努力を努力と思わず目的の為に己すら律する努力の才を持つ冬優子、多数の物事を高いレベルでこなすその周りを包む明るい性格で周囲の鎧になっていた愛依。

あさひと冬優子は特にぶつかりあうことが多く（主に冬優子から）、それを愛依が宥めるそんな関係性であった。

絶妙なバランスのグループではあったが、それらを束ね整えこころで成長させたのには間違いなくプロデューサーが関わってくる。

あさひはその高い才能とマイペースな性格で周囲から浮いており自身もそれを理解していた。

冬優子は常に笑顔を振りまく明るい性格を見せていたが実際は素の自分を見せればみんなに嫌われてしまうという自己評価の低さが表れていた。

愛依は困っている人はほっとけない誰にでも優しい性格であったのだがその実重度のあがり症を抱えていた。

3人が別々の問題を抱えながらアイドルという難しい仕事をどう切り抜けていくのか。

そんな彼女たちにプロデューサーが行ったのはとても簡単なことだった。

相手の気持ちこそを真摯に理解し尊重する。

ただそれだけである。

彼の方針として相手を絶対に否定しないというものがあつた。

倫理的な部分は別として、後は個性として全て扱ったのだ。

何かを強制することはその子の個性を潰し、価値を消し去ってしまう。

その考えは283プロダクションに入る前から彼に培われており、それに加えて絶対に何かあつても怒鳴るようなことはせず、生意気な態度を取られてもそれがその人にとってプラスになるのなら問題ない判断した。

そして彼がもつとも大事にしていることがあつた。

それはあらゆるトラブルを常に想定し、そのための策を弄するとい

うことだ。

未成年やそもそも芸能界に慣れていない彼女たちはいつ知らない内にやらかしてしまう可能性がある。

そんな彼女たちのために彼は1つの事例に対し、10個いや100個、場合によってはそれ以上に代替策を用意していた。

こうしておけば何が起きてもフォロワーが来ると。

余程の大天才でなければ成功への一番の近道は失敗をすることだ。人間は良いことより悪いことを脳に記憶する。

だからこそ、彼女たちには気負わず失敗してもらい最短距離で成長してもらおうという方法を取っていた。

だが失敗というのはリスクがある。

そのリスクを極力ゼロにするのがプロデューサーとしての仕事だと彼は思っていた。

そのため他のグループも失敗はそれなりにしてきているのであるが、今の今まで何も禍根は残っていない。

これがプロデューサーが彼女たち——283プロダクションのアイドルたちをわずか一年程でここまで成長させた手腕であった。

故に283プロダクションの所属アイドルはプロデューサーへ絶大な信頼を寄せていた。

あさひのその天才肌故の周囲との差に感じていた苦悩に対しては、『別に自分を抑える必要なんてないからそのまま全部を見せてよ。好きにやる、好きなことを楽しそうにやるのがあさひの持ち味だ。あさひのやりたいことは全部やろう』

冬優子の自身を偽り、それにより生じている極端なまでの自己肯定感の低さ、そのコンプレックスに対しては、

『作り物の笑顔ね。逆に聞くけど作り物、偽物の笑顔が本物の笑顔に負けるなんて誰が決めたんだ？ そんな道理はない、そんな戯言なんてまとめて叩き潰そう。冬優子なら余裕だよ』

愛依の極度のあがり症を隠すために自身を偽り、それを周囲に指摘

され本当の自分が何なのかを分からなくなったことに対しては、『普段の愛依もライブ中の愛依もどっちも本物の愛依だよ。分けて考える必要なんてない。その全てが愛依なんだから、それを見てもらおう。愛依は皆に親切で優しい。ならさ今度は逆で愛依の番だ』

——面倒なことなんて全部俺に任せて思い通りにやりなよ。

彼女たちはアイドルとして、人間として殻を破った。

彼から言われたその言葉で。

以降ストレイライトの3人は大きな壁にブチ当たることとはなくなった。

成長した、ということだ。

彼女たちを止められるものはいない。

そしてそんな熱い言葉を彼によって掛けられた3人は当たり前のように心を撃ち抜かれていた。

彼女たちの心にあつた大きな穴に何かキレイにすっぽりと嵌つたのだ。

苦しさと今までの苦悩から開放された喜びの感覚、そしてそのどちらでもない謎の感覚が襲った。

その感情が彼女たちには分からなかった。

「ったく、あんたねえ…… まあ良いわ。あんたってそういう気障なこと言う奴だったものね」

「えーそうかな？ 本心なんだけどな」

「うんうん、分かってるよ。そんなところもプロデューサーらしくてうちはとつても良いと思うし」

「おい愛依、なんでそんなにやけてるんだよ」

「プロデューサー、今度カブトムシ一緒に取りに行きたいっす」

「えらい突然だなー。でも時期はもう過ぎてるから取るのは来年だ

よ。まあ成虫を見るだけならペットショップとかホームセンターとかかな。でもいるのか……?」

「じゃあプロデューサーと2人でカブトムシ見に行きたいっす」

「ちよつとあさひ(ちゃん)……?」

「別に皆で行ってもいいけど、カブトムシをこのメンバーで見に行く絵は流石に面白すぎるな」

そしていつも通りの和やかなやり取りが始まった。

ガヤガヤとし始めたが、これがストレイライトとプロデューサーのコミュニケーションであった。

「…… あ、この後事務所に戻ったらはづきさんから来週のレコーディングの説明受けてね。はづきさんには既に伝えてはいるから」

そうだと思い出し、3人へ重要事項を伝えると各々わかったと言ってくれる。

物分りは良くて助かるなど、そんなこと思いつつ合わせてやらなくてはいけないことをプロデューサーは思い出した。

「じゃあ俺ちよつと別の仕事あるから先行くね」

気をつけて帰りなよ、そう3人へ告げると楽屋を後にするプロデューサー。

廊下に出るとスマートフォンを開き、電話帳の中からお目当ての人物を選択した。

プロデューサーが楽屋を出てから数分後、着替えを終えた3人は楽屋を出て、通りすがりのスタッフに挨拶をしながら外へ向かう。

その途中、見覚えのある背中を3人は見つけた。

プロデューサーである。

どうやら今日の番組の担当ディレクターと話し込んでいるようだった。

楽しげに話す彼を見ていた彼女たちだが、何故か帰ろうとはせずに少し離れたところでその会話を聞くことにした。

なぜそんなことをしたのか3人には分からなかった。

そして耳を澄ませると彼らの会話内容が聞こえてきた――  
「がそれを聞いた彼女たちはまるで魔法をかけられたかの如く固  
まってしまった。」

「ははは、あと半年になりますが、よろしくお願いしますね」

## 王国崩壊編VI

『よし、皆聞こえてる？ 見えてるかー？』

ノートパソコンの画面からよく知る、顔を見ただけで安心の出来る男性が現れる。

そして内蔵スピーカーからはこれもよく聞く落ち着く声が流れた。彼は283プロダクションのプロデューサーであった。

現在、事務所のノートパソコンからオンライン会議アプリのZOOMを利用して、画面の向こうへ呼びかけていた。

「はい、聞こえていますよー」

パンクファッションに身を包む気怠げな少女、田中摩美々。

「プロデューサー、ちゃんとあなたの声はこちらへ届いているよ」

王子様のような雰囲気醸し出している少女、白瀬咲耶。

「あぁー！ ちょし待つとーと！ プロデューサー！ うちも聞こえとーし、見えとーばい！」

長崎弁で話す賑やかな雰囲気少女、月岡恋鐘。

「ははは、こがたん、大興奮だね」

メガネをかけたどこかサブカルとした少女、三峰結華。

「ふふ……でもプロデューサーさんの声がいつもと違ってちよつと変な感じです」

ミステリアスな雰囲気醸し出し腕に包帯が巻かれている少女、幽谷霧子。

彼女たちは5人組アイドルユニット『L' Antica（アンティカ）』で、283プロダクションに所属しているユニットとしてはもう一つのユニットと並び最大人数である。

そして現在、彼女たちは283プロダクションの運営する寮の共同スペースに集結しており、机に置いたノートパソコンの内蔵カメラに映るように少しごちゃごちゃと固まりながら、まるで押しくら饅頭のようにして先程の会話をしていた。

『ははは、大丈夫だよ。皆の顔も見えてるし、声もちやんと聞こえてるよ』

プロデューサーはそんな彼女たちの様子に苦笑しながらそう応えた。

その間、マウスの横でスマートフォンが反応すると、一瞬画面に簡易的に表示されているメッセージを見て別段すぐに返信が必要ないものと判断し、ノートパソコンの画面へ目を戻した。

『てか、オンラインなのに皆全員集合なのね』

仲が良くて大変よろしい、プロデューサーはそう思っていた。

ただ恋鐘と咲耶は寮で、結華と摩美々、霧子は自宅で各々パソコンは持っていた気がするのだが。

パソコンの調子でも悪かったのかというの、プロデューサーの単純な疑問であった。

「実はこの後、みんなで鍋パーティーをする予定なんだ」

彼の疑問に応えたのは咲耶であった。

彼女の表情を見る限りこの後が楽しみなのだろう。

喜びの感情に溢れてブンブン振られる尻尾が幻視できた。

「最近はこうやって皆で一緒にご飯っていうのも少なくなっちゃいましたしねー」

摩美々の言うことは少し悲しいことではあるが、事実であった。

人気が出るということはその分忙しくなるということであり、ユニットの仕事から個人での仕事など様々だ。

例えば摩美々はパンク系ファッション雑誌のモデルやインタビューなどの仕事をしている。

プロデューサーとしては皆で一緒に休みというのはできるだけ取らせてあげたいとは思っていたが、中々に難しいことであった。

「今日はうち特製んモツ鍋ばい！ 実家からモツがようけ送られてきたけんね」

恋鐘の実家は長崎で定食屋さんをやっていた。

地元に愛されている店らしく、ローカルテレビや雑誌などの取材が来ていたと前に自慢していたことを思い出した。

以前、プロデューサーは色々あつて恋鐘の実家であるその定食屋に行き、ちゃんぽんを頼んだが確かに美味しかった。

ちなみにものであるが恋鐘と上手く行っていなかった父親を説得した結果、親子間の不和を解決することに成功し、今ではライブを見に来てくれるまでになった。

そして恋鐘からは泣いてお礼を言われたのをプロデューサーは思いついた。

「……うん、今日は帰りにリンガー〇ットに行こう、そうプロデューサーは決心した。」

「みんなと一緒にご飯を食べるのそうなんだけど、三峰的に美味しいもの食べられるのは嬉しいので」

まるで食事が目当てみたいと言いつつ、恋鐘は定食屋の娘というだけあって少し苦笑しながらそう言うが、得意料理はちゃんぽんだったかと思いついて料理が上手であり、得意料理はちゃんぽんだったかと思いつく。

結華自身、周囲に気を使える、空気を呼んで動けるタイプであり、そんなことで軋轢を生むような人物ではないことはプロデューサーが一番分かっていた。

その答えに特に他のメンバーは悪く受け取ることもなく、寧ろ恋鐘は期待しといて！とかなり前のめりであった。

「……プロデューサーさん？ その手、どうしたんですか？」

するとそのやり取りを微笑ましく眺めていた霧子がふと画面の中にいるプロデューサーへの違和感を口にした。

『うん？ ああこれね。さっき封筒を開けるときにカッターでさ……』

はははと苦笑するプロデューサーの左手人差し指には絆創膏が巻かれていた。

すぐに彼は恥ずかしそうにその左手を隠したが。

「大丈夫かい？ ……とても心配なんだが」

そう言つて心配してくれる咲耶だったが、眉毛が八の字になっており、換言すれば飼い主が体調悪そうにしているとすり寄ってくる犬のようであった。

彼女は女性にしてはかなり身長が高く、かつ王子様のような言動で女性人気が高いのだが、その実極度の寂しがりであった。

このことは事務所内ではアンティイカとプロデューサーを除いては知らない事実である。

そんな彼女は寂しがり、つまりは誰かが居なくなることを酷く恐れている節があった。

プロデューサーが怪我（指を切った程度ではあるが）をしたという事実だけでも、彼女の中では最悪の予想まで展開されていた。

それ故のこの態度なのである。

「きちんと消毒はしましたか？」

「え、ああ。ちゃんとしたよ」

「…… 本当ですか？」

霧子は珍しく前のめりで画面先のプロデューサーを見つめていた。

どうやら彼が本当に消毒したのか疑っているようだ。

両親が医者ということもあり、その影響もあつてか彼女自身医者になるための勉強も進めており、例えば事務所内で誰かが擦りむいたといった時に救急箱を持って駆けつけ、応急処置をするなどその片鱗が見て取れた。

ちなみにプロデューサーが疑われている理由の1つに以前、彼が火傷をしたときに彼女にそれを教えなかったことがあったからである。

あの時の霧子は少し怖かったと、プロデューサーは後に語った。

『ははは、本当に大丈夫だよ。ごめんな心配かけて……』

プロデューサーは霧子に対して心配性だなあと、不躰なことは言わない。

指を少し切った程度で大袈裟だと思いかもしれない。

だが霧子は極度の心配性なのである。

ライブだけでなく日常においてもだ。

彼女が腕などに包帯を巻いているのは謂わば願掛けのようなものであり、一般的に言えばお守りのような役割である。

故にそんな彼女に心配性などというのはこういった場合逆効果になるのは明らかであった。

「…… 信じます、ね」

霧子は取り敢えずは信じるといった表情でそう言った。

これはまだ疑われているなど、プロデューサーは内心やってしまったなど後悔しつつ今回の本題へ移ろうとする。

「プロデューサーさんってたまにそういうおつちよこちよいな所ありますよね〜」

が、摩美々は遮ってプロデューサーをからかうようにそう言ってきた。

この時、プロデューサーは逆に助かったかもしれないと思っていた。

恐らくこのまま話を進めようと思っても、霧子や咲耶はギクシヤクして話しづらくなってしまふ。

摩美々は普段、プロデューサーに対して悪戯を仕掛けるお茶目な所がある。

例えば淹れてくれたコーヒーに塩が入っていたり、深夜突然電話がかかってきて何事だと思ったら悪戯電話ですと言ってそのまま1時間以上何でもない通話したり、夏場であれば首元に保冷剤を当ててくるとか(タオル越しに)、冬はタクシーを2人で並んで待っていた時に悪戯ですといって彼のコートのポケットに手をつ突っ込んでそのままタクシーが到着するまで離れなかったり、そういったことをしてきた。

後から入ってきた某会社存続の危機になった子や監禁脅迫をしてきた子に比べれば可愛いものなので本気で怒ることなどはなかったが。

勿論、度が過ぎれば叱ってはいるのだが、何故か摩美々は嬉しそうにしてまた悪戯を繰り返す。

まあ彼女のメンタルが良い方向で保たれるなら良いかとプロデューサーは取り敢えずそのままにしておくことにした。

「うんうんPたん、そんなところも可愛いつて今評判らしいよ」  
摩美々に便乗してくれたのは結華であった。

彼女も周りをよく見てくれており、この場の空気を察してくれたようだ。

社交的な彼女は普段から高いコミュニケーション能力でムードメーカー的な面があり、空気を読む力は283プロダクションでも

トップクラスである。

故にこういった場面でも遺憾なくその能力を發揮してくれていた。『いやどこ評判だよ。というか俺が可愛いって一体誰得なんだって話しで』

そんな評判は聞いたことがない(話の流れで言われることはあつても)プロデューサーは苦笑しながら、そう返した―――のだが。

「」「」………「」「」  
???

何故か全員が首を傾げていた。

それはプロデューサーも同じであった。

皆何を言っているのか、可愛いのは当然だろみたいなのそんな表情である。

プロデューサーはその真意を理解することができなかった。

が、きつと冗談なのだろうと彼は自身の中でそう決めた。

「あ！………で、でもうちのにはプロデューサーは！ か、カツコよかと、思えばい………」

そんな中恋鐘は竜頭蛇尾という四字熟語を彷彿とさせるくらいどんどん声が小さくはなっていたが、プロデューサーに対してカツコいと言ってくれた。

その顔は気のせいかわ赤くなっているようにも見える。

『ははは、ありがとな恋鐘』

冗談でも嬉しいよ、彼はそう続けた。

「」「」………「」「」  
??????

案の定、彼女たちは首を傾げていた。

先程より深くである。

なんなら結華と摩美々は少しキレ気味にも見えた。

改めてプロデューサーである彼のスペックであるが、187センチという長身に男性アイドルの中にもおかしくない容姿なのだ。

見た目だけで言えばかつこ悪いといえる要素が何一つないのだ。

嫌味に聞こえるかもしれないが、これを彼は本心で言っていることを彼女たちは理解していた。

彼と一年以上一緒にアイドル活動してくればそれは嫌でも分かることだった。

というよりも彼は自身の容姿が良いとかよりも、周りのことを常に考えているためそのようなどうでもいい情報（彼にとって）はカットアウトしている節があった。

だからこそ彼はそういった部分をひけらかすことなく、相手に合わせて真摯な態度で接し信頼を勝ち取ってきたところがある。

そんなところを尊敬できる凄いとこではあるものの、彼女たちからしてみればそこはたまに傷、といった評価になっていた。

『と、そうだ。そろそろ本題に入らないとね』

そう言ってプロデューサーは次のオーディションについて説明をし始める——前にスマートフォンを取り出しメールの確認をする素振りをしながら、摩美々と結華には個人CHAINで場の空気を察してくれてありがとうとメッセージを送っておいた。

摩美々と結華はCHAINが来たのが分かったのか、一瞬ポケットに目線が行くがすぐに戻す。

周りに怪しまれないためであるが、こういった所作が彼を普段から助けている部分でもあった。

『それで次のオーディションなんだけど——』

彼が話し始めると彼女たちは真剣にそれを聞き始めた。

プロのアイドルである、仕事の切り替えも早いのだ。

まあ芸能界という厳しい世界で生きていければ勝手に身につくものではあるのだが。

そこからオーディション内容と対策、コンセプト等プロデューサーから説明される。

時折図なども利用して分かりやすく説明をしていく彼に、結華はあ  
ることを思っていた。

やっぱりPたんはPたんだなあ。

仕事をしている彼とそれ以外のフレンドリーな彼。

普段から周囲を気にかけている彼女。

彼女からしたらその気にかかる対象には勿論プロデューサーも入ってくる。

だから気を使う、という表現が合っているのかは分からなかったが同じように接してきたのだ。

彼女は仲良くしつつも距離感を取るある意味で矛盾したそれを得意としていた。

そこまでは来てもいいがここから先は来るな、という心の壁でもある。

初めて会った時からであったが、プロデューサーは結華とは真逆の性質を持っていた。

彼は異様なまでに距離感を詰めるのが上手かった。

テレビ局のスタッフやボーカルやダンスのトレーナー達など、気づいたら仲良くなっている。

他のアイドル達もそうだ。

仲良さそうにやり取りを重ねる彼を見て、同時に恐怖を彼女は感じていた。

スカウトを受けた時点では彼は信用できると思い承諾はしていたのだ。

事務所に所属してからはグループメンバーが出来て、そこからトレーニングを重ねて、気づいたらオーディションに受かってライブを成功させて皆で喜んでいた。

それを彼は本当に良かったと笑顔で見守っていた。

そんな彼にメンバーも駆け寄っていく。

泣いて喜ぶ彼女たちを横目に彼女は思った。

彼は自分の守っている壁を壊してくるのではないかと。

気づいたら他のメンバーは彼に気を許し、その距離も近づいてい

た。

別に彼女たちが距離を縮めやすいかと言われればそういうわけではない。

寧ろその逆であり、一癖も二癖もある彼女たちと簡単には仲良くなんてなれない。

そんな彼女たちがプロデューサーに懐いている姿を見た時に恐怖という感情が湧いたのだ。

別段壁を壊されるのが嫌ではない、壊された後に自分がどうなってしまうのか分からない、それが彼女にとっての恐怖だった。

先程のやり取りだって今CHAINが来たのもきつと自分に対してのお礼なのだ。

彼のそのマメなところ、そのような行為に特別な意味はない。

普段から彼は無意識のうちにそういった行動を取っているのだ。

三峰じゃなかったら勘違いしちゃうんだよ？

勘違いしても良いのかな？

そんな相反する感情を抱いた自分にびっくりしたと同時に恐怖を感じた。

だから結華は彼と距離を取ることにした。

精神的な距離も物理的な距離も。

だがプロデューサーはそんなことはさせなかった。

気づけば自身の住む部屋の中に彼がいた。

いつもなら隠しているヲタクグッズやアイドルグッズも全部見られていた。

そして決壊したダムのように全てを吐き出していた。

結果から言えば三峰結華も彼の虜になっていた。

なぜと言われても自分でも分からなかった。

彼なら側に、ここまで来てても良いとそう思えてしまったからだ。

本心を隠し続けてきた彼女が人生で初めて、自身をさらけ出してもいいと思つたそんな彼。

結華から見て彼は多くの人間、アイドル達に慕われていた。

アンティイカの皆もそうだ。

彼女たちもプロデューサーに救われ、アイドルとしても一人の人間としても成長した。

ここまで親身に接してくれて人生を変えられたら、誰だってその人に特別な想いを抱くのは当然とも言えるだろう。

少なくともアンティイカのメンバーは全員プロデューサーに対して特別な想いを抱いていることは、普段から観察していた結華の出した結論であった。

だからこそ結華は自身のこの気持ちを伝えるつもりはないのだが。彼女からしたら皆とても魅力的な女の子たちで自分では到底敵わない。

だからプロデューサーは他の誰かと一緒になるのが一番だと、結華は本気で考えていた。

あーあ、こんな“私”が嫌になる。

『結華』

ボーツとしてしまつていたのか、間延びした彼の優しい声で彼女は覚醒した。

いけないいけないと結華は首を横に振った。

「なあにPたん」

『………… いや、ごめん何でもないや。それで続きが……………』  
心配をかけてしまった。

最悪だ。

もうプロデューサーに迷惑をかけたくなつてなかつたのに。

本当に嫌になる。

「……………」

すると彼女のスマートフォンが揺れた。

先程のはプロデューサーからだとして、これは誰からだろうか。

どうしても気になった彼女はお手洗いに行つてくると言つて一時的にその場を後にした。

他のメンバーに少し心配されたもの大丈夫だよと言つて。

「……………」 Pたん

そして廊下に出た彼女のスマートフォンの画面にはCHAINが表示されており、メッセージの送り主はプロデューサーであった。

『また知らないうちに傷つけたかもしれない』

『でも俺は結華と一緒にいたいと思つているから』 離れるなよ』

『良いね?』

「はあ……………」 もうどうしてこうPたんは……………」

以前彼女のやった行動を予見してのメッセージ。

なのだろうが、今の彼女からしみればその破壊力は想像を絶するものだった。

分かった気でいられるのは好きではないけど、彼に言われるそれは

「Pたん、好き……………」

座り込む結華の声は溶けるように消えていった。

『さて、と。話を続けるね……………』

結華がお手洗いへ行つて少しして、戻ってきた後にプロデューサー

の話しを再開する。

戻ってきた結華を周りは少し心配していたが、何か吹っ切ったのかいつもの彼女に戻っていた。

これなら大丈夫そうだなとプロデューサーは判断し安心すると、ラストスパートと話を進めていく。

『はい、以上になるけど。何か聴きたいこととかある?』  
一区切りと、プロデューサーは一息吐きながらそう聞いた。

まあ、ほとんどいつものオーディションのことなので別段ないとは思うがと、考えてはいたが。

「私は特にないよ、プロデューサー」

「三峰も……うん、大丈夫かな、へへへ」

「結華なしてそがん嬉しそうと? ……うちも大丈夫ばい!」

「私も大丈夫です。つまりいつもどおりですすよね。オーケーです」

「……はい、わたしも質問はないです。いつも分かりやすくとても助かります、プロデューサーさん」

5人の反応を見て特に何もなかったことが分かり、伝わって良かったと安心する。

少し急ぎで説明したのにも関わらずだ。

成長しているなど心の中で安心する。

『ははは、一応頑張ってる分かります、説明する努力はしてるからな』  
良かったよと、プロデューサーは言う。

彼の見た目が良いというのは再三言っているのだが、それよりも凄いの仕事をする能力である。

説明が分かりやすいというのは簡単に言うが誰にでも分かりやすく一発で説明する難易度は実際に話してみないと分からない。

実際、初めての撮影やレコーディングの時も彼女たちは質問をしなかった。

いや質問することがなかったのだ。

質問しないと逆に何も考えていないと思われるかもしれないと思った彼女たちは必死に考えていたのだが、結局思いつかなかった。

それを見たプロデューサーは苦笑しながら大丈夫だよと彼女たちに言ったが、それ程までにプロデューサーの説明、話しの仕方は分かりやすかった。

今の今まで彼女たちは仕事の内容に不安を抱いたことはなく、彼が選んだ仕事なら安心してできると全てを任せていた。

そして彼女たちは彼の期待に応え、大きな成果を上げてきた。

これがアンティイカの今までである。

『よし、特に何もないならこれで終わりにするね。あ、モツ鍋豆腐入ると美味しいから試してみてね』

じゃあお疲れさまーと、ZOOMを切ろうとする。

しかしそれは遮られることになった。

「も、もう少し、話しばしよっ！ プロデューサー！ その具材の話し、詳しく……」

恋鐘である。

どうやらおすすめ具材の話しを聞きたいらしい。

そうだなとプロデューサーは考える。

モツ鍋に豆腐は邪道かもしれないが味が染みてけっこう美味しいのだ。

あ、玉ねぎも美味しいな、そう考えながら具材について話していくプロデューサー。

ちなみにきちんと彼女たちのアレルギーは把握しているので、食べられない食材を言うなどと言った愚行は侵さない。

『わたし、お豆腐さん、好きです……』

豆腐という好物を言われた霧子は少し嬉しそうであった。

霧子的には自身の好物を覚えていてくれて、それをおすすめしてくれたことが嬉しかったのである。

ちなみに彼の真意としては単純に美味しいという理由で勧めたというのであるのだが、それを知る必要はない。

「確か明太子とかも入れたりするんでしょ？」

結華が前テレビで見たよと、そう続けた。

明太子も美味しそうだなど、博多方面に行った際には試してみよう

とそんなことを考えていた。

「……そうだプロデューサー。今日、一緒に鍋パーティーをしようじゃないか」

話が進んでいく中、咲耶がふいにそうプロデューサーを誘った。彼女にしては珍しく、少し緊張しているようであった。

本当によく見なければ分からないレベルであったが。

「そうばい！ プロデューサーも一緒に鍋パーティーと一緒にやろ。具材はたーくさんあるばい」

腕によりをかけて美味しいの作るばいと顔をふんすとさせていた。

『有り難いんだけど、女子寮には入れないよ』

283プロダクションが運営する寮は男子禁制である。

男性が入るときは水道工事や電気工事などが入る時くらいであり、その場合は管理人の女性（50代の優しいお母さん）の方が立ち会いを行っている。

そのため、彼女たちが寮内で男性に遭遇することは一切なかった。「えーでもプロデューサー、前に電球変えたり、水漏れとか直してくれなきゃいんですかー」

摩美々によつてプロデューサーは痛いところを突かれてしまう。

確かに以前、電球交換やキッチンの水漏れを修理したことがあった。

あれは業者の手配が間に合わず、かつ彼でも修理できる範囲であったための本当に仕方なくで起きた出来事だ。

故意に入ったわけではない。

『あれはなー、あの時だけの特別なんだよ。だから品切れなんです』  
「プロデューサー、来てくれないのかい？」

まるで寂しかっているゴールデンレトリーバーのような表情でプロデューサーを見つめる咲耶。

その目は罪悪感が募るので止めてほしいとプロデューサーは思っていた。

普段王子様のような言動を取っている彼女がこういった言動を取ると、ギャップで凄まじいことになるその最たる例と言ってもいいだ

ろう。

『うーんでもなー』

「プロデューサーさん、お豆腐さん……食べましょう……」

霧子は霧子で少し猟奇的に聞こえてしまうのは気のせいかな。

それほど豆腐を食べたいということなのだろうか。

「Pたん、三峰的には……忙しいなら仕方ないんだけど……」

結華も分かりやすく分かりにくい態度を取っているが、プロデューサー以外にもいる場面でこの態度は珍しいなと思いつつ、このままだと収集がつかなくなりそうだと彼は危機感を覚える。

『……ほんとごめん、今日は厳しくてさ。次やる時は俺も具材持ち寄るから、それじゃあ駄目かな?』

頭を下げるプロデューサー。

実際本当に今日は大事な用事があったため、断ざるをえなかった。

勿論、各々不満げ、しよんぼりなど様々な表情を見せる。

罪悪感がプロデューサーを襲った。

さてここである事情に突っ込もうと思う。

結華が諸々プロデューサーへ対して重い想いを抱いているのは既にお分かりだろう。

ただ結華が推定したアンティイカその他メンバーの想いはどうなのか。

答えはとても簡単である。

須らく重い想いを抱いていた。

咲耶は元々、別事務所でモデル活動をしていた。

そんな彼女に光るものがあると判断したプロデューサーであったが、勿論他事務所から引き抜きなどタブーであった。

しかも当時は未経験から入った彼である。

手札がなかった。

しかし、彼は幸運であったのだ。

なんと彼女の契約期間がもう少して満了とのことで、彼はこれ見よがしに口説き落とすとした。

完膚無きまでに。

彼の放つ雰囲気と話術により、気づいたら咲耶は自身の過去を語っていた。

父子家庭で育ち、毎日暗い家の中を返ってくるのを待っていたと。高校生になってからはモデルにスカウトされ、活動が続けてきたが、彼女の中にはそれでも孤独というものが深く突き刺さっていた。それを聞いて尚の事プロデューサーは彼女をスカウトしたいと思っただ。

彼女を曖昧な気持ちで芸能活動させるのは惜しいと。

合わせて今後の人生においても彼女に付き纏うその孤独をどうにかして落として上げたかった。

事務所に入れば孤独になることなどありえなく、自分でよければいくらでも話しに付き合うと。

『あなたの手助けをさせてくれませんか？ 私——俺は、孤

独の辛さを分かる白瀬さんなら同じ気持ちの人たちに勇気を与えられると思っている。白瀬さんは間違いなくそれが出来る人だ』

だからスカウトさせて欲しい、白瀬さんには俺が必要だ。

今思えば彼の言葉はとても傲慢なものであった。

俺にはではなく咲耶には、というその物言いに少し笑ってしまった彼女は、しかしその言葉が間違っていないと確信し、283プロダクションへ所属することとなった。

諸々の手続きがあったようだがプロデューサーはそれを一切、咲耶には分からせなかった。

そして彼女は今の今まで彼に支えられてここまで来たのであった。

『プロデューサーは私にとって、特別な——ううんそんな言葉じゃ言い表せない人、かな』

恋鐘は高校を卒業してから地元を飛び出し、上京。

そこから一年間フリーターをしながらトップアイドルを目指して、オーディションを受け続け、落ち続けてきた。

そしてある日283プロダクションのオーディションに彼女がやってきた。

彼女は特徴的な方言を隠していたのだが、プロデューサーは貴方の本心を見せてくださいと告げた。

そんな彼女の自己紹介を聞いているとプロデューサーはどうしてオーディションに合格しなかったのだろうかと疑問に思っていた。

聞けばそのスタイルからグラビアなら合格を出すと言われ続けたようだ。

その時、彼は本当に自分は幸運だと内心で思っていた。

彼女程アイドルに向いている子は中々いない。

彼女であればトップアイドルの一角に立てる可能性は充分にある。

なので即採用を彼は告げた。

勿論グラビアはやらないという方向でだ。

恋鐘はあまりの即決にどうしてとそんな表情を浮かべていた。

『あなた程アイドルに全力な人は中々いないです。もしあなたが——』

月岡さんが良ければ、俺がトップアイドルまで連れていきます。冗談なんかじゃないですよ』

俺は本気です。月岡さんならその頂きに行けると思ったから言っているんです。

そんな真剣な目で異性に見つめられたことがなかった恋鐘はとても動揺していた。

こんな言い方されて、確証もないのに信じてても良いのだろうか。しかし彼の表情からはそれが本気で出来ると思っっているのがしつかりと伝わってきた。

グラビアに関して彼はこう言った。

『グラビアをやらなくても幾らでも方法はあります。というかそもそも嫌なことやってトップアイドルなっても嬉しくないでしょ?』

恋鐘は泣いてしまった。

今まで散々言われ続け、それならとオーディションを落とされ続けてきた彼女にここまで言ってくれる人がいるなんてと。

そして今彼女はトップアイドルまでもう少しというところまで順調に登り続けてきた。

『プロデューサーはうちにとって——ああ！ 恥ずかしゅうて言えんばい!』

摩美々は生まれた時から両親に愛されて育てられてきた。

それ故にどれだけ失敗をしても悪戯をしても一度も怒られることがなかった。

そんな彼女は非行、とまでは行かないが夜の街をブラブラしているときにプロデューサーと出会った。

彼女に高い才覚を感じた彼はすぐに話しかけたのだが、なんと未成年だった。

最初雰囲気から二十歳以上だと思い、プロデューサーだが実際は高校生ということで驚愕していた。

時間は夜の21時を回っており、補導されてもおかしくないどころか犯罪に巻き込まれる可能性もあり、プロデューサーは普通に叱った。

ウザがられるのを分かって、これでスカウトできなくなるかもしれないのに、彼は叱った。

別に怒鳴るとかではなく、諭すような言い方であったが。そのまま電話したかと思うと、タクシーが到着。

その後、1万円を渡されてこれで家に帰れと言われてしまった。新鮮だった。

今までこんな風に言われたことがなかったからだ。

頭がふわふわしていた。

タクシーの扉が閉まり、出発する寸前摩美々は彼へ声をかけた。名刺を頂戴と。

すると彼は一瞬考えて、それを断った。

今度会った時ねと。

そのままタクシーは出発してしまった。

初めて会ったのにこんなにも自分を叱ってくれた人生で初めての  
変な男の人。

家に帰って、親に心配はされたもののやっぱり叱られはしなかつ  
た。

確か彼は名乗る際に283と言っていた。

部屋へ向かい、すぐに検索して調べた。

283プロダクションと検索に出てきた。

そこからの彼女の行動は早かった。

次の日、283プロダクションの事務所へ彼女は向かうと、事務所  
前でひたすら待っていた。

でも彼は来なかった。

日が暮れて時間も20時を回りかけたときだった。

『君は……』

スーツ姿の彼は機能と同じ困惑した表情を見せていた。

どうしてここにと言わんばかりだ。

あなたのせいですよー、摩美々はからかうように笑い、一万円札を

ヒラヒラと揺らす。

そして彼女はこう言った。

『あなたのせいで悪い子になっちゃいました。責任とってくださいねー』

こうしてプロデューサーは敗北した。

いや折れざるを得なかったのだ。

今度会ったときと口約束ではあるがしてしまっただ。

『取り敢えず、家まで送るから』

この時プロデューサーは覚悟を決めた。

家へ送った際に両親にはそれはもう怪しまれたが、プロデューサーは逆にその両親へ少し怒りの言葉をぶつけていた気がする。

喧嘩みたいになったが結局、摩美々はアイドルになり、家族の中も良好で何ならプロデューサーも家族と仲がいいまじりになった。

彼女は悪い子ながらもアイドルの道を順調に進んでいる。

なぜなら悪いことをしても隣には叱ってくれて褒めてくれるあの人がいるからだ。

『プロデューサーは私にとって…… うーん、悪い子な私をちゃんと受け入れてくれる人ですかねー』

霧子がアイドルになった理由はとてもシンプルなものだった。

自信のない今の自分を変えたかった、人を笑顔にできるアイドルに憧れた。

そんな彼女は自身を変えるべく、283プロダクションのオーディションに参加し、合格を勝ち取った。

プロデューサーは彼女を見て、夢げではあるがその身に秘めた揺るぎない意志を感じ取り、彼女ならばアイドルで人を笑顔に出来うる

と、そう判断した。

彼女は両親が医者で、それに影響されたのか彼女自身医者への道も人生の選択肢に入っていた。

成績は優秀で国公立大学の医学科を狙えると言われて実際にオーディションを受けながら模試でB判定を貰う高い学力があった。

そんな彼女は悩みを抱え始めた。

アイドル活動と学校での勉強、その両立がどんどん難しくなっていくのだ。

学校からはこれだけの学力があれば医大に行き、医者への道も夢ではないからだ。

アイドルというある意味で不安定な仕事に比べ、医者というのはそういう認識であった。

しかし、それに反論したのはプロデューサーであった。

『人生において選択というのは必ずあります。ですが、どちらかを選ぶ必要はないはずです！』

彼はアイドルと医者どちらもなれるとそう言っただけだ。

勿論、学校側は猛反発した。

そんなの無理に決まっている、その選択をするのは貴方ではなくこの子なんですよと。

それでもプロデューサーは折れなかった。

『俺が勉強を教えます。霧子に次の模試の判定でAを取らせませす』

とんでもないことを彼は言った。

そんなこと出来るはずがない、そもそも次の模試までの時間を無駄にするつもりかと。

それに対してもプロデューサーは正面から打ち返した。

『だったら、そちらが指定した日にそちらで作成したテストを用意し

てください。その指定した日までにこちらで勉強を教えて100点を取らせます』

彼がどれだけ無茶苦茶を言っているのかはその場の全員が理解していた。

しかし彼の表情は至って真剣で、それが本気であることを伝えていた。

余りに馬鹿げていたが学校側は完全にへし折り、二度と文句を言わせないために一ヶ月後を指定した。

彼女の通う学校は名門校であり、普段のテストの難易度もかなりのものだ。

その学校が作るのは大学試験相当の本気のテストであった。

面談の帰り道、プロデューサーはごめんと謝った。

勝手なことを言っつと。

でも霧子はそれを聞いて笑いだしてしまった。

『……だつてどちらも選べるなんて思つてもいなくつたんですから』

そこから霧子とプロデューサーの勉強会が始まった。

無論、アイドル活動をしなからである。

そこで発覚したのがプロデューサーは本当に勉強が得意ということだった。

現役医学部入試相当の難易度の模擬テストを彼は全問正解していた。

曰く、選択肢を増やしたかたのこと、まさか霧子のためにこれが役に立つとは思わなかつたよと笑つていた。

彼の教え方はとても分かりやすく、スツと頭に入つていた。

霧子自身の頭の良さはあるのだが、それでも彼の教導能力はすごかつた。

そして一ヶ月後のテスト当日。

結果から言えば彼女は本当に100点を取ってしまった。  
学校側はもう何も言えなくなってしまった。

『よく頑張った、流石俺の霧子だ。これで心置きなく』どっちも目指せるな』

プロデューズ活動をしながらテストの勉強、プロデューサーの負担は尋常ではなかったはずだ。

それなのに彼は笑顔でそう言ったのだ。

この言葉が霧子のあり方を変えた。

どちらかを選ぶのではなく、やりたいことを選ぶのだと。

『プロデューサーさんは……わたしにとって…… 幽谷霧子という人間の生き方を決めてくれた人です』

結華含めて、アンティーカーはプロデューサーによって人生をある意味で無茶苦茶にされた、そんなアイドルグループであった。

そんな彼女たちがプロデューサーという人物に対して重い想いを抱くの必然であったのだ。

彼女たちの鍋パーティーへの勧誘はプロデューサーの次の仕事の時間ギリギリまで続いたのだった。

そして現在。

調理も終わり、プロデューサーのいない鍋パーティーが始まり、美味しく食べ進め、そろそろ宴も終盤といったときのことだった。

「なに、これ……？」

誰の声だったか、彼女たち全員がCHAINの画面を見ていた。事務所のグループチェインは何個もあり、今回はプロデューサーを除いたアイドル25人とはづきのものだった。

しかし問題だったのはそこに上げられていた画像であった。

プロデューサーの机の上から撮影されたそれ。  
誰が上げたのかよりもその画像の衝撃に全てが吹き飛んでいた。

そこにはプロデューサーの名前が記入された退職届が写っていた。

## 王国崩壊編Ⅶ

「ギャハハハハ!! どうだこれでお終いか!! ジャステイスレッド!!」

「くっ、このままでは……!」

黒い鳥賊と蟹を複合したような怪人が、地面に膝をつく赤き戦士ジャステイスレッドに向かって、巨大な鋏状の右腕を向けた。

その鋏の中から青白い光が明滅しており、エンジン音のような唸りを上げている。

「さあ! 今までやられてきた同胞たちの怒り、得と味わうが良い!!」  
青白い光の明滅が最大になり、その極光がジャステイスレッドを包みこむ。

「くそっ! 頼む、動いてくれ!」

力を入れて立ち上がろうとするが、ジャステイスレッドは既に限界が来ていた。

このまま動けなければ確実にやられてしまう。

その時であった。

「みんな〜! このままじゃジャステイスレッドが負けちゃう! 力を貸して欲しいの!」

ジャステイスレッドと怪人の動きが止まり、その2人の前に一人の女の子が表れた。

赤を基調とした衣装に身を包んだ彼女はそう言って、こちら

つまりはステージ前の観客たちへ呼び掛けた。

「あたしの“頑張れ〜ジャステイスレッド”の後に続いてみんなもジャステイスレッドを応援して!”

せーのと言って彼女は声を発した。

「頑張れ〜ジャステイスレッド〜!」

『頑張れ〜ジャステイスレッド〜!』

彼女に続いて観客席からは子どもたちを中心とした応援の音が、ス

テージ上のジャステイスレッドへ掛けられた。

「う、うおおおお！ 力が！ 湧いてくる！」

「な、なんだと!? どうして立ち上がれる!？」

ジャステイスレッドはその声援のお陰か力を振り絞り、立ち上がる。その姿に驚愕した様子で、怪人に隙が生まれた。

「はっっ!!」

「ぐっ!？」

ジャステイスレッドの蹴撃が直撃し、怪人は後ずさる。

「喰らえ、必殺……！」

そしてジャステイスレッドは深く腰を落とし、左腕を前に、右腕を後に溜めて構えた。

「ジャアステイイイス……イン、パクトオオオ!!!!」

裂帛の気合によつて放たれた赤き炎の拳が怪人の鳩尾を容赦なく抉り貫く。

赤い龍が拳に乗つて怪人を貫く姿が見えた気がした。

「グアアアアアアアアアア?!!」

爆発四散。

!!!

爆煙に包まれた怪人は跡形もなく消え去つた。

見事ジャステイスレッドは怪人スクアクラを撃滅粉碎したのだつた。

「やったああああ！みんなジャステイスレッドが見事怪人スクアクラを倒したよ!!」

そして、その様子を見て感極まった彼女、小宮果穂は飛び上がり喜んだ。

それに続くように観客席の子どもたちも大きな歓声を上げて喜んでいた。

「ううっ、果穂。見事よ、完璧よっ！」

「おいおい、泣いてんじゃねえよ……グスツ」

「果穂さん、流石です。見事、やりきりましたね…… 凜世はとても、



そして場所は変わってヒーローショー会場から少し離れた喫茶店。住宅街の中にある隠れ家的なお店で店内には落ち着いたボサノヴァ調のBGMが流れていた。

そんな喫茶店の奥にあるテーブル席、そこに放課後クライマックスガールズのメンバーが集まっていた。

ショーが終わった後、果穂はそのまま上がりだったため一緒にこの喫茶店へ来たということだ。

「ジャスティスレッド最高でした！」

「ふふ、嬉しそうで何よりよ」

興奮気味に言うのは先程までヒーローショーの司会をやっていた果穂で、どうやらまだあの興奮が収まっていないようで、それを聞く夏葉は微笑ましそうに眺めていた。

「でもよ、最近のヒーローショーってあんな凄いのな」

「はい……爆発も、まるで本物のようでした……」

「あの、龍が見えたのは……勘違いですよ、うん……」

感慨深そうに言う樹里と凜世であったが、智代子はその時見えた龍は何だったのか引つかかっているようだったが、どうやら考えるのは辞めたらしい。

「果穂、それで足りる？ 成長期なのだからもっと食べても良いのよ」  
それにたくさん食べても消費すれば良いだけのことだと、夏葉は言う。

彼女たちの前には飲み物と軽食が並んでおり、少し遅い昼食も兼ねてのようであった。

「はい、ありがとうございます。でもお腹いっぱいなので大丈夫です！」

オムライスを平らげた果穂はオレンジジュースを飲みながらそう答えた。

「でもプロデューサーも一緒に来れば良かったのに……」

紅茶を飲みつつ、残念そうに夏葉は言った。

今日の果穂の仕事にプロデューサーがついていた。

合流した際に、一緒にと夏葉が誘ったのだが、次の仕事があるということで果穂のことを頼むと言ってすぐに行ってしまった。

電話をしながら少し速歩きで次の仕事場へ向かうプロデューサーの背中を見て、メンバーは少しの寂しさを感じていた。

「はい……………とても、とても残念です……………最近直接お話する機会も減って……………」

しょんぼりんぜと凜世は悲しそうに少し顔を伏せている。

それはまるで仕事が忙しい彼氏とすれ違う彼女のような態度であった。

勿論凜世とプロデューサーは恋人関係にない。

しかし彼女の出会いを鑑みればプロデューサーへの思いが強くなるのは当然かもしれない。

外出中、彼女の履いていた下駄の鼻緒が切れてしまったのをたまたま通りかかったプロデューサーが直した、というものである。

古典的、少女漫画的と言われても仕方のないそんな出会い。

凜世の心は完全にぶち抜かれていた。

それはまるでツイ○バ○ターラ○フルを撃たれ爆散したス○ース○ロニーのようであった。

彼女の趣味は少女漫画を読むというもので、そのシチュエーションと重なったこと、さらには凜世のフィルターを通したことにより只でさえ容姿の良かったプロデューサーは最早ナルキツソスみたいな容姿になっており、結果徹底的に落ちた。

落ち切った。

確かに彼女は家が老舗の呉服屋の娘で、多少世間知らずなところがあり、通っていた学校も女子校で異性への耐性がなかった。

そんな彼女が王子様と運命的な出会いをしたら恋に落ちても仕方のないことだろう。

そこからの彼女の行動力は凄かった。

彼からその流れでアイドルにスカウトされすぐに承諾。

連絡先を聞いた後、すぐに帰宅して両親を説得し、アイドル活動の許可を得た。

勿論両親からは大反対を喰らった。

騙されているのではないかとそう思うのは当然であった。

大事な大事な愛娘がどこか世間知らずなところがあるのを分かっていた両親はなんとか考え直して欲しいと言うものの、凜世の考えは変わらず、そんな彼女に根負けしアイドル活動を了承したのだった。

その後、すぐに両親から承諾も取れましたとプロデューサーへ連絡した凜世。

電話を受けたプロデューサーはかなり驚いていた。

なぜなら後日、アポイントを取ってアイドル活動について説明をした上で承諾を貰おうと思っていたのだ。

勿論、後日に説明をしに行った上で改めて承諾は貰ったのだが。

このようなことがあって晴れて凜世はプロデューサーの元でアイドルになったのだった。

今ではフアンの喜ぶ顔もそうであるが、プロデューサーが喜ぶ顔を見るのが彼女にとって最も嬉しいものの一つになっていた。

「でもプロデューサー、最近いつにも増して忙しそうだよな」

人には無理すんなって言う癖にさ、と呟くように続けたのは樹里だ。

彼女の表情はかなり不満げに見えた。

樹里は最初プロデューサーにアイドルとしてスカウトされた際も一度断っていた。

自分はそんなの柄じゃないと。

ぶつきらばうな口調と不良と勘違いされることもあってあり得ないと、そう思っていたのだ。

しかしそんな彼女にプロデューサーは寧ろそのままの姿でいてく

れた方が有り難いとそう言ったのだった。

曰く、それは個性であるし欠点ではない、寧ろ強みであると。

そんな彼の態度に興味を持ってスカウトに了承したのだ。

それを聞いた彼はとても嬉しそうな顔をしてなんだか調子が狂った樹里であつた。

連絡先を聞いて両親に後日説明に行かせてもらいたいと連絡先を交換し、スケジュールを調整。

そして、プロデューサーと樹里とその両親の4人で話しをすることになった。

意外にも彼女の両親は否定的ではなく、きちんとアイドル活動の説明をし、了承を貰うことが出来て安心した樹里。

そこから彼女のアイドル活動は始まったのだが、プロデューサーは忙しいのにも関わらずそれを顔に一切出さずいつも笑っていた。

樹里のこの性格で他の事務所のアイドルと軋轢が生まれてしまった時も仲裁に入ってくれた。

状況的には完全に言いがかりに近いものだったが。

そんなこともあつて彼女は怒られるのを覚悟した。

いくら自分が悪くないとは言え、相手の挑発に乗ってしまったのは良くない。

だがプロデューサーは彼女を怒らなかつた。

彼曰く、話しを聞く限り樹里は全く悪くないからと、それだけ。

ワタシが嘘を言っているかもしれないだろやもつと怒るべきだろと、何故か樹里が怒つたのだがそれに対してもプロデューサーはこう言った。

『信じてるからね、樹里は真面目だし嘘は吐かないって。それに悪くないのに謝るなんて嫌でしょ？ そんなのもつと大人になつてからでも良いよ』

でも本当に悪いことをしたときは別だよと、苦笑して言った彼の言葉がひどく耳に残つた。

そこから彼女はさらにアイドル活動に力を入れ、レッスンも熱心に取り組み、あの言いがかりをつけてきた他事務所のアイドルより上へ行った。

ある意味であの時の子供だった自分から脱却するためのようなものであったが、これで漸くプロデューサーと同じ大人の立場になったような気がした樹里。

守られる立場ではなく対等で。

今では率先してまとめ役を買ってくれることもあって、プロデューサーに頼りにされることを喜んでいる姿を目撃されることがあるようになった。

「確かにそうだね、なんか何かに追われているような感じっていうか」

そう樹里の言葉に心配そうな表情で頷いたのは智代子だった。

彼女とプロデューサーの出会いはおーディションであり、合格はしたのだが、実は当初そのオーディションも受ける予定はなかった。

元々彼女の友人がそのオーディションを受ける予定であったのだが、土壇場でその友人が体調を崩し、代わりに受けて欲しいことで受けたという変わった経緯があった。

面接予定だった子と違う人物が来たということでプロデューサーも最初はどうかと思うたそうだが、彼女の親しみやすく明るい性格を見て直感的に合格を出した。

まさか受かるとは思っていなかった智代子はとても驚いた。

アイドルとして活動がスタートして智代子は1つの悩みを抱えることになった。

それは自分にはこれといった強みがない、ということだった。

平凡であり、そもそも本来であればアイドルになるはずなどなかった自分に一体どんなことが出来るのか。

そんな彼女にプロデューサーは1つの提案をした。

好きなものを教えてほしいと。

その質問に対して一瞬考えて智代子はチョコレートと答えた。

更にどれくらい好きなのかを聞かれ、智代子は休日は食べ歩きをしますと答えた。

じゃあSNSはやっているかと聞かれ、それもしていると答えた。するとプロデューサーは良いねと笑顔で言う、それに智代子にはお誂え向きだねと言った。

『じゃあチョコレート好きアイドルで行こうか』

そう言われて一瞬クエスチョンマークが頭を過る智代子。

歌やダンス、演技力などではなくそんなことで良いのかとそう思ってしまったのだ。

その様子の智代子に対して、プロデューサーは優しく語りかけた。

『智代子の一番凄いところはその親しみやすさだよ。だから取っ掛かりって言い方はあれかもしれないけど君を見てくれる人たちにもっと親しみをもってもらうために、ね』

智代子は愛されるよ、そうプロデューサーは続けた。

彼のその言い方に少し顔を赤くしてしまう智代子ではあったが、その言葉を信じてみよう、そう思ってその路線で行くことを決めた。

結果的にそれは成功することになる。

彼女の名前もチョコに語感が似ており、元々友達からはチョコやチョコちゃんと呼ばれていた。

名前と似ているチョコレートをただ利用しているだけかと言われるればそうではなく、きちんとチョコレートに関する最新のトレンドも追ってSNSでの情報発信や、他のキャストと軋轢を生まない性格から見ている人たちからの好感度は高くなった。

家族や学校の同級生など応援してくれる人を身近に感じ彼女にとってそれは大きな自信へと繋がったのだ。

本来オーディションを受けるはずだった友人も彼女のこととても応援してくれて、どころかライブがあったら絶対に行くねと言ってく

れる程で、智代子はそんな彼女のためにもさらに頑張ることを決意した。

『本当に良かった、智代子の魅力がちゃんとみんなに伝わってくれて。それにお友達には負けちゃうかもしれないけど俺だって智代子のファンなんだ』

そう言って彼女を支えてくれたとても真面目で頑張りやなプロデューサー。

それはずっと一緒に活動を続けたことによつて真に理解することができた。

自分がいくら大変でも決してその様子を見せようとしさない。

智代子はそんなプロデューサーのため、少しでも元気をあげようと彼にお菓子の差し入れをした。

その時の彼の嬉しそうな顔が智代子の頭に強く残っていた。

だからこそ、今の辛そうな姿を見せようとしさないプロデューサーのことを智代子はとてもとても心配していたのだ。

「そうよね、そこは私も心配しているよ」

夏葉はコーヒーを一口飲みながらそう言った。

仕事終わりの果穂を誘ったのは本心ではあったが、実際のところ今日はプロデューサーを誘うという目的が彼女の中にはあった。

彼女は友人に連れられたアイドルライブを見て衝撃を受け、そこからオーディションに来たという経緯がある。

そしてオーディション当日、彼女の自信満々なその様子に光るものを感じたプロデューサーは採用を決めたのだ。

彼女は世界的な車メーカーの社長令嬢で超のつくお嬢様である。

有栖川の家に恥じないよう常に全力でトップアイドルを目指す彼女の姿はプロデューサーにとってみても好感が持てるものであった。

そんな全力で突っ走る彼女をプロデューサーは全力で支えた。

彼女のトレーニングに対して、最良の結果になるように色々なところで手を回していたのだ。

その介あつて彼女はアイドルとして大きな成果を残せた。テレビやラジオ、雑誌の撮影など様々な仕事が舞い込んできて、とても順調にアイドル活動が進んでいた――はずだった。

ある日のこと、撮影が終わり、夜一人で自宅へ帰ろうとしてして近道の人気のない道を歩いていたらときだった。

謎の人影が表れたのだ。

突然表れたその人影に恐怖を感じ声がでなくなる夏葉。するとその人物、男は静かに語り始めた。

『お前の親の会社で働いていたがクビになった』

『ムカつく同僚を殴っただけなのに』

『あいつが悪いのに』

『だから復讐してやる』

夏葉はこの男の言っている意味が分からなかった。

全部自業自得なのを周りのせいにして逆ギレしているだけだと。

夏葉はそれに怒りを覚え、言い返してしまった。

しかし、それが男の神経を逆撫でしてしまう。

『うるさいうるさい！ 全部お前らが悪いんだ！』

男の手にはナイフが握られており、そのまま走って向かってくる。

夏葉は動くことができなくなっていた。

咄嗟なこと、夜なこと、多少鍛えているとは言えこちらは女なこと、様々な状況が重なり彼女は恐怖という感情で支配されていた。

このまま私の人生は終わってしまう、まだトップアイドルになれていないのに。

そう思ったそのときだった。

『何やってんだ馬鹿野郎!!』

次の瞬間、目の前の男は吹き飛んでいた。

何が起きたか分からなかった。

気づいたら男は数メートル先の電柱にぶつかり完全に伸びていた。

『大丈夫か!? 怪我はないか夏葉!?!』

目の前にいたのはいつも夏葉を支えてくれていたプロデューサーだった。

彼が横から入って、ナイフを持った男を蹴り飛ばしたのだ。

夏葉はバクバクする心臓を抑えながらどうしてここにと言う。

『たまたま営業の関係でこっち来ててさ、そしたら夏葉の後ろ姿が暗い路地の方入っていくからさ。ごめん、ちよつと気になってつけさせて貰った。そしたら変な男にナイフを突きつけられている夏葉がいて』

本当に良かった夏葉が無事で、そう安心した表情で言うプロデューサーの顔を見て夏葉は抑えていたものが開放されてしまい彼に抱きつきその胸の中で泣いてしまっていた。

当たり前だろう、もしかしたら殺されていたかもしれない状況だったのだ。

プロデューサーはそんな夏葉を見て一瞬迷うも、彼女に大丈夫大丈夫と声を掛けながら抱きしめ返した。

そして当たり前だが結果的に男は逮捕。

夏葉の両親から何とお礼をすればいいかと深く頭を下げられた。

もし彼がいなければ大事な愛娘を失っていたかもしれないのだ。

さらに言えばどうやったかは分からないがプロデューサーが根回しをしたお陰で大々的なニュースにならず会社のイメージダウンしないで済んでいたところもあり、両親はそれも含めお礼を言った。

『いえ、彼女を守るのは私としては当然のことなので気にしないでください』

しかし彼はその一言でお礼は良いので、夏葉さんと今度家族旅行にでも行ってあげてくださいと言ったのだ。

『夏葉さんは少しの間活動休止させました。今必要なのはメンタルの回復なので何よりも彼女を気にかけてください。私も微力ではありますが尽力いたします』

その言葉を聞いた両親はその後彼女と一緒に過ごし、プロデューサーもその様子を気にかけて、どうにかメンタルも回復した夏葉はアイドル活動に復帰し、今を全身全霊で頑張っている。

さあ、ここまで来たら分かると思うがそんな強烈な出来事があった夏葉はプロデューサーに対して特別な思いを抱いていた。

吊橋効果と言われればそれまでであるが、あの状況を華麗に助けられれば仕方のないことだろう。

さらに言えば普段見せない荒々しい口調も男というものを感じさせ、その思いを増加させた。

そう彼女はプロデューサーを男として意識してしまっていたのだ。

この件で彼女の両親も娘を庇い助けてくれたこと、さらにその仕事の手際、その性格（あと容姿）を見て彼であれば私たちは何も文句はないよと言わしめる程に気に入ってしまった。

つまりは両親公認になっていたのだ。

勿論、アイドル活動は全力で頑張りトップアイドルを目指す。

そしてもう一つ、プロデューサーとそういう関係になるという第二の目標。

これが夏葉の今欲しいもの、であった。

「……あれ、プロデューサーさんじゃないですか？」

すると果穂が喫茶店の窓を指差した。

その先にはスーツ姿のプロデューサーが歩いているところが見えた。

それを見た彼女たちはお会計を済ませ、すぐに彼を追いかけた。

何か予感がしたからだ。

追いかけた先、オープンテラスの喫茶店でプロデューサーは誰かを待っているようだったが、数分後目的の人物が彼の前に表れた。

女性。

二十代後半から三十代前半であろうお洒落で綺麗な女性。

彼はその女性と親しげな様子で話しを始めた。

彼女たちはそんな2人の話しを聞くために少し近くの席に座るが、距離があつてその声は上手く聞き取れない。

そしてその会話の中、ある決定的な言葉が聞こえてしまい彼女たちの時間は止まった。

「今より先、深い関係を私は望んでいません」

とても真面目な表情で女性へそう告げるプロデューサーの言葉が耳から離れなかった。

## 日常侵食編Ⅰ

「……………っあ……………病んだ」

————— どうしてこうなってしまったのだろう、

カミサマ。

一部の世間の人から彼女はそう呼ばれていた。

カルト的と言っていいその人気。

今を悩み生きる現代女子に響く、そのメッセージ性のある歌や彼女自身の在り方はある意味で崇拜の対象になっていると言っても過言ではなかった。

しかしそれは表向きの話だ。

誰も彼女のこと知らない。

誰も彼女を見ていない。

誰も彼女————— 斑鳩ルカのことを理解しようとしなかった。

目が覚めるとそこは知っている天井だった。

確認するまでもなくそこは自身が住んでいるマンションの一室で、

目が覚めた彼女————— 斑鳩ルカはそのソファの上にいる。

昨日は確か、胸糞悪くて酒の飲んだようなどわりを見渡す。

アルコールの空き缶が何缶も転がっており、どうやら酔い潰れてそのまま眠ってしまったようだった。

「最悪の気分……………」

彼女は重い体を引きずって、キッチンへ向かい蛇口を捻る。

水を飲む。

身体は特に楽になることはなかった。

ソファへ戻り、座るとテーブルの上にある雑誌が目に入る。

「……………っ……………」

それなりに売れているアイドル芸能雑誌。

開かれたそのページには2人組のアイドルユニットが写っていた。

『SHHis（シーズ）』。

283プロダクションが誇る七草にちかと緋田美琴の2人で結成されたアイドルユニットである。

今話題の実力派ダンスユニットで出ている楽曲は勿論のこと、番組でも片方が話しを回してもう片方が天然な発言をして突っ込むなどの正反对さが受け、多方面で活躍している注目されているそんな2人。

シーズの名前は嫌でも聞くようになった。

テレビをつけても、動画サイトを見ても、ネット記事を見ても、雑誌を見ても、周囲の声からも。

「くそつくそつ……………何なんだよ……………!!」

広げられた雑誌を掴みそのまま、無造作に投げた。

宙を舞う雑誌、その刹那、ページの中の瞳と目があった。

そんな気がした。

「何でなんだよ……………!」

頭を搔き毟る。

頭がおかしくなりそうだった。

なぜ自分がここにいるのかも、何をやっているのかも、もう何も分からなかった。

『ルカ……………?』

「うつ……………」

思い出す。

今でも脳内を支配するあの表情。

ルカにとって世界で一番憧れていた彼女、緋田美琴はまるで自分のことなんか忘れていて今思い出しのかのようなそんな顔で。

『はじめまして。シーズのプロデューサーをしています。いつもうちの美琴がお世話になっております』

思い出す。

ヘラヘラ笑って、彼女の隣にいたあの男。

美琴が、あの美琴が嬉しそうにあの男の側にいた。

まるで”幸せ”みたいなそんな表情で。

理解者を得たみたいなのそんな表情で。

どうして。

どうして。

どうして。

美琴はそんな表情（かお）しない。

ああ、そこまでして私を美琴は……！

笑えてきた。

笑いが止まらなかった。

まるで自分は道化のようなそんな気分だった。

ルカは美琴へ纏まらない怨嗟の言葉をぶつけた。

『ルカには関係ないでしょ？』

今もなお突き刺さる鋭利な彼女の言葉。

どうしてそんな、そんな酷いことを言えるのだろうか。

美琴にとってルカという存在はもうその程度のものだというのだろうか。

気づいたらルカは美琴ではなく側にいたあの男へ言葉をぶつけて

いた。

『あんなんかが美琴の側にいて良いはずない……！　どうして、あんなんかが……！』

理不尽極まりなかっただろう。

初対面の小娘にこんなことを言われて。

不穏なやり取りをしている2人を止めずに黙っているようなそんな腑抜けた男。

ヘラヘラ笑っていればどうとでもなると思っていそうなその男の顔が。

自分に何を言われても、言い返さないそんな態度が。

ルカには全て気に入らなかったのだ。

だからこそあの男への言葉が止まらなかった。

『……　ねえ、どうしてそんなことを言うの』

背筋が震えた。

あの美琴が、あんなにまで冷たい声を出せるなんて。

ルカは知らなかった。

そんな高ぶった彼女の怒りの感情を。

『私を悪く言うのは良い』

『でもプロデューサーは何も関係ないよね』

『あなたはプロデューサーの何を知っているの』

『プロデューサーの凄いところも良いところもあなたは何も知らない癖に』

『私はプロデューサーの悲しむ顔も怒った顔も見たくないの』

『だから、次、私のプロデューサーにそんなこと言ったら、私はあなたを』

絶対に許さないから。

もう行こう、プロデューサー。

そう言つて美琴は男の腕を引つ張つて行つてしまった。

2人が行つた後、ルカは力が抜けて、その場に座り込んでしまった。怖かった。

感情を見せないあの美琴が見せた怒りの感情。

全てルカは知らなかった。

あの男はルカの知らない美琴を知っている。

「……………あつ……………つつつつ……………あつ、あああああああああ  
ああ!!!」

カーテンを締め切つた暗い部屋にルカの悲痛な絶叫が木霊した。

「あら、まだやってないわよ。19時から」

18時より少し前。

居酒屋やバーが立ち並ぶ夜の街のある店の一角。

店内はごく普通のカウンターとテーブル席のあるスナックバー。

そのママである女性は開店の準備をしており、普段なら時間外に来る客は出ていってもらうのだが。

「……………最近、来ないと思つたら、まさか開店前に来るなんて」  
「すみません、全然時間が取れなくて」

入ってきたのは身長が180センチを超える長身の若い男だった。  
柔和なその表情は開店前に来られたいことによる少しの苛立ちを

完全に霧散させた。

「座つて。何か食べたいのがある?」

ママはそう言つて冷蔵庫を開けて食材を確認し始める。

「うーん、おまかせで」

そういのが一番困るのよ、そう言いながらも既に目星は付いていたのだろう、食材を出していく。

「あと、一杯だけ」

「はいはい」

食材を一度置いてから、ロックグラスを出しそこへスコッチウイスキーを入れると琥珀色の液体が透明なグラスの半分を侵食した。

「でもこんな時間に来るの珍しいわね。サボり?」

「ははは、違いますよ。今日は早く終わつて直帰できる感じだったんで」

男はウイスキーの入ったグラスを傾ける。

スモーキーな香りが鼻を抜けていく。

「それなら開店してから来なさいよ」

「そうしたらあなたと落ち着いて話せないなって思いましたね」

そう言つてグラスを傾ける男はひどく絵になっていた。

以前、男がスナックへ来た際に他の男性客に色男やなんや言われいたのを思い出す。

「私だから良いけど、そういうこと他の女の子にも言つてないでしょうね」

「言うわけないじゃないですか」

そう笑う男だったが信用はなかった。

全くと言いつつもママは食材の調理を始めていく。

水を入れた鍋に火をつけ、ウインナーと玉ねぎ、ピーマンを切っていく。

「あなたは昔からそういうところがあるから。刺されても知らないわよって、前に刺されそうになったんだけ」

「違いますよ、あれは助けようとして結果的に刺されそうになっただけなので」

それにそんなモテ男みたいなことが俺にあるわけないじゃないですかと、男は言った。

ママは少し頭を抱えそうになった。

「ま、無いなら無いで別に構わないけどね。あんた恋人とか出来たら気を遣ってこういうお店来なくなりそうだし」

「お客が減るのは店的にも困るし、こうやって生存確認できなくなるのはそれはそれで寂しいものがあつた。

「いやいや来ますよ。別に風俗とか行ってるわけじゃないですし」

「あんたから風俗なんて聞くと変な感じね」

「そうですかねと男は首を傾げる。」

この男に憧れを抱いている女の子からしたらイメージダウンものじゃないだろうか。

まあそつちの方が逆に変な女に引つかからなくて安心かもしれないが  
いが

ママは切つた具材をフライパンで炒めながら、沸騰した鍋にパスタを入れ茹で始める。

「最近、仕事はどうなのよ」

「うーん、ぼちぼちと言つた感じですかね」

「いつもぼちぼちじゃないあんた」

「じゃあ順調と言つておきますよ」

「じゃあつてなによと言いつつ、ママは思い出す。」

この男はあまり自分の中へ踏み込ませない人だったと。

いやきちんと踏み込ませるが踏み込ませないと云つた方が正しいか。

ややこしい男である。

「まあ、色々やるこゝろがたくさんありましてね……あ、そうだ。前  
言つてた娘さんは元気なんですか？」

「元気なんじゃないかしら——————————————————————  
つてまさかあんた？」

「いやいやいや違いますよ。俺その娘さんと会つたこともないじゃないですか」

慌てて否定する男を見てなんだか笑つてしまった。

「私はあるがスカウトするんじゃないかって思っただけよ」

「ああ、そっち。それこそないですよ」

そもそも他事務所からの引き抜きはマジでめんどくさいんで、そう語る男の表情は実体験から来ているもののような気がした。

男が芸能関係で働いているのはママは知っていた。

そしてママの娘が芸能関係で働いているのも男は知っていた。

だがお互いそこまでなのである。

どこの事務所でなどの具体的な内容は話していない。

秘匿義務は勿論であるが、そっちの方が変に意識しないで話しをできるところだ。

さらに言えば別に男がどんな仕事をしていようが、ママの娘が誰なのかもお互いにたいして興味はなかった。

「てかあんだけ心配そうにして、元気なんじゃないって……」

「忘れたわ、そんなの」

茹で上がったパスタをザルに入れ、水分を切り、炒めていた具材に放り込むとケチャップを入れ、混ぜる。

本当に相変わらずこの男は相手の機微に聡い。

だがそれを認めてしまうのは何だか腹立たしかったので絶対に認めたりなどしないが。

「はい、どうぞ」

「わーい、ナポリタンだー」

ママは皿に載せた山盛りのナポリタンとフォークを喜んでいる男へと差し出す。

「熱いから気をつけて食べなさい」

「いただきま熱っ」

言わんこつちやないとママは苦笑する。

この男は毎回自身が猫舌なのを忘れるのだ。

「めちやくちや美味しいですよ」

「なら良かった」

美味しそうに食べる男を見ていたら、なんだかこちらも嬉しくなってきた。

娘の美味しそうにナポリタンを食べていた姿と重なり、彼女は頬が緩んだ。

「そうだ。実は旅行に行くの決めたんですよ」

「そうなの？ 珍しいわね」

あの常に働いているこの男からそんな言葉を聞くななんてと、ママは驚いていた。

「はい、博多に行こうかなって。飯が美味そうなんで」

「…… あらほんと。私も半年後、娘と2人で博多に行くのよ」

「マジですか。俺も半年後に行くんですよ。とんでもない偶然ですね、もしかしたら遭遇するかも」

まさかの一致に男は驚愕する。

別に前から話していたわけではないのにと。

「その時はどこかご飯連れてつてもらおうかしら」

「別に良いですけど、娘さん絶対に嫌がりますよ」

「逆にあの子のことだからあんたみたい男気に入りそうだけどね」

男の好みは似るといおうが、果たしてどうなのか。

ママ個人としてはこんな男に引つかかって欲しくないと半々な気持ちであったが。

「まあ、そのときはそのときで———— つとごちそうさまです」

そう言つて山盛りだったナポリタンを既に空になっていた。

「お腹、減つてたのね」

「うーん、別にいつもと変わらないですけどね」

男はこの容姿（ナリ）で健啖なのだ。

毎回このくらいの量を平気で食べるので別段驚きはしなかったが。

いつもより食べ終わるのが早い気がした。

「じゃあ、お会計で」

「別に良いわよ、今度来た時にその分たくさん飲んでつて」

ウイスキーを飲み干し、一息をつくると男は財布を取り出そうとするもそれを断るママ。

どうせこの男は多めに置いていくつもりなので、そんなことはさせ

ない。

「ははは、ありがとうございます」

「ん、また来なさい。あ、出るなら裏口からね」

はーいと言って男は店を出ていく。

誰も居なくなった店が少し寂しく感じた。

「さて、と。片付け片付け」

男の食べ終わった食器とグラスを取ってシンクに入れると水を流している。とまた入り口の扉が開く音がする。

ママは先程と同じ言葉を投げかけようとする。

「まだやってないわよ。開店は19時から」

「仕込み、手伝いに来た」

20代前半の女の子がいた。

その女の子にママは見覚えがある。

なぜならば。

「…………… 今日はお客さんが多いわね。おかえり」

「…………… ? ただいま、ママ」

まだ開店していないのにと首を傾げる彼女にママは少し笑ってしまふ。

彼女の名前は斑鳩ルカ。

このスナツクのママの実の娘であった。

## 王国崩壊編Ⅷ

『illumination STARS（イルミネーションスターズ）』。

283プロダクションが誇る3人組のアイドルユニットだ。

先日、彼女たちは大きなライブイベントを無事成功させ、SNSやテレビでも話題になって今話題のアイドルでもある。

そんな彼女たちはライブ明けということもあり本日は休み。

3人でショッピングモールへ買い物に出かけていた。

「この花柄のスカート可愛いね」

ショッピングモールの中にある女性向けのアパレルショップ、その中で櫻木真乃は淡い花柄のマーメイドスカートを指して言った。

「そうだね、真乃ならこのカーディガンも合わせると良いんじゃないかな」

それに対し、反対側にあつた白のカーディガンを手にとって風野灯織はそのスカートに合わせた。

「真乃はフェミニンなの似合うよね」

うんうんと灯織の言葉に納得するのは八宮めぐる。

普段はアイドル活動で世間を賑わせている3人であるが、れっきとした女子高生。

仕事を忘れてショッピングを楽しんでいるようだった。

「あ、これ……」

すると灯織がマネキンに着せてあつたワンピースに目が行った。

濃い青のパフスリーブのロング丈のものだ。

確かにクールなイメージを持つ灯織に似合いそうではあつた。

「このワンピースも可愛いね！ 良いんじゃないかな！」

「うん、これとっても似合うよ灯織ちゃん」

2人からの評価は上々で購入することも良いのではないかと、灯織へ言う。

「はい、プロデューサーがこのワンピースをととても可愛いと言っていたので……」

灯織が以前、事務所でファッション雑誌を読んでいた時だ。

その時、プロデューサーは休憩していてソファに座っていたのだが、灯織は事務所に来て他に誰もいないことを確認してわざわざピタリと隣に座った。

勿論ソファはもう一つあった上、座るにしてもスペースを空けて座ればいいのである。

昨今世間を騒がしているトナラーというものに似ているが、プロデューサーと灯織の間には強い信頼関係があったため、その限りではない。

無論、このことを知るのは灯織とプロデューサーの2人だけである。

灯織が読んでいた雑誌が目に入ったのか、プロデューサーはこんなことを言った。

『このワンピース、灯織に似合いそうだね。とても可愛いと思うよ。まあ、元々灯織が可愛いっていうのもあるんだろうけどさ』

はははと笑うプロデューサー。

瞬間、灯織はそのワンピースが記載されているページにどこから出したのか赤ペンで5周くらいグルグルと大きな丸を描いていた。

灯織は後でこのワンピース絶対に購入しようと思った瞬間であつた。

「へ、へえく。そうなんだく……」

「……プロデューサーさんが」

何故か流れる微妙な空気。

ただ服について話してただけというのに。

めぐると真乃の目線は件のワンピースに注がれている。

値段にして48,000円(税抜)。

3人はほぼ同時に財布を確認する。

いくらアイドルとして売れていても未成年なため、給料は親が管理している。

そのため一般的な女子高生よりほんの少し多めくらいの手持ちしかない。

そもそも余程お金を持っていない限り大人でも買うにはかなり躊躇する値段である。

ちなみに灯織はタイミング悪くこのワンピースを買うためにお金を貯めている最中であつた。

考えこんでいる3人であつたが、周囲の視線を集めていたことに気づくと慌ててお店を後にした。

3人に共通しているのは身バレしないように変装しているという点であるが、みんな容姿が整っている(283プロダクションのアイドルがそもそもそういった部分も審査対象に入っているため当然と言えば当然)ため、別の意味で注目を集めていた。

そんな彼女たちが次に向かったのは雑貨屋(F○a n c○r a n c)ってなんか良い匂いするよね)であつた。

「あ、これ……」

真乃が店内に入つて早速目に入ったものがあつた。

「犬の置物、だね」

「ポメラニアンだ、可愛い」

そこにあつたのは陶器製のポメラニアンの小さなインテリアだ。

丸いつぶらな瞳が3人を見つめていた。

「プロデューサーさん、犬の中でポメラニアンが一番好きなんだって」

以前、仕事終わりにプロデューサーと真乃で公園に寄り道したことがあつた。

そこにポメラニアンを連れて優しそうなおばあさんが居り、真乃自身可愛いなと思いつつ、その横を通り過ぎようとした所、そのポメラニアンがプロデューサーの足元に寄つてきたのだ。

ポメラニアンはプロデューサーに抱っこしてと言わんばかりに、尻

尾を振っており、おばあさんがリードを引っ張っても動かなかった。そんな中、プロデューサーは笑顔で大丈夫ですよと言ってポメラニアンを撫で始めた。

優しい顔でポメラニアンを撫でる姿を見て少しうらやましいと思った真乃。

その時ポメラニアンが犬の中で一番好きなんだと語るプロデューサー。

おばあさんは家族以外には懐かないのに珍しいと、そう言っているのを聞いて再度ポメラニアンを見る。

ポメラニアン（3歳の女の子で名前はマロン）はお腹を見せるようにしてプロデューサーへ甘えていた。

一切マロンは真乃に見向きもしなかった。

その時、ポメラニアンが真乃に対して勝ち誇った顔していたのは恐らく気のせいだろう。

鳥類を始めとした動物全般好きな真乃であったが、本当に少しだけイラツとしていた。

そしておばあさんが流石に我が子の暴走を止めようしたのか、こんなことを言った。

『「マロンちゃん。お兄さんとお姉さんのデートの邪魔になるから帰るわよ』

瞬間、真乃はマロンへ抱いたほんの少しの苛立ちが消え去るのが分かった。

ありがとう、おばあさん。

ありがとう、マロン。

真乃は嬉しかったのだ。

2人でいるところを見られ、それを傍から見たらデート中だと思われたことを。

ちなみに真乃はプロデューサーの隣を歩いていたのだが、拳一個分も無いほどの距離であった。

『ははは、カップルに間違われちゃったな。ごめんな彼氏役としては役者不足かもしれない。まあ、こちらとしては光栄極まりないって感じだけど』

そう彼は続けた。

その言葉に真乃はほわほわしていた。

脳内にセロトニンが分泌され、今ならライブを5日間程ぶっ続けでもやり切れるそんな気がする。

ふひゅひゅつと笑みが零れそうになっていた。

「ふ、ふくん。そうなんだ……」

「……プレゼントに」

またもや流れる微妙な空気。

3人の思考は統一されていた。

プロデューサーへプレゼントしようと。

しかも残り1つのみ。

さらに言えばこの置物の値段。

値段にして12,000円(税抜)。

手乗りサイズなのにこの値段は流石老舗高級ブランドであった。

3人の手持ちは以下略。

周りの視線も以下略。

店を後にすると、今度は香水店へ向かうことになった。

「あ、これ……」

そして店内を見て回っていると、めぐるの目にあるものが入った。

「いい香り……」

「金木犀だね」

琥珀色の容器、そこに入っているのは金木犀の香水だった。

ガラス製の容器にあしらわれた金木犀の花のデザインが目を奪う。

「プロデューサー、金木犀の香りが好きなんだって」

以前、休日に街を歩いているとたまたまプロデューサーと遭遇した時があった。

彼は仕事ではあったものの丁度お昼の時間だったため、休憩を兼ねて一緒に昼食を食べに近くの喫茶店に2人で入った。

ごくごく普通のチェーン店の喫茶店で、プロデューサーはナポリタン、めぐるはグラタンを注文した。

味も本当に普通ではあったものの、めぐるにとってプロデューサーと一緒に空間でお喋り出来るだけでお釣りが出るレベルである。

和やかなお喋りの時間。

彼の最近あった話し等を聞きながら、自身の学校であった話しや家族、友達の話しなどに花を咲かせる。

ちなみにめぐるは彼がお手洗いで席を立った時に、食べ終わった皿に置かれたフォークを口に一瞬加えて元に戻すということをやっていた。

乙女心なのかもしれないが関係性が構築されていない場合は真似をしないように（単純に行儀が悪いとも言いが）。

お手洗いから戻ってきたプロデューサーに何食わぬ顔で接するめぐるは心が強かった。

そしてお会計を済ませ、店を出るとプロデューサーは次の現場ということで駅に向かうことになったが、めぐるも駅まで一緒に行く流れになったのは言うまでもない。

仕事に送る、彼女、奥さんの疑似体験が出来るからである。

そんなことを考えながら駅まで向かっていると、プロデューサーがふと足を止めた。

どうしたのと聞くと、彼はある方向へ指を指した。

そこには小さな黄色い花である金木犀が咲いていた。

『俺さ、金木犀の花っていうか、この香りが好きなんだよね』

そう告げるプロデューサーの横顔が少し寂しく見えてしまったのは気のせいだろうか。

めぐるの心は締め付けられる。

『昔住んでいた街を思い出してさ。小さい頃を思い出すんだよね』

ノスタルジックな気持ちになっちゃったとプロデューサーはめぐるへと笑いかける。

めぐるはその姿にときめいていた。

普段のカッコいい彼と今の少し弱ったように寂しそうにする彼の、そのギャップに。

守ってあげたい、側にいてあげたいとそんな感情がめぐるの中で燃え上がっていた。

『でも金木犀って、イメージカラーとかじゃないけどちよつとめぐるに似てるよな。だからめぐるを見ると実は少し安心するんだよね』

変なことといってごめんなと謝る彼を横目にめぐるの情緒はぐちゃぐちゃになっていった。

金木犀が好き↓金木犀を見ると昔を思い出す↓金木犀とめぐるは似ている。

つまり彼はめぐるのことが好きということじゃないかと。

彼女の頭の中はお花畑になっていた（金木犀だけに）。

ちなみに後に金木犀の花言葉の意味を調べてさらにめぐるは悶えることとなった。

「そ、そうなんだ……」

「……これを付ければプロデューサーに」

またまたまたもや流れる微妙な空気。

値段にして16,000円（税抜）。

流石天下のC○A N○Lである。

3人の手持ちは以下略。

視線も以下略。

そんな彼女たちが決断したのは先程の雑貨屋へ戻り、ポメラニアン

の置物をお金を出し合って購入することだった。

抜け駆けは何も生まない、3人は仲良しなのである。

共通してプロデューサーへの深い恩義があった。

そのため、イルミネーションスターズとしてのプレゼントとしての置物を贈ることにしたのだ。

そんな3人はホクホク顔で街へと繰り出すのだが、そこで見覚えのある後ろ姿を見つけた。

「……あれってプロデューサーさん？」

灯織がふとある方向を指す。

そこには何といつものスーツに身を包むプロデューサーがいたのだ。

それは間違いなくプロデューサーで、見間違えることは絶対になかった。

「ほんとだ。お仕事中だね」

「うん……でもあの人は」

めぐると真乃も仕事をするカッコいい彼の姿を確認するのだが、彼女たちはその時既にプロデューサーではなく別のことで頭がいっぱいになっていた。

綺麗な女性が彼のすぐ隣を歩いていたのだ。

2人が楽しそうに談笑しながら歩くその姿に彼女たちの心はざわついていた。

仕事中なのだから取引先の人の可能性は高い。

しかし、仕事相手としては距離が近く、彼女たちの疑念は深まっていく。

嫌な予感がした彼女たちはプロデューサーと謎の女性を追跡することにした。

決してバレないようにこっそりと。

2人は店に入るといふことはなく、ひたすら街を歩いていく。

どうやらこのまま駅へ向かっているようだった。

少しづつ、彼らと距離を詰めて、会話内容が聞こえる程までになったときだった。

「私、プロデューサーさんのこと、好きになっちゃいそうです。」

「ダメ、ですか？」

そう愛らしく告げる女性の言葉とプロデューサーのひどく驚く顔が3人の脳裏に刻まれた。

## 愚憐無限残業編

最近、みんなの様子おかしくね？

そうプロデューサーが思ったのは、22時を過ぎた誰もいない事務所でのことだった。

いつものように次の企画について纏めながら、持ち込んでいたタブレットでYouTubeで実況配信やNet○lixで映画を見ていた。

企画に関しては最近動画配信が流行っているのでその方向性で考えている。

既に事務所のみんなには様々な配信媒体で配信活動を行ってもらっているのでさらに別のものを、だ。

例えば甜花によるゲーム実況や霧子の絵本朗読配信などがあるが、どれも登録者数や視聴回数も順調に伸びており収益化もしている。

収益化自体はついで程度の感覚だが、これによって283プロダクションのアイドル自体に繋げてもらえば構わない。

それに時代はどんどん進んでいくので何が次のトレンドになるかは分からない。

手札は多ければ多い程役に立つ。

そんなことを考えつつ、企画書を作成し、2時間前に既に完成はしていた。

ちなみにこの仕事は2ヶ月後に取り掛かっても問題ないものである。

こんな時間まで遅くなったのは動画を見るのに珍しく夢中になっていたからだ。

プロデューサーはふとスマートフォンを見て、CHAINがとんでもないことになっていることに気づいた。

『新着メッセージがあります』  
『新着メッセージがあります』  
『新着メッセージがあります』  
『新着メッセージがあります』  
『新着メッセージがあります』  
『新着メッセージがあります』  
『新着メッセージがあります』

彼のスマートフォンの特機画面がそれで覆い尽くされていた。

いや、各アイドルからのCHAIINが重なればたまにこうなることもありはしたが、それはたまに起きることであるので多少は驚きもする。

これによりそう言えばとプロデューサーは思い返していたのだ。事務所に所属しているアイドルたちが、言い方は変ではあるが普段と何かが違う。

例えば特にプロデューサーへ当たりの強い円香の口調は以前よりもかなり優しくなっていた。

『………… コーヒーです。どうぞ』

『ありがとう、円香』

『いえ、私も、飲もうと思っただけです………… その、どうですか？』

『うん？ どう………… ああ、いつも通りとても美味しいよ』

『そう、ですか…………… 良かったです…………… あの』

『うん』

『私は、それなりに、あなたにとって美味しいコーヒーを淹れられます。だから…………… 何でも無いです。失礼します』

これは優しいのか、うん凄く優しいよ（当社比）。

そんな会話があったのはつい先日、彼が旅行を決意してから一ヶ月程経ったときのことだ。

何故か最近、みんなの仕事に対するモチベーションが凄まじいこと

になっていた。

気迫が凄いというか、近づくだけ周りを切り裂くというか威圧感が凄すぎて新人の子が怖がっているとか。

スタツフからは283さん凄いですねと言われる程だ。

円香を筆頭にこのような症状のアイドルがたくさんいる。

この状況、プロデューサーとしてどうするか大変悩むものでもあった。

そもそも原因が分からないのにどうすれば良いんだよ！

プロデューサーの心からの叫びであった。

今まで原因の予測や説明は彼女たちとコミュニケーションを重ね、観察をすればそれなりに理解できるものであったのだが今回ばかりはお手上げであり、糸口が見つからない。

プロデューサー自身、こんな謎の状態の彼女たちへどう声をかければいいのか分からなくなっていた。

それにであるが、アイドル間で何かこそ話をしている様子も見かけるようになり、彼に気づくと途端に散開する。

どうやら何か隠し事をされているようだ。

プロデューサーにバレたら不味いこと。

その時、プロデューサーにある1つの考えが過ぎった。

もしかして嫌われた？

マジかとプロデューサーは頭を抱える。

可能性としてなくはないのだ。

彼女たちの大半は未成年。

26歳とは言えアラサーの彼に対し、嫌な感情を抱いてもおかしくない。

何か変なことを言ってしまったのか、それとも距離感を間違えたのか。

考えても何も分からなかった。

大概のことはそれなりに器用にこなしてきた彼であったが直面する困難なこの状況に困惑していた。

いや答えをすぐ出してしまふのはよくない。

まだその確信たる証拠がないのだ。

早とちりして、選択を間違えてしまえば取り返しがつかなくなってしまうことだつてある。

プロデューサーはオフィスチェアに思い切り寄りかかり天井を向いて意味もなく呻く。

最近めっちゃくちゃ忙しかったのに次はこれか。

彼はその体勢のまま顔を覆った。

そう、最近の彼はいつにも増して忙しかったのだ。

まず起きたのは283プロダクションのアイドルを多数起用してくれている番組のスタッフが半年後に別番組の担当に変わるということが起きた。

言わずとも分かってくれるというわけではないが、こちらの意向は大抵汲んでくれる仕事相手としてとてもやりやすい人物だったのだ。

後任者が癖のある人物で、新人の女性キャストにセクハラ紛いのこと、番組起用を盾にそういうこと求めてくるそんなクズみたいな人間だった。

既に283プロダクションは規模として大きなものになったため、番組起用を盾になどということはないだろうが、セクハラターゲットにされるのだけは阻止をしなくてはならない。

そもそも芸能界に夢を求めて入ってきた子たちにそんな目に合わせるわけにはいかない。

故にプロデューサーは前任者から聞いたそのクズへの後任者変更を白紙にすべく、何ならそれ以上の報いを受けてもらうため裏で動いていたのだ。

まずそのために彼は深い付き合いのスポンサーの元へ話をつける

ことになった。

冬優子が専属モデルをやっている化粧品会社、その若き女社長は敏腕と呼ぶのに相応しく開業して数年で従業員数500人を超すまでに育て上げた。

知名度も高くなってきており、10代のティーンエージャーに人気のコスメブランドになっている。

専属モデルの依頼が来た際に女社長自ら出向いてくれて話をしたのだが、とても話の分かる人でクライアントとしてかなり仕事のしやすい人物であり、好印象だった。

プロデューサーが考えた策というのは半年後に変わる番組のスポンサーになってもらうというものだった。

実を言えば彼女の父親はその番組のテレビ局のお偉いさんであり公にはしていないものの業界では周知の事実だった。

お偉いさんは相当の親バカであり、娘がスポンサーとなる番組にはかなり目をかけることになる。

さらに言えば会社のコンセプトが若い女の子向けの化粧品を提供しているというのもあり、尚更お偉いさんは娘のために不祥事を恐れるだろう。

それ故に彼女に番組のスポンサーになってももらえればスタッフ編成に変更、出来なかつたとしても例のクズの横暴を不可能にすることができる。

だから後は彼女に如何にスポンサーになってももらうか、であった。勿論、メリットはある。

だが一時間番組でゴールデンタイムのCM、さらにはCMの撮影費用その他諸々込みでもかなりのお金がかかってくる。

さらに一介のプロデューサーがどうしてこんな頼みをしてくるのかという疑問も抱かせてしまい、不審がられてしまうのは仕方のないことだった。

理由は正直に話をした。

同情はしてくれた。

だがだからといってその頼みを受けられるかはと、彼女は複雑な表

情をしていた。

故に彼は、自身が思う情熱を含め彼女へぶつけたのだ。

『私は、理不尽な要求をされる彼女たちを守りたい。ですが一人ではやれることに限度があります。それにあなたが会社を作った理由は“全ての女の子たちを笑顔にする”でしたよね？』

『お願いです、どうか力を貸してください。あなたの力が必要なんです。女の子たちを笑顔にするためにも』

『ここで協力しなければあなたの理念に反することになるんです』

『だからこそ283プロダクションと御社の、今より先深い関係を、私は望んでいます』

彼は全力で思いをぶつけた。

勿論、これは感情に訴えかけるといふ仕事においてはある意味紙一重のものだ。

感情は勿論大事であるが、会社を運営するにあたって一番重要なのは利益だからだ。

だが紙一重なのだ。

時に感情は利益を上回ることだってある。

それに女性は男性と比較して感情を優先する傾向にある。

新進気鋭の今ノリに乗ってコネクションを求めている彼女であれば尚更だ。

『分かりました、283さんのその頼み、お受けいたしま  
す』

彼女はその頼みを飲んでくれた。

ある種計画通りであった。

彼はその返答にとっても喜ぶと、彼女へこちらが提供するメリットを話した。

弊社アイドルの番組やライブ等のメイク担当は御社のメイクアッ

プアーティストに全てお任せすること、というものである。

勿論社長の許可は既に取っている。

元々メイクさんに関しては専属というものがなかった283プロダクションであったが、規模が大きくなって今回を期に全員に専属をつけることにしたのだ。

まあ、元々予定はされていたのだが。

結果的にウインウインになったのだ。

問題はないだろう。

次は彼が別で構成作家も担当していたラジオ番組が半年後に終了することになったということだったが、まあこれは別にそこまで問題ではなかった。

元々、まだ283プロダクションが売れていなかった頃、アイドルを出す条件にやっていた仕事だ。

その番組の担当スタッフが構成をどうしようと悩んでいたときだ。彼は文章を書くのが昔から得意ということもあり、控えめではあったもののアドバイスをしたところ、良いじゃんという流れになり、そのまま構成に就任。

なんともラッキーだったと当時のプロデューサー談。

今のスタッフとも惜しまれつつも和やかにやり取りをした。

『あと少しになっちゃいましたけど、283さんには凄い勉強させてもらいました。本当に、ありがとうございますっ！』

『ははは、あと半年になりますますがよろしくお願いしますね』

まだ半年程あるというのに少し涙ぐんでいるスタッフはとても熱い男であった。

苦笑しつつも嬉しいプロデューサーであった。

そして後任の構成作家はプロデューサーの仕事の知り合いということもあり、引き続き資料を作成しつつ、さらにはこんな感じにやる

と良いよというやり取りをメールや電話でしていた。

そんな後任の構成作家とは気安いやり取りをするようになり、前にこんなことを聞かれた。

『2833さんそういえばあの企画どうなんですか？ あと恋人はできました？』

あの企画というのはプロデューサーが進めていたライブイベントのもので、恋人に関しては毎回聞かれていることだった。

面倒くさいなど多少思いもしたが、プロデューサーはそれに対し軽く返答した。

『はい、とても順調ですよ。恋人は、そうですね。この仕事が恋人みたいなものです』

これはいつもの返答なのだが、後任の構成作家はとても笑っていた。

そんなに面白いことなのだろうかと、プロデューサーは首を傾げそうになる。

そういえばこんなやり取りもしたなと彼は思い出した。

『2833さん、あの番組の構成作家交代するんですよ。お疲れ様。いつまでだっけ？』

『はい、俺もあと半年なんで、引き続きの準備は進めていますよ』

『へえ、そうなのか。残念だよ…… そういえば君って本当に用意周到だよ。だってまだ半年もあるのにさ』

『少しづつ進めれば後になって苦労することないですし、修正も効きやすいんですよ。まあ癖なんですかね』

知り合いのベテランスタッフとの会話である。

彼も283プロダクションに良くしてくれるスタッフの一人で

あつた。

もう1つ起きた問題、これがある意味で一番厄介であつたかもしれない。

それはプロデューサーへ美人局を利用した悪徳取材だ。

これは非常に面倒だったとプロデューサーは思い返す。

283プロダクションが売れてくれば、それに合わせてスキャンダルを求めてくるのが、マスコミというものだ。

しかもターゲットはアイドルではなくプロデューサーという、どういう目の付け方なのだろうか。

最初、彼は彼女の取材を美人局だと、悪徳取材とは思つてもいなかった。

しかし取材を重ねるにつれてそれが分かってきた。

取材を担当した記者は4歳歳下の女性で容姿はかなり整っている方だ。

最初はビジネススーツだった彼女は段々とカジュアルな服装になり、露出部分が増えてきた。

距離感もどんどん近づいてきて、ボディタッチも多くなっていた。

2回目くらいから何となく分かつてはいたが、だとしてもあからさまであつた。

まさか自分にこんな風に惚れるような異性なんているわけないと、そう思ったからだ。

『私、プロデューサーさんのこと、好きになっちゃいそうです。ダメ、ですか？』

そして5回目の取材で、ついにこんなことまで言われてしまった。

普通の男ならそのまま引つかかってもおかしくはない。

だがプロデューサーは普通とは違かつた。

『あなたの気持ちは大変ありがたいです——でもご自身の身体を大事にしてください』

そう言われた彼女の顔はひどく驚いていた。  
断られるなんて思ってもいなかったそんな表情だ。

『こういうこと慣れて、いませんよね？ 手、震えてますよ』

彼女の手が震えていることを彼は見逃さなかった。

そもそもこういう発言は昼間の路上ではなく夜の個室のバーなどでアルコールと一緒にやるべきだ。

その方が間違いなく効果的だからである。

それをしないのはこういうったことに慣れていないということだろう。

さらに言うとなれば――

『これを仕掛けるタイミングが読み切れていませんね。些か早すぎると思いましたが――あなたがこうしている理由、話してくださいませんか？』

気づけば彼女はほそりほそりと経緯を話し始めた。

要約すれば田舎から上京し意気揚々と入社したものの、中々大きなニュースを掴めず、上司に怒られる毎日。

彼女の精神はおかしくなり、自分の身体を使えばという考えに至ったらしく、そのターゲットに選ばれたのが283プロダクションのプロデューサーだったというわけだ。

彼女の目からは涙が流れていた。

そんな彼女にプロデューサーは1つの提案をした。

『…………… 転職してみませんか。知り合いの記者が勤めている会社があります』

善村さんって言うんですけど、そう言って名刺を渡した。

283 プロダクションに対して、とても良い記事を書いてくれる記者なのだが、以前に記者を募集しているという話をしていたのを思い出していた。

『私からの紹介と言ってくれて結構です』

涙ながらにありがとうございますという彼女に、プロデューサーは笑顔でそう答えた。

別にここまでしなくて良いのだ。

プロダクションを出禁にすればいいし、彼女の会社に抗議だつてすればいい、それをしないのは自分より歳下の女性が変なことをしようとしているのを見過ごせなかったのだ。

故に彼は彼女を助けようとしていた。

胸くそ悪いのだけはごめんであったからだ。

そんなこんなでこの件は解決した。

他にも色々あったのだが、特筆すべきはこれくらいだろう。

あとは最近会社のマニュアル作成で退職願・退職届の記入方法を作ったのと過激なファンからの手紙で指を怪我しかくらいか。

怪我はどうでもいいが、マニュアルというのは作っておいて損はないのだ。

例として手書きを試みたが、自分の名前であったことに加えてマニュアルなのだから手書きである必要なかったため、すぐに捨てることになった。

だが退職届だけどこかにいってしまい未だに見つかっていない。

まあ自身が捨てたのを忘れただけだろう。

本当に全く微塵も欠片も身に覚えがない。

彼は本気で頭を悩ませる。

こんなにまで分からないとはと、最近の忙しさに加えてのこの事態にプロデューサーの胃が痛くなっていた。

すると彼のスマートフォンがまた振動した。  
放置してしまっていたので流石にと彼はCHAINを開く。

甘奈『プロデューサーさん、お仕事根を詰めすぎないようにしてね。  
あと引き出しの中にホットアイマスクあるから使ってね』

灯織『お仕事遅くまでされてるんですか。もしお部屋のお掃除が  
滞っているのだとしたら、今度お掃除に行ってもいいでしょうか』

恋鐘『お疲れ様。プロデューサー、明日お弁当は作って持つてくば  
い。好きなおかずば教えてくれん?』

樹里『おいぎんぎようしないで、さっさとかえれよな』

愛依『お疲れ様。あんまし頑張り過ぎると大変だよ。疲れたらわ  
たしに言つて。愚痴だつてなんだつてプロデューサーのことならな  
んでも聞くからさ』

にちか『プロデューサーさんのことだからまだ事務所にいるんだと  
思いますけど、丁度良いところで帰るんですよ! 本気で言つてます  
からね! でないと今から事務所に行きますからね!』

雛菜『明日の朝、ぎゅーつてしにいからちやんと受け止めね?』

頭も撫でてね? ハグするとしあわせーになるんだつてー』

などなど、彼のCHAINは283プロダクションのアイドルから  
のもので埋め尽くされていた。

果たしてこれは嫌われているのだろうか。

プロデューサーを心配してくれる優しいメッセージばかりだ。

彼はまた分からなくなった。

彼女たちの真意が掴めない。

そう思っていたときだった。

はづき『プロデューサーさん、お仕事お疲れ様です。私が言うのも  
変ですけど、どうか無理はしないでくださいね。そのとても心配な  
ので……』

283プロダクションの事務員であるはづきからもCHAINが来る。

本当に変だとはプロデューサーは笑いはしなかった。

これにより彼のCHAINは上から283プロダクションの女性陣で完全に埋め尽くされた。

「取り敢えず、全員に返信しないとな」

彼女たちの様子に関してはまた別のタイミングで考えよう。

それに彼女たちとの距離感も少し考え直さないといけないかもしれない。

プロデューサーはその思考を頭の片隅に置いて、メッセージの内容を考えつつ、スマートフォンと向き合った。

この仕事の疲労は数カ月後の旅行で癒やすのだと、そう心の中で決心しながら。

## 天獄慘悔編

快晴の下、小鳥たちの囀りがよく聞こえる。

人の声など全く聞こえない静寂が支配するその場所には整然と石材の加工品が無数に並べられている。

そこは都内のある朝の霊園。

時間が早いこともあり人は居らず、居たとしてもそこを管理する僧侶が熱心に掃き掃除をしているくらいで結局声は聞こえない。

「……嫌になる程良い天気だな」

ボソリと呟く。

霊園のある墓石の前にスーツ姿の一人の男が立っていた。

その手にはブラツクの缶コーヒーが2本握られており、男はそのまま缶コーヒーを一本墓前に供えると、手元にあるもう一本を開け、一口。

雑な苦味が広がり、男は眉を顰めた。

「……よくこんな不味いものを好んで飲んでいたなお前は。私にはあまり理解できなかったがな」

彼が好む店の美味しいコーヒーを思えば、市販の大量生産品のコーヒーなど月とスッポンであった。

それなのに別に良いんだよ俺が美味しいと思えばなどと、よく言い合いになっていたのを記憶から思い返された。

「……久し振りだな、七草」

その墓標には「七草家之墓」と刻まれている。

「10年、ぶりか。ここに来たのは」

彼の言う10年とはこの墓の主がこの世を去ってから経過した年数でもあり、ここに来るまでにかかった年数でもあった。

「あの時から中々時間を進めることが出来なかったが、漸く前に進むことが出来た。今日はその報告をしに来たんだ」

これからするのはただの彼の自白だ。

誰が聞くというわけでもない、ただただ一方的なもの。

靈魂など彼は信じてなどいなかったが、今日だけはただただ聞いて

欲しかった。

いや聞いてもらうべきだと彼は思ったのだ。

これは彼にとってある意味、自身を整理する作業とでも言うべきだろうか。

そんな自分のために行っていることをお前のために行っている理由をつける。

今の彼にはそうでもしないと素直な気持ちを吐露することができなかつたのだ。

彼の名は天井努。

283プロダクションの代表取締役社長にして、過去に全てを失った男でもあつた。

20年前、彼は元々ある事務所で自身もプロデューサーをしていた。

正しく敏腕と言え、着々と成果を上げ、そんなときに彼は独立をして立ち上げたのが今の283プロダクションだ。

その折、彼は巨大な原石とであつた。

彼女は特別歌やダンスの才能があつたとか容姿が優れていたとかそういうわけではなかつたが、彼女の内に秘める人を魅了する才覚を彼は見出したのだ。

最初は反抗もされたが、彼女のやり方では無理と分かると彼に着いてきてくれるようになった。

彼女はとても純朴で、厳しいレッスンにも我武者羅に立ち向かい力をつけた。

そんな彼女はやはり魅力的であり、世間はその魅力に気が付き始めていた。

アイドルデビューと同時に出したCDは売れに売れ、ライブも満員御礼。

つまるところ、社会現象までになったのだ。

そうやって売れてくれば、忙しくなるのも必然で、それに合わせて

レッスンはさらに厳しいものになる。  
それでも彼女は着いてきていた。

いや、着いてきてくれていると勘違いしていた。

ある日、彼に海外進出の打診が来た。

チャンスだと彼は思ったが、これは同時に賭けでもあった。

日本で売れているからといって海外で売れるかといえはそうではない。

しかしこの好機を逃すわけにはいかなかった。

彼はすぐに彼女へそれを告げた。

喜んでくれる、そう思っていたのだ。

しかし現実はいち描いていたものとは違かった。

もう、無理です。

彼女の口から放たれたその言葉は疲弊し、目を見れば濁っているようにも見えた。

元々、彼女はアイドルではなく女優志望だったが芽は伸びず、それを見つけ転向させたのが彼であった。

彼のプロデューススタイルは簡単だった。

自身に合わせるのではなく、自身が合わせる。

売れることに特化するというそれは当時の彼からしてみれば、これが一番正しいやり方だと当然のように思っていた。

売れば彼女はこの世界で生き続ける事ができる、それが彼女も望んでいるものだと思っていたのだ。

だがそれは同時に個性を完全に潰し、アイドルのロボットを作り上げるものと同意だった。

このやり方をするにあたり、徹底的に厳しいレッスンを課し、根を

上げようとするれば怒号を上げて続けさせた。

無論彼のやり方が完全に間違っているとは言わない。

だが彼はやりすぎたのだ。

彼の理想のアイドルを作るために、彼女の中にあつた理想を完全に叩き潰し、限界というその言葉を無視して海外進出を決行しようとした。

彼は信じていたのだ。

彼女ならば絶対に着いてきてくれると。

海外進出当日の空港にはファンやマスコミが殺到し、凄まじいことになっていた。

約束の時間は18時。

しかし、いつになつても彼女は現れなかった。

彼は急いで彼女を探しにいった。

全力で走り、走り、走り、走り、そして。

彼女は空港近くの神社にいた。

息を荒げながら、彼は彼女へ言う。

『こんなところで何をしているんだ!』

最初の言葉、彼が心から出たものがそれだった。

『……あなたはいつもそうですよね。そうやって自分の考えを押し付けて。私のことなんか考えないで』

彼女の言葉の端々に、怒りや失望というものが含まれていた。

『あなたの理想には合わせ、られません……』

彼女の瞳からは涙がこぼれていた。

肉体的にも精神的にも彼女はすでにギリギリの状態だったのだ。

そんな彼女へ彼は容赦なくレッスン、ライブ、番組出演を強要し、挙

げ句の海外進出だった。

『もう、限界なので、休ませて、ください……』

彼女は海外進出に向けてプレゼントされたダンスシューズを強引に彼へ突き返すと、その場から立ち去り、そして二度と現れることはなかった。

それ以降の記憶は曖昧だった。

世間からのバッシングやマスコミの追求をどうにか抑えた後、何をしていたのかあまり覚えていない。

ただ一つ明確に覚えていたのは、約束の日である12月24日の18時、あの神社で現れることのない彼女を毎年待ち続けたこと。無駄だと分かっているにもかかわらず待っていた。

彼にとっての過去の幽霊とも言えるそんな彼女を。これが彼の第一の後悔であった。

「そうしたら、今度はお前まで私を置いていったな」

10年の月日が流れ、彼の親友であり現ここの墓の主は死んだ。

彼は事務所が活動休止になった後は、レッスンスタジオの運営などでお金を稼いでいた。

プロデューサーとして死んだ彼から事務所のメンバーは次々と去って行ったが、七草という男だけは側にいた。

その男曰く、だ。

『今お前を放っておくと、何をしでかすか分からないからな』

そう男は笑っていた。

全くもってふざけた奴だと思っていたが、そんなことを言ってくれた男に彼は少しだけ助けられていた。

『七草、お前は私と違って家族がいるだろ。こんなところで油を売っている暇があるのか?』

『逆だよ逆。色んな所で稼いでいるさ。こんなところの稼ぎでも少しは足しにはなるんだ』

彼が嫌味を言おうと七草という男は負けじと嫌味を返してくれた。そんなやり取りが、荒んだ彼の心を楽にしてくれたのだ。

『そうじゃない、家族と一緒にいる時間のことを言っているんだ!』

『お前から家族サービス云々を言われるなんて思いもしなかったな』

その自覚はあった。

彼は根っからの仕事人間だ。

家族に目を向ける暇があるのなら仕事をする。

そうしなければ自分の今までしてきたことを否定してしまうと思っていたのだが、あの件があつて少し考えを改め始めたのだ。

『貴様、私は本気で言っているんだぞ!』

『はいはい、分かっているよ……でもさ、忘れたか? 俺はお前の掲げる理想の果てが見たいんだよ』

男は言っていた、彼の掲げた理想の果て、芸能界の頂点を見せてくれと。

彼はそれに対して見ていろと言ったが、結果はこのぎまだった。どうしてここまで自分を信じてくれるのだろうか彼には分からなかった。

『それは俺がお前を信じたいと思っただからだよ』

『確かにあの子はお前の前から居なくなつた。でもそれはあの子がお前を信じれない、信じたいと思わなかつたからだ』

『だったら、後はお前は今度何をやるかだろ。自分の何が悪かつたのか、分かるだろ?』

『そうしたら後は突つ走れ。なに俺は弁護士だ、事務仕事もそれなりに得意なんでな。面倒なことは任せて、お前は好きにやれよ』

男は笑つて言いかけた。

そんな男が死んだのはそれから10年後の快晴だつたある日。

事務所で倒れているのを彼が見つけ、病院に搬送されたが、そこで呆気なく逝つてしまった。

昨日まであんなに元気だつたのに。

医者からは過労、とまではいれないが無理が祟つたとのことだ。

男は彼の事務所だけでなく様々な場所で仕事をしていた。

その結果ということだつたらしい。

彼は男にもその家族にもどんな顔を見せればいいのか分からなくなつていた。

彼は人生で初めて土下座をした。

だが男の家族からは責められることはなかつた。

ただただ泣いていた。

昔から身を粉にして働いてた男がいずれこうなつてしまうかもしれない予感があったらしい。

それを止められなかつた私が悪いと男の妻は言った。

慰謝料ではないが、お金を渡そうとしたが受け取れないと断られてしまった。

もう彼は何をどうしていけばいいか分からなくなつてしまつていた。

彼が信じていたもの、彼を信じていたもの、その2人に置いていかれて気づいたら旅をしていた。

金ならあったので何年も日本中、時には世界を回って旅をした。

そこで彼は漸く心の整理をつけて、283プロダクションの再建を目指すことにしたのだ。

もう二度と同じ過ちは犯さない、そう決めて。

今では若いプロデューサーと事務員、アイドルたちが集まって、知名度も全国区までになった。

あの時から変わることが出来た――そう思っていたのだ。

「お前に少し似た奴が事務所に入ったんだ」

事務所を再建して数ヶ月、事務員として七草の娘を雇った。

贖罪ではないが、彼の中でこうしないとイケないという気持ちがあったからだ。

その更に一ヶ月後、若い男が283プロダクションへ入ってきた。

そんな若い男、後のプロデューサーとなる人物との出会いは世界を旅していたときだった。

たまたま天井がインドのデリーに立ち寄ったときにスリに会い、手持ちを失いかけたときに窃盗犯から財布を奪い返してくれたのが彼であった。

日本人だったということもあり、記憶には深く刻まれていた。

走り去る窃盗犯に足をかけて転倒させて財布を取り返すと天井へ渡してくれたのだが、逆上した窃盗犯が彼へ殴りかかるのを秒で無力化したこともその要因の一つだろう。

お礼をさせて欲しいと願い出たが、用事があるからすみませんと彼は持つていた背負っていたリュックを揺らしながら去っていた。

そこから数年、まさか日本の、しかも自分の会社で再会するなんて思いもしていなかった。

もつとも彼は忘れていたようだが。

まあそのこともあり、人柄も良かったので採用、プロデューサーと

して働いてもらうことになったのだが彼の働きぶりは凄まじかった。

「気づけばアイドルをスカウトしてきて、さらにはその子たちをグループでデビューさせると提案してきてな」

当時の天井とは何もかも真逆であった。

ソロデビューさせて売れるためのレッスンを課し、さらにその労力を一人に特化させることで限界以上の力を引き出す天井。

グループデビューさせて個性を引き出すためのレッスンを課し、全員を同じラインまで上げて相互作用で力を引き出す彼。

もし彼と当時、同じ事務所に居たら真つ向から対立していたのは間違いないかった。

思い返せば天井のときには彼女の本当の笑顔を見ることはなかった。

しかし、今彼の周りのアイドルたちは心からの笑顔で笑っているように見え、それでいてきちんと成果を出し続け、今では283プロダクションは当時よりも栄えることになっていた。

そう、彼は真正銘の怪物であったのだ。

元々彼はアイドルとして採用しようとしていたのもあり、高身長で容姿も良く、物腰柔らかかで性格も良かった。

そんな彼の最も特筆すべき点は会話力であった。

彼の話し方は気づいたら周囲をその気にさせ、あらゆる目的達成までの過程（プロセス）を極限までに短縮させる。

天井にはない究極とも言える”人たらし”の才能だ。

彼の周りのアイドルや番組スタッフなどで彼を悪く言うものは見たことがなかった。

そんな彼は最近では楽曲の作成や公式SNSや公式YouTubeチャンネルの作成と運営、会社の事務のオートメーション化など様々手を尽くしてくれ、今では283プロダクションに必要な不可欠な人材になっていた。

ある意味でアイドルたちより重要とも言える存在に、だ。

彼がいればどんな状況下でも立て直すことが可能だと思えるほどにその存在感は大きくなっていった。

それは事務所のメンバー全員が共通して思っていることでもあった。

彼ならなんとかしてくれる、そんな思いが彼らにはあったのだ。

「あいつは、私よりもこの仕事に向いている」

もしあいつなら彼女のことをもつと上手くやれたのかもしれないと、そんな夢物語まで考えてしまう。

考えても無駄だが、そう考えざるをえなかった。

「私はな、あいつが恐ろしかったよ。私が出来なかったことを平然とやってのけてしまうあいつが」

侵略者、エイリアンとでも言うべきか。

歓迎しておいて、そんな感想が出でしまったのはそれ程までに自分と違う人間であったからだ。

「あいつには本当に助けられている。もう私に出来ることなんてないのかもしれないな」

働きすぎな彼や七草の娘、はづきのために人員を増やそうともした。

だが、ダメだった。

下手な人員を増強しても足手まといにしなければならないと。

何ならはづきは増員は望んでいても本心ではこのままが良いとまで思っていた。

それはアイドルたちも一緒であった。

プロデューサーである彼がいるこの少人数の環境、その居心地の良さが全てをダメにしていたのだ。

「私は、経営者失格だ」

項垂れる天井の背中は小さく見えた。

そんな彼が今彼らにとつて一番出来ることを考えた。

それは――

「もうアイドルは増やささない。今居る子たちが巣立ったらこの事務所は終わりにする」

もし何かあったら全ての責任を負うつもりでいたが、余りに有能過ぎるプロデューサーはそれすらさせてくれそうにない。

だからこそ、自身の夢の期限を設けた。

もしその時が来たらプロデューサーやはづきは知り合いの別の芸能事務所に良いポジションで入れられる、それくらいのコネクションはあった。

これ以上、アイドルを増やせば彼の負担になる。

天井もプロデューサーとして参加できれば良かったがプロデューサー能力すら彼の足手まといにしかない。

余りにも情けないことであるがそれは紛れもない事実でもあった。

「……自分で掲げた理想の果て、夢の果て、だったのにな。私では叶えることの出来ないただの幻だったんだ」

理想の果て、夢の果て。

芸能界で頂点を取る、というシンプルでありとてつもなく難しいものだった。

難しいが出来ないことではない、そう思っていたが現実は違う。

自分の力量をいつしか測ることすらも出来なくなっていた。

そう、天井のボロボロの精神はとつくの昔に限界を迎えていたの

だ。

私はお前に信じてもらうことに値しない無力な人間  
だったんだ。

「……許してくれ、七草」

天井の眩くようなその声はどこか泣いているようにも聞こえ、青い  
青い空の下、澄み渡る空気に乗って消えていった。

## 大紅蓮無間地獄編Ⅰ

箝口令。

それはある出来事や事象に関して関係者以外に口外することを禁止する命令のことである。

現在、283プロダクション内ではある箝口令が敷かれていた。

——プロデューサーに対して直接例の件で触れてはならない。

というものである。

これを知るのはアイドルたちと事務員のみであった。

この発端はプロデューサーの机の上で退職届が発見されたことに始まる。

後にこれは“283プロダクションプロデューサー退職届発見事件”（事件名で全て完結している）と語られることになるのだが彼女たちからしてみればまだ過ぎていないことであるので大問題かつ大事件であったのだ。

第一発見者である283プロダクション所属アイドルの七草にちは21時過ぎにレッスン用のジャージを回収に事務所へ向かい、ロッカーで回収後にプロデューサーのもとへ向かった。

理由は簡単である、彼と少しでもお喋りが出来ればと思ったのだ。多少怒られたとしてもそれすら嬉しいと思っっているにちかにとつてお釣りが来るレベルである。

るるんで彼のもとへ向かったにちかであったが、デスクに彼の姿が見当たらなかった。

おかしいなと思いつつもキッチンにでも行っているのかと思ったにちかは閃く。

彼を脅かそうと、にちかはわざわざ探しに向かわずにそこで待つことに決めた。

しかしにちかは彼のデスクの上にあるものを見つけてしまった。

そう、それが退職届であったのだ。

彼女はひどく混乱し、気づけば写真を撮影してCHAINに投稿し、退職届を持っていたりユツクに突っ込んでいた。

そうしたのは提出さえされなければプロデューサーが辞めることはないと思っただからだ。

にちかによって投稿された退職届はグループCHAINに大混乱をもたらした。

まさに阿鼻叫喚といって間違いないもので、次々来る返信も困惑のものや彼女に対して理不尽な怒りをぶつけるようなものまで様々であった。

にちか自身も彼女たちと一緒に何が何だか分からない状況で困惑しており、いち早く事の真相を知りたがったため、CHAINに共有してしまっただけというものだった。

本人に直接聞けば済む話ではあるが、もし彼がそれを肯定してしまっただけのことを考えると彼女の中にとってもない恐怖を襲った。

『にちか、取り敢えず早く家に帰ってきて』

そうCHAINをしたのは姉であるはづきであった。

姉妹であるため、勿論一緒の家に住んでいる。

事務所からも家は近いいため、多少遅い時間ではあったものの外出を許可した。

ただこんな爆弾を見つけてくることも、更に言えば妹がその退職届を持ち出しているとも思っただけではなかったようだが。

——— 本当にプロデューサーさんが居なくなっちゃうの？

そしてはづきも文面上は冷静にCHAINをしているように見えたが、実際はかなり動揺していた。

普段、おっとりな彼女ではあるが仕事の遂行能力は高く、別のアルバイト先ではどこの職場でもそのまま正社員になってくれと言われ

る程だ。

どんな時も冷静に落ち着いて仕事を高い精度でこなすと評価される彼女は、想定外のことには冷静さを保てないでいた。

彼女の精神を揺らす方法は2つ。

家族のことか、プロデューサーである彼のこと。

逆に言えばこれ以外のことで動揺することはないので。

そんな彼女は今、家にちかも居なく一人なため、その動揺を思い切り顔に見せていた。

父親が亡くなったときですら、家族を支えるため気丈に振る舞っていたとは言え我慢できていたのだ。

いとも簡単に彼女の精神は揺らいでしまっている。

それ程までに、プロデューサーが居なくなってしまう可能性を彼女は恐れていた。

にちかも帰ってきてすぐに自分の部屋に籠もって出てこなくなってしまうについて、七草家の淀んでしまった空気を浄化できるものはない。

どうにかはづきが何度も深呼吸をして精神を落ち着かせている間にCHAINが更に流れていく。

あと半年だから引き継ぎを進めているってプロデューサーが言っているのを聞いた。

プロデューサーが街を若い女の人と歩いているのを見た。

恋人がいるって言ってた。

喫茶店で女性に熱い言葉を投げかけているのを見た。

街中で女の人に言い寄られて困っているのを見かけた。

様々なアイドルたちの目撃情報が集まっていた。はづきも現にパソコン内にある引き継ぎ資料の存在を知っており、尚更に信憑性が増している。

これらの証言を集めた結果、プロデューサーの内情を推理することが出来た。

プロデューサーには結婚を前提にした恋人が居り、その女性と結婚をするにあたってこの仕事を辞めるといふものだ。

その推測はアイドルたちを絶望へ叩き込むものであった。

今までプロデューサーのそういった情報は一切なかった。

左手の薬指を見ても指輪をしていない様子はなく、結婚しているのであれば奥さんの話しをするだろうにそれもなかった。

証言の中に恋人がいるというのがあるのは、奥さんではなく恋人がいるということも認めたくはないが、それであればまだ納得がいく。

あと半年というのもこの激務であるプロデューサーの仕事から転職し、恋人と一緒にいる時間を増やすためのものと言えればそれも納得がいった。

恐らく喫茶店で会話していた女性が彼の恋人である女性である種のプロポーズだったのではないかというのがアイドルたちの見解だ。街中で言い寄られていたのは恋人がいる状況で別の女性に言い寄られてしまえば困惑することは不思議ではない。

更に言えばプロデューサーはモテるので別に色々な女性に言い寄られても何もおかしくはない。

つまりプロデューサーの動向を見れば半年後に283プロダクションから居なくなってしまうのは濃厚であったのだ。

『プロデューサーさん、辞めちゃうんですか…… 私たちカップルじゃないんですか?』

『…… 結婚したとしてもお世話しに行っても良いですよ? ア

アイドルとプロデューサーなんだから何も問題ないですよ。それにまだあの服も見て貰ってないですし……』

『嘘、だよ。プロデューサー。金木犀のことはわたしの勘違いだったの？』

『Pたん……違うよね違うよね違うよね……あははは……三峰が馬鹿だったんだね……』

『プロデューサーが居ないと私、もっと悪い子になっちゃいますよ……』

『……嫌だ嫌だ。プロデューサーが居ないのは嫌だ』

『うちもつと料理も家事も上手なるけん。だから待つといて……プロデューサーのためなら、あんま好かんかったこの身体だつて……』

『プロデューサーさん……わたしあなたのお陰で、どつちも選べるようになったんです。だから“全部”選びますね』

『プロデューサーさま。凜世は、凜世は……あらゆる覚悟が、出ています……』

『アタシをスカウトして、置いてく気かよ……絶対逃さねえ』

『……こうなったら有栖川の力で……奪う……』

『私、チョコが嫌いになるかもしれません……見るたびにプロデューサーさんを思い出しちゃうから……』

『……もう一度お酒で……いえ、襲う……』

『……甘奈はどうすれば良かったの……？ もつと早く告白してあげればよかったのかな……？』

『お願い、お部屋から出てきて……プロデューサーさん、甜花となーちゃんを助けて……』

『プロデューサーさんは嘘なんて吐かないつす……カブトムシ取りに行くつて約束したつす……絶対に約束破らないんすよ……』

『あいつが辞める……？ そんなわけ、ない、はず……だって、そんな雰囲気なかったし、いやでも……』

だろ。わかんないや……』

『思い出してもらえてない…… まだ…… あの日のこと……』  
『本当にありえない。私たちをアイドルにしたのに責任を取らないで自分はトンズラ？ 最低…… まあ別に私としてはこれであなたの顔を見なくて済むと考えたら問題ないですが…… コーヒーの味なんて覚えなければ良かった……』

『プロデューサーさんはわたしが居ないとダメなのに、居なくなつてどうするんですか……？ ダメダメになつちやいますよ……？』

『…… そんなの全然しあわせじゃない。つまんない。雛菜と一緒にの方が”絶対”幸せなのに』

『プロデューサー…… 私、あなたのお陰でこうなれたのに…… また……』

『…… 嫌です嫌です嫌です。プロデューサーさんまで居なくなるのは……』

彼女たちはたまたま全員が自宅に居たのだが、CHAIN上よりもさらに地獄いや、更にその下の阿鼻地獄と言つても過言では無い程に陰の気が漂っていた。

最悪と言つても過言では無い程にメンタルが落ち、最早マイナスの域にまで行っているものもある。

全員が明日、アイドルとして仕事がある身だ。

このままいけば明日の仕事に一体どれほどの支障が出てしまうか想像に難くない。

そんな阿鼻地獄または無間地獄に、ある救いの光が現れた。

『待つてください！ 皆さん、まだプロデューサーさんが辞めるつて決まったわけじゃないです！』

果穂である。

彼女がCHAINにその文章を送ったのだ。

勿論、彼女たちの精神状態からすれば既読が全部つくことはない。だがそれでも構わず果穂は続けた。

『ジャスティスブルーも言っていました、推測を確定させるならそれを証明する証拠が必要だって！』

果穂のいや、ジャスティスブルーのその言葉に一部のアイドルたちはハツとした。

確かに彼の発言や目撃情報、それに退職届など証拠になりそうなものが集まってはいるが、実際のところプロデューサー本人がそれを事実と言ったわけではない。

現状、可能性がかなり高いレベル程度の話なのである。

少しではあるが、彼女たちの瞳に希望の光が宿った。

ジャスティスVが放送されていて本当に良かった。

ありがとう制作関係者の方々。

『だから、皆さんで出来ることを考えましょう！ 結婚だって勘違いかもしれないし！』

こうして、彼女たちは一晩徹底的にCHAINで話し合った。

更に各々彼女たちのプロデューサーに対する思いを全員で改めて再確認をすることとなったのだが、そもそもの話でプロデューサーへそういう気持ちを持っているんだろーなというのは全員が全員に対して思っていた。

暗黙の了解でそれを敢えて指摘する野暮なことはいらないが、この話し合いで全員が全員をライバルと認定することになった。

果穂はこの話し合い中はプロデューサーと一緒に居れなくなるという単純に寂しいという気持ちだったのだが、そこに違いはありやしねえだろ(？)。

そして決まったのが冒頭の箝口令である。

理由は簡単で、もしプロデューサーから本当だよと言われた瞬間に

アイドルたちの多少復活したメンタルが即重力崩壊しかねないからである。

さらに言えば本人から言うタイミングを探っている可能性もあるので、こちらから聞くのもおかしい話であるからだ（なぜ知っているのかと）。

良い言い方をすればプロデューサーを信じて待つ、悪い言い方をすれば目を背けたことになるのだろうか。

だが彼女たちのこの決断がプロデューサーにとっては良い方向へ動いた。

彼女たちはこの時、秘密裏にある決断をしていた。

誰かに取られる前にプロデューサーの心を奪う。

このアイドルらしからぬいや、”女”としての決断は彼女たちの仕事のやりがいを尋常なまでにブーストさせていた。

バリバリ仕事を熟して他の女性を見る暇を与えない。

自分以外の女性と恋愛をする時間を与えない。

プロデューサーは自分のものだ。

彼女たちの精神はある意味で、何かを超越した。

各々寵愛を受けたい者、寵愛したい者、同盟を組んでいる者、漁夫の利を狙う者、様々であった。

何が彼女たちをここまでさせてしまったのか。

彼女たちはプロデューサーと出会うまではある種問題は抱えつつも、人間としては普通だったのだ。

それを彼はやってしまった。

まだ若い彼女たちの男性観を完膚無きまでに粉微塵に粉碎したのだ。

残された人間の女性として普通だった男性観は最早素粒子レベルだ。

もう彼女たちはプロデューサー以外の男性を”男性”として意識することが出来なくなってしまうていた。

しかし考えてみれば当たり前なのかもしれない。

彼は高身長で顔が良く、頭も良い、仕事が出来る、優しく気遣いの出来る性格、イラストが上手い、文章を書くのが上手い、字が綺麗、車の運転が上手い、お菓子作りが趣味(味も好評)、作曲が出来る、楽器の演奏も出来る、歌も上手い、荒事にも慣れている、たまに子供っぽいところがある(大好物がラーメン唐揚げハンバーグ炒飯)、なのに猫舌などなど。

良いところ、悪いところ、全てを引つ括めた彼の人物総評は簡単だった。

理想の果てに在る男。

それが彼、プロデューサーという男だ。

よくテレビや動画サイトでスーパープレイ集のようなものがあるだろう。

各分野のスペシャリストが放つ技の極致。

それらを色々な方面で一人で発揮してしまうのが283プロダクションの彼である。

ランクを付けるとしたらSランクとかではなくSSランクやSSSランク、或いはEXランクとも言える男だ。

このレベルの男を知ってしまったら最後、今後の人生どうなるかなどは言わずもがなであった。

そう、これはそんな彼女たちがプロデューサーという名の理想の聖杯を是が非でも手に入れようとする物語である(?)。

故に彼女たちはやる気を業火の如く燃え上がらせ、仕事をバリバリ熟した結果、ファンやテレビ局の評判は鰻登りになってそして当然のように、とんでもない無茶苦茶な依頼が飛んできた。

10ヶ月後、東京ドームにて283プロダクション  
オールスターライブを実施して欲しい、と。

はづきと283プロダクション所属アイドルたちはその成果にと  
ても喜んだという。

## 天体観測者編

283プロダクションには“怪物”がいる。

それは決してアイドルという表舞台に立つ陽の存在ではない。

寧ろ裏方である陰の存在で、その人物は周囲からはプロデューサーと呼ばれていた。

その人物、彼のことを表す記号でもあり、通称とも言うべきか（283さんとも呼ばれる）。

そんな彼は業界でもかなりの有名人になっていた。

『プロデューサーさん、めっちゃくちゃ良い人だよな』

『仕事が凄い出来る方なんで、とてもやりやすいですよ。英語の翻訳とか偶に参考として聞きますよ』

『全く賢しい男だよ。このワタシに“交渉”を仕掛けて来るなんてネ』

『イケメンで嫌いだったけど、話したら普通に良い人てか結構面白い人でこんな捻くれた自分が嫌になる……』

『色んなところに目が届く人って言うか、気づかい上手って印象かな』

『海外の話とか面白おかしく話してくれたよ。東南アジアで危ないクスリを売られそうになったとか、人攫いに襲われたとか。笑えない状況なんだけど笑えるっていうか』

『顔が良いですよな！ 他のスタッフと話題に上がりますよ！』

『現場一緒だとラッキーって感じで、女の先輩にそれ言ったら羨ましがられましたよ』

『聞いてくださいいよ！ 283さんとお話し出来たんですよ！ この現場大変ですよねって会話だったけど、あたし的にはこれはお話しカウントです！ よし！』

『この前、ご飯誘ってみたら忙しいみたいで断られちゃって……ちよつとシヨック……』

『……この前、某女優さんと楽しそうに話してるの見ましたよ。名前は言えませんが』

『女殴ってそんな顔ですよね、良い意味で！ いや〜良いっ！』  
『女性スタッフの中だと下手な男性アイドルとか俳優より人気みたいっすよ。うちの女の先輩がキヤーキヤー言っていました』  
『キヤストさんのメイクしてる時にあの人どこの人なのって聞かれましたよ。実はスタッフさんなんですよって言ったらびっくりしてましたね、あのタレントさん』

等など、このような声が各方面から様々上がっていた。

途中変な声が紛れていたような気がするが、概ね彼の良い評判を語っていたであろう。

彼の評判を集めれば以下のものになる。

芸能人顔負けの顔面を持った仕事が出来て面白い人。

そのため、世間一般的には283プロダクションと言えば、アルストロメリアや放課後クライマックスガールズなどのアイドルグループが真っ先に上がるが(当たり前ではある)、現場のスタッフ間では寧ろプロデューサーが先に上ることが多い。

それ程までに知れ渡るくらいに彼は有能であったのだ。

「————しっかし大変になりましたね。まさかドームライブなんて」

そこはあるテレビ局の喫煙所。

もうすっかり時間は21時を過ぎているのもあるが、その喫煙所は建物内で少し遠い所にあるために人影は2人しかない。

オフィスカジュアルと言えるポロシャツにスラックスを履いた30代中ばの男は電子タバコを吹かせながら隣にいる若い男を見た。

「ははは、びっくりでしたよ。なんかどこかのお偉いさんがうちのファンみたいでは非やって欲しいって社長に直談判したみたいで」

ステイック状の電子タバコから吸った煙を吐きながらスーツを着た彼、プロデューサーは苦笑した。

メインで動くことになる彼からしたら寝耳に水というべきか、相当な苦勞が伺える。

自分より歳下なのに自分より仕事をこなしている彼を見て、ポロシャツの男は頭が上がらなかった。

故に男は彼へタメ口は効かないことにしている。

「企画とか準備とか間に合うんですか？ 相当時間があれだつて聞きましたけど」

「まあ、ギリギリって感じですかねー。でも間に合わせれば費用もかなり持つてくれるって話らしいんで、そこはまあ適当に間に合わせますよ」

そう語る彼の表情は一切焦りというものは見えず、ギリギリという割にはかなり余裕そうであった。

恐らく彼は今の時点で企画も準備も既に順調に進んでいるのだろう。

でなければこんな所でタバコなど吸っていないはずだ。

「めっちゃくちや太っ腹なスポンサーじゃないですか。いやでも俺が283さんの立場だったら勘弁って感じだなあ。流石にそこまで大規模なライブなのに期間が短すぎますよ」

普通に考えて、10ヶ月という期間で東京ドームでのオールスターライブなど普通に考えて間に合うわけがない。

無理難題にも程があった。

スタッフや衣装、舞台制作や照明、音響など準備が必要不可欠だ。

その準備を10ヶ月で間に合わせるには方面への緻密な連携が重要になってくる。

さらに言えばたくさんお金が掛かってくる。

それはもうとんでもないお金が動く。

ドームを一日貸し切りにするだけで、デイ○ナのアイスブルーが買える程だ。

それだけでやばいことが分かるだろう。

そんな莫大な金額をスポンサーが補填してくれるのであれば是非でも間に合わせるのは会社として当然である。

ドームライブはアイドルたちの名前を広めるのとそれを成功させたという実績が会社にとって一番重要になってくる。

売上はと思うかもしれないが、そのお金は基本的にライブの準備費に消え去るので少しでも黒字になれば御の字と言うべきか。

ドームライブは桁違いに準備費がかかるため、基本的にグッズ等をたくさん売り上げないと黒字にはならない。

寧ろ大赤字なのである。

今回はお偉いさんという件のスポンサーがかなりお金を出してくれるとのことで現状黒字になるのは確定はしているのだが。

「まあ、慣れれば誰だっていけますよ……：うちが少数精鋭なんで他社さんと比べたら経験値が積めるからそれだと思えますね」

そんな風に笑って言つてのけるプロデューサーに、ポロシャツの男は凄いと思いつつも怖いとさえ思ってしまった。

彼の仕事能力の高さは勿論知っている。

しかしそんな彼が疲れている表情も弱音を吐いているところも見たことがなかったし、何より体調不良で休んでいるところも見たことがなかった。

“怪物”（フリークス）、というのはポロシャツの男が心の中で呼んでいる彼のあだ名である。

彼の能力は人間の域を超えている、とポロシャツの男は常々思っていた。

しかし、周囲は彼を完璧超人と持て囃し、“そういつた部分”に目を向けていないように男は見えた。

彼のその本質とも呼ぶべき部分は周囲の人は誰も読み取れていないようだし、男も底が見えなかった。

故に男は彼を尊敬すると同時に恐れていたのだ。

自分と同じ人間に見えない彼へ。

「まあ、283さんが大丈夫って言うなら良いんですけどね。力になれるか分からないですけど何かあったら言ってくださいよ」

「ありがとうございます。もし何かあったら連絡しますね」

きっと連絡など来ないのだろうが、プロデューサーの穏やかな表情に男は少しだけ嬉しかった。

男はただのADで彼の力になれるかと言ったらないのであるが、時たまこうやってプロデューサーと話すことが多かった。

彼との出会いはいつだったか。

その存在は以前から知っており、凄い超人みたいな人がいると。

そうなんだ程度にしか思っておらず、現場で見かけたくらいで話したことはなく、一方的にこちらが知っているという状態であった。

そんな折、休日に街の喫煙所でタバコを吸っていたときになんとそのプロデューサーがやってきたのだ。

まさか彼が喫煙者だとは思ってもいなかったため、とても驚いたのを男は覚えていた。

『ははは、すみません。内緒にしてくださいね』

困ったように苦笑する彼を見て、男は首を縦に振った。

いやそれより、彼から自身の存在を認知されているとは思ってもいなかった。

話した事ありましたっけと失礼な感じで問いかけたのだが、そんな言葉に彼はあっけらかんとう答えた。

『え、だって。先日の現場にいらっしやいましたよね。とても仕事が丁寧な人だなんて思っていましたよ』

ご挨拶はできませんでしたが、そう彼は続ける。

男は少し泣きそうになっていた。

こんな歳になってもAD止まりで後輩は自分より上のポジション

に既に行っていて、そんな風に褒められたこともあまりなかったのだが、この男は初対面でも自身の仕事をきちんと見てくれていたことに感動したのだ。

ちよろいと言われるかもしれないが、その言葉で男は彼への好感度が爆上がりしていた。

そんなこんなで男と彼の奇妙な関係性が生まれたのだ。

基本的に会って話すのはタバコを吸いながら。

しかも誰もいないこの時間帯のこの喫煙所、もしくは街の喫煙所。彼は喫煙していることをあまりバレたくないようで、この喫煙所から出る時も消臭スプレーを掛けている。

更に言えばタバコを吸うときは後はもう帰宅する時だけとのことだ。

恐らく283プロダクションに所属しているのがみんな女性アイドルだからなのだろうと男は推測していた。

「ずっと気になってたんですけど、283さんって結婚願望ってあるんですか？」

男は最近、一番気になっていることであるそれを遂に聞くことが出来た。

最近、彼が忙しいのもあってこの喫煙所で会うことが少なかったため聞けるタイミングがなかったのだ。

ちなみに二番目に気になっていることは地元の同級生がいつの間にか逮捕されていたというものだが、一体何をやらかしてしまったのだろうか。

「……うーん、そうですねー」

彼はタバコを吹かしながら思考しているのだが、そんな姿も絵になっっているあたり、生まれ持った容姿というのはずるいものだと思っただと男は思った。

男は生まれてこの方モテたことがないため、基本的にイケメンには良いイメージがない（理不尽の極み）のだが、ここまで出来た人だと嫉妬の感情すら湧かない。

嫉妬することすら烏澁がましい、そんな感情を抱いていた。

「まあ、出来るタイミングがあれば程度ですかね。というかそもそも話しの話し」

――俺が誰かを幸せに出来ている姿を想像出来ないんですよね。

そう告げた彼の表情が一瞬だけ、無表情になったような気がしたが気の所為のようだ。

彼はいつも通りの優しい笑顔だった。

「えー引く手数多じゃないですか。てか俺的に283さんは誰かを幸せにするより、まず幸せにしてもらった方が良いつすよ」

男の言葉に彼は首を傾げた。

想定していた言葉とは大分違かったようだ。

「なんか283さんって、色んな人に尽くしてるイメージだから寧ろ尽くして貰ったほうがバランス取れるんじゃないかって」

「……そんなものですかね」

そんなもんですよ、男はそう言ってまたタバコを吸う。

彼が頼られるところはたくさん見てきたが、頼っているところは見たことがなかった。

だから私生活では誰かを頼っていて欲しいという男の願望ではあった。

そんな人間らしいところを見れば男は彼を“怪物”なんて呼ばなくて済むからだ。

「283さんって色んな人に人気ですし、それこそそちらの所属アイドルの方たちとも仲良いじゃないですか」

「まあ、一応信頼はされているとは思いますが」

彼が所属アイドルたちと仲が良いのは傍から見て明らかだと男は思っていた。

矢印的にはアイドルからの彼へのものが強いのではあるが。

男が見かけた事例としてこんなものがある。

『プロデューサー、撮影終わったつす』

『あさひ、お疲れさま。とても良かったよ。前の子のより何だか良い表情してたね』

『そうすつか？ プロデューサーと一緒にいてくれたからつすね』

『ははは、どうやら緊張を和らげられたみたいで良かったよ』

『…… 別にわたし緊張なんてしないつすけど』

『あらら、なんだかご機嫌斜めみたいだね。そんな膨れた顔しないで、可愛い顔が台無しだよ』

『…… そういうところつすよねほんと』

先日、SNSで大御所デザイナーとのやり取りが面白いと大バズリした芹沢あさひとの一幕である。

この後、彼は彼女の無意識に膨らんでいた頬を手で挟み込んで一瞬で空気抜きをしていた。

彼女は雑に扱われたという不満な気持ちと雑に扱われたという嬉しい気持ちの二律背反が襲っており、結局機その後ご飯と一緒にいくことで何やかんや機嫌は直っていた。

まあ、男はそこまでの内情は知らないのではあるが、余程の信頼を深めていなければ良い意味でも悪い意味でも制御不能な芹沢あさひへこんな芸当は出来ないだろう。

故に男は思ったのだ。

彼は一般人では釣り合いが取れるような人物には見えなかったため、それならアイドルなど今をときめく芸能人と付き合うのが良いのではないかと。

世間のファンからしたら炎上ものかもしれないが、関係者からしたら芸能人も人間なため普通に幸せになって欲しいと思うのだ。

まあ、とても難しい問題ではあるのだが。

「いつそのことアイドルとお付き合いしてみるとかどうなんですか？  
けっこう行けそうな気がしますけど」

「いやー、キツイでしょ」

そんなプロデューサーの即答に、思わず笑ってしまったのは仕方のないことだった。

## 大紅蓮無間地獄編Ⅱ

「プロデューサー、レッスンは終わったから褒めて〜♡」

「ほいほい、おつかーれ〜」

都内のとあるレッスンスルーム。

そこは283プロダクションが提携しているレッスンスタジオの一つであり、所属アイドルたちもこのスタジオを利用することが多い。

283プロダクションの某レッスン鬼も割合ここを利用していることが多いため稼働率は割りかし高い。

「む〜ちよつと雑だよ〜。もつと雛菜のことちゃんと見て〜」

少しムツとした上目遣いで、プロデューサーを見つめた。

先程ドームライブに向けた曲のダンスレッスンは終了した市川雛菜は水分補給も済ませて汗も拭いて帰宅する準備をしていた。

雛菜はアイドルとしてのスキルでダンスを一番得意としており、新しい振り付けも感覚ですぐに自分のものにしていった。

担当トレーナーも当初その天性の能力に驚いていたのだが、彼女の少し協調性に欠けていた性格もあってレッスンに飽きてしまうことで多少衝突したこともあったのは今では懐かしい。

現在はきちんとレッスンに取り組むようになっており、周囲ともそれなりに上手くやっている（それでも基本は特定メンバーとしか関わることはないが）。

「え、そうか？ 仕方ない。なら、本気を出そうか」

そしてその特定メンバーの一人であるプロデューサーはレッスンが終わった彼女の様子を見にスタジオに顔を見せていた。

雛菜は彼の存在を認識した瞬間にニパーツと破顔させて駆け寄っていたのだ。

そんなプロデューサーは褒め方が雑だと指摘されたことを反省し、彼女の頭をぽんぽんと撫でようとする。

「あつ……それは今は、だめ〜」

置かれようと頭上に迫る彼の右手を両手で優しく包むと、雛菜は自

身の顔の横に持っていく。

気のせいか彼女の頬が赤く染まっていた。

「あ、ごめんな」

プロデューサーはその意図に気がつくとすぐに彼女に謝った。

レッスンが終わってすぐということとは汗を掻いているということだ。

只でさえそんな状態で触られることはどのような人間でも嫌なことだろう。

そしてそれが年頃の女の子であれば尚更に嫌な気持ちになるだろう。

特に雛菜は、言い方は変ではあるがとても女の子らしい子だ。

普段であれば彼女はプロデューサーに頭を撫でられる、触れられることを拒否することはない。

寧ろ触れて欲しいと迫るくらいで、その度に彼女は傍から見ても明らかな程に幸せオーラを出しているのだ。

その彼女が彼の優しい手を拒むということはそういうことになる。「うんうん、プロデューサーは悪くないの。それに撫でてくれようと

してくれるのすっごく雛菜は嬉しかったから」

雛菜はそんなプロデューサーに怒ることもなく、優しい表情で彼を見つめていた。

勿論彼女の両手の中には彼の手が包まれており、時折その感触を確かめるようにぎゅっぎゅっとして繰り返して握られている。

「そう言ってくれるなら良いんだけどさ」

プロデューサーは雛菜の機嫌が悪くなっていることにほっと胸を撫で下ろした。

一度機嫌を損ねるときちんと対処しないと後が長く、ドームライブを控えているこの期間に余計なストレスを与えたくなかったのだ。

ちなみにその間も雛菜はプロデューサーの右手を離す様子はないかった。

そんな彼女に対して多少の悪戯心で彼も軽く手を握り返してみる。

それが良くなかった。

瞬間、彼女の身体がビクンと震えた、ような気がした。

「あはー♡」

どうやら尚更に手を離してくれなくなってしまったようだ。

雛菜はプロデューサーの握った手に合わせるように力を入れ、自身の胸辺りに手を持っていく。

彼女の表情筋はとても緩んでいた。

それはもう幸せそうだった。

「プロデューサー……えへへ」

何だか雛菜の様子がおかしいような気がし、プロデューサーは何かミスったかなと頭を抱えそうになる（手を握られているので抱えられはしないが）。

確かに多少の悪戯心はあったが、それは普段彼女のやる気を上げているものの延長線上のものだ。

いつも無邪気にプロデューサーに抱きついたりしてくる彼女が“手を握られた程度”で何か変わるとは思わなかった。

「……ねえ、プロデューサー——今って“幸せ”？」

雛菜はプロデューサーの目をしっかりと見据えて、そう質問をした。

逃さないという強い意志を感じ取られるもので、まるで蛇に睨まれた蛙のようだ。

「幸せ？」

「……うん、プロデューサーには“絶対に幸せになって欲しい”って思ってるから」

彼女の目が濁っているような気がした。

普段の彼女からは想像できない何か粘着的な重みのある視線がプロデューサーを射抜いている。

「……ああ、ありがとな。俺も雛菜には幸せになって欲しいって思ってるぞ——そうだ雛菜、もう時間もあれだし帰る支度は

終わったのか？俺が途中で着ちやったから邪魔したんじゃない

かって思っただけど」

何か会話の流れがおかしくなっていることに気づいたプロデューサーはどうか軌道修正を行おうと舵を切った。

まだ彼女はレッスン用のジャージを着ていた。

ジャージで帰るということは学校であるまいし、ありえないことなので帰宅の準備が終わっていないことは分かっていた。

時間も少し遅くなってしまうため、安全の面でも早く帰らさないといけない、のだが。

「プロデューサー。雛菜の質問に答えて欲しいなって」

しかし、回り込まれてしまった。

彼女はプロデューサーを逃がす気はないらしい。

いやそもそもなぜ逃げるといふ行動を彼は取ろうとしているのだろうか。

「それは勿論幸せだよ。雛菜たちのお陰で毎日充実しているし。それに雛菜たちの喜んでいる顔を見るとこっちも嬉しいからね」

ドームライブが迫る中、彼女たちには普段の仕事の合間を縫ってレッスンをして貰っている。

今回の大規模なライブで日程も2日間なため曲の数も覚えることも多い。

相当負担になっっているはずで更にまだまだ未成年の子たちも多く、本当ならあまり無理はさせたくはない。

それでも彼女たちはプロデューサーから負担をかけると頭を下げられた時は文句を言うこともなく、寧ろ任せてと頑張ってくれている。

そこには本当に感謝していた。

「…… “たち”？ “雛菜の”、じゃなくて？」

しかしその返答に納得がいかなかったのか彼女の表情は変わらな

い。  
しかも突っ込むところはそこなのかとプロデューサーは再度頭を抱えそうになる。

勿論、彼の右手は雛菜によって奪われているためそんなことは出来

ないのであるが。

「ああ、そうだけど」

「何をやってるの？」

ガチャリとドアが開く音がする。

そこから底冷えするような声が響き、このレッスルームに残る熱気を即座に冷却していた。

「…… あー円香先輩。タイミングわるーい。空気読んでくださいよ」

「は？ タイミングって私もレッスンしてるんだから何を読まないといけないわけ」

彼女は樋口円香。

雛菜と同じノクチルに所属している283プロダクションのアイドルである。

メンバーは彼女たちに加えてあと2人いるのだが、仕事の関係で今日のレッスンは雛菜と円香だけであった。

彼女はプロデューサーが来る少し前にお手洗いに行っていたようで、たまたまタイミングがかち合わなかったのだ。

「あなたもその手、さっさと離れたらどうですか。ずっと雛菜と手を繋いでいるつもりなんですか？」

そして円香の視線の矛先は雛菜からプロデューサーへと向いた。

気のせいかな、円香の表情には苛つきと怒りの感情が見える。

「ああ、そうだな」

「雛菜はプロデューサーと手を繋ぐの好きだからこのままで良いかなって感じる。プロデューサーは嫌？」

「別に嫌ではないけど」

「だったら良いよね。だから円香先輩は気にしなくていいよ」

「は？ 気にするっていうか、こういうの事情を知らない人に見られると不味いから言ってるんだけど。あなたもプロデューサーならそういうところ気にしなくてどうするんですか？」

何故だろうか。

この2人、いつにも増してバチバチな気がするのは気のせいだろうか。

ノクチルというのは全員が昔からの幼馴染で構成されている業界でも珍しいユニットであり、そんな幼馴染であるからこそ仲が良い。遠慮がないと言ったらあれではあるが、気おけないやり取りが出来るということはそれだけ心を許しているということになる。

だからこそ4人は仲が良いというのはプロデューサーは理解していた。

しかし、そんな彼女たちの中でこの円香と雛菜の2人に関してはまだに疑問を呈すことがある。

世間では不仲説云々が囁かれることもあるのだが、それも強ち間違っているのではないかと。

ノクチルの中で特に当たりの強いやり取りをするのがこの2人で、出会った当初は心配していたときもあったが一緒にいる過程でその心配はなくなったはずだったのだが。

「プロデューサーに当たらないで。そもそもプロデューサーは何にも悪くないのに。円香先輩、もしかしてヤキモチ？」

「……は？ ふざけないで。そんな話じゃないんだけど。アイドルとしての振る舞いのことを言っているんだけど」

「え〜。あの〃円香先輩がアイドルとしての振る舞いとかを言っちゃうんだ〜。ちよつと面白いね〜」

「何が〃あの〃なのか知らないけどいい加減にして。そもそもライブに向けての練習でそんなことしてる暇あるわけ？」

「今日のレッスンはもう終わったよ〜。それに雛菜は円香先輩と違って切り替えちゃんと出来てるから〜」

「っ………！ 雛菜、ふざけるのもいい加減に——」

段々とヒートアップしていく2人の言い争いが本気で不味いと感じ取ったプロデューサーは流石に割って入ることにした。

この流れで雛菜からの右手拘束を解除することにも成功した彼は

直様仲裁体勢に入ると彼女たちの間に立つ。

「ごめん、俺が中途半端な態度を取ってたからだよな？ 本当にごめん。だからそんな風に争わないでくれ」

一体彼女たちが何でこんな言い争いしているのかプロデューサーは分かっていたいなかった。

無論、そんな何も分かっていない状態で謝るとするのは逆効果ではない。

しかし今のプロデューサーは余りにも無力であった。

「誰のせいであらうなっていると思ってる……！」

案の定、円香からは鋭い眼光と言葉がプロデューサーへ飛んでくる。

先程よりも彼女の苛つきメーターが跳ね上がっているのが分かった。

「……プロデューサーは、雛菜の側から居なくならないよね」

「ちよつと、雛菜……！」

雛菜の瞳から色が抜け落ちたかのような表情でプロデューサーへ何かを問いかけた。

そしてそれを横で聞いていた円香は何か慌てたかのように雛菜の言葉を止めにかかる。

「……雛菜？」

一体何なのだろうか。

プロデューサーはその2人の様子を理解出来ず、首を傾げそうになった。

「ごめんねー。雛菜着替えてくる。あ、プロデューサー、一緒に帰りたいから待っててね」

スンと雛菜はいつものふわふわとした雰囲気に戻ると、荷物を持ってレッスルームを出て行ってしまった。

それにより先程まで部屋の中を充満していた重苦しい空気は霧散し、肩が軽くなったような気がした。

「……あなたは雛菜を甘やかし過ぎなんです。分かっているんですか？ ミスター・チヨコラテ」

「ははは、そんなに甘やかしている自覚はないんだけどな。でも円香がそういうならそうなのかもな」

そして円香からも鋭利さが抜け、いつものような愛ある罵倒(?)が飛んでくる。

この状態が意味するのは少なくとも先程までの本当に怒っているわけではない、ということだ。

他者から見たら大変分かりづらいものではあるが、これはプロデューサーと円香特有のやり取りであるが故のものだった。

そのため、プロデューサーは円香のそんな様子に少し安心し、胸を撫で下ろした。

「ええ、甘いです。甘すぎです。まるでバレンタインのチョコレートですね。胸焼けがします」

円香の独特なその語彙は何故か安心感があり、プロデューサーへ現実に戻ってきた感覚が染み込んでくる。

ちなみに彼は別にDMではなく、寧ろその逆なまでであった。

「一応みんな平等に接してはいるんだけどね…… そんなに直した方が良いのか？」

「…… まあ、あなたのその胸焼けする甘さは今更ではあるので別にそのままが良いんじゃないですか」

その甘さに慣れた他の人たちはきつと抜け出せないでしょうし。

円香の意味深な言葉にプロデューサーは苦笑してこう返した。

「ははは、それだとまるで俺が悪いクスリみたいなことを言うんだな」

「ええ、あなたは毒薬です…… 本当に質の悪い詐欺師いや、小悪党ですね」

悪人から小悪党にランクが下がったのはきつと良いことなのだろう。

プロデューサーは強引にそう思うことにした。

出会った当初であればこんなやり取りすら出来ていなかったら

う。

ある意味でなんやかんや仲は良い、はずなのだ。

「まあペテンでもなんでも円香たちが輝いてくれるなら、俺にとってそれ以上はないよ」

「…… そうやって歯が浮くような言葉を恥ずかしがらないでいうところ、本当に嫌い」

そう言っつて円香はプロデューサーから顔を反らす。

様子から見て彼の言葉で恥ずかしくなったのは彼女のようだった。

「ははは、そんなに恥ずかしいかな？ 本気で思ってるんだけど」

「本気で言っているから質が悪いつてことです…… こっちは来ないでください。あなたのそれが感染したらどうしてくれるんですか」

そう言う円香ではあるが今まで彼女はプロデューサーのほぼ隣（距離にして一步）で会話をしており、さらに言えば自身からその場所を離れるようなことはしなかった。

プロデューサーも本気で言っているとは思ってもいなく彼女なりの冗談なのは分かっていた。

そのため、逆に彼も多少であるがふざけた会話がしやすいのだ。

「えーそれはショックだなー。なんか特效薬とかないかな」

「あなたの場合、ワクチンなんて打ったら完全に消え去るでしょ」

「なるほど俺自身がウイルスつてことねって、それは酷くないか？

もうこうなったら徹底的な生存戦略を発動するしかないな」

「バイオテロは止めてください。街ごと滅菌するしかありません」

そういえば一昨日テレビでバイ〇ハザー〇やっつたなど思い出しながら、映画好きな円香なら見ているもおかしくはない。

それにこんな風にポンポン小気味よく会話が返ってくるのは割りと楽しかった。

「…… だから、そういう態度をするのは、どうか私だけにしてください」

「え？」

余りに小声でプロデューサーの耳に届かなかった円香の言葉。

情けなくそう返すしかなかった。

「……いえ、あなたの被害者を見るのはとても心苦しいんです。ですので私がしつかり“監視”しておきますので目の届く範囲にいてください」

もしそれで刺されたりでもしたらこのプロダクションにも迷惑が掛かるので。

そう円香はぶつきらぼうに続ける。

昔はアイドルなんて笑っているだけの簡単な仕事とまで言っていた円香が、会社のことやみんなのことまで考えてくれるなんてとその成長に内心プロデューサーは少し感動していた。

だがそれを指摘すれば円香の機嫌を殊更悪くしてしまうので決して表情には出さないが。

「……まあ、刺されそうになったことはあるにはあるのか」

「何か言いましたか？」

いいや何でもないよと、プロデューサーは返すとそういえばとスマートフォンを開きメールアドレスのチェックをする。

今日中に返答が来るものが何件かあったのだ。

流石に遅くなっているのでそこを心配していた。

「あ、そうだ」

「はい？」

プロデューサーはフリックしていた指を止め、円香の方を見た。

それに対して円香はどうかしたのかと小首を傾げている（可愛い）。

「レッスン、お疲れ様。今日も頑張ってた偉いね、円香」

軽くポンポンと頭を撫でる。

不意に。

気になったプロデューサーは軽い気持ちで彼女へ初めてボディランゲージを実行した。

「なっ……！！」

そして円香はゴルゴンの眼を見てしまったかのように石化しており、その顔は仄かに赤く染まっている。

さあ、いつもの様子であればこの後頭に置いた手は払いのけられて罵倒のフルコースが飛んできそうではあるが（下手をしたら通報され

る)、果たしてどうなるか。

「…… はあ、本当にあなたは…… 馬鹿なんですかね」

円香は一度呼吸を整えると、呆れたようにその声を絞り出す。

結果的に彼女はプロデューサーの手を払わず、罵倒も想像よりも遙かにボキヤ貧だった。

そう、彼は彼女たちと距離感を掴んだ瞬間というのは大体こういう感じであった。

ある意味でレアな場面と言うべきか。

まあ誰がこの事象を観測しているという話なのではあるが。

「うん、別に馬鹿でも良いさ」

彼は相手の嫌がる行動はしないことを当たりまではあるが心がけていた。

故に距離感を一気に縮められるのを嫌がる人にはじつくり時間をかけて接するように彼は無意識に相手を攻略する。

逆に言えば相手はもし距離を縮めたいと思っていればそれを無意識に察して実行するのが彼なのだ。

この状況に当てはめればこれはプロデューサーが望んだことではなく寧ろ彼女の方が、という話になる。

プロデューサーからすれば完全な真意は分からないのではあるが、少なくとも円香は彼に触れられることを嫌がってはいないということまでは理解することが出来ていた。

「…… 本当に馬鹿です、本当に…… これじゃあまるで私も」

—— 違う、私は“まだ”大丈夫。

円香は何か自身に言い聞かせるようにしててたがそれはプロデューサーの耳には届かない。

なぜならそれは心の中で繰り返していたからだ。

万一にも彼にそれは聞かれたくなかったのだ。

認めたくないのだ、自身の弱い所。

自分が一番嫌いな”それ”に毒され、これで良いのではないかと思っていることに。

「おっと、来た来た」

彼女の頭の上に置かれた手は離れて、彼の目線はスマートフォンに移る。

漸く待っていたメールの返信が来たようですぐに内容を確認し始めるプロデューサー。

円香は自身の頭から離れたその大きな手を無意識に追いかけていたが、すぐに自覚し視線をどこでもない場所へ向けた。

「お待たせく2人ともく」

すると着替えが終わった私服姿の雛菜が戻ってきた。

「うん、おかえり雛菜」

「……私も着替えてきます」

そう言っただけで円香は雛菜と入れ替わるようにして更衣室へ向かうべく、レッスンスルームを出ていった。

「……プロデューサー？ 円香先輩と何かあったの？」

「え、特に何もなかったけど」

何かあったのは間違いないのだが、余計なことを言うと面倒なことになると察したプロデューサーは自身の表情筋を高等制御してそう言った。

本当に何もなかったかのようにだ。

「ふーん、そっか」

すると雛菜はプロデューサーの下へ向かい、目の前にやって来ると彼のその両手を握った。

仄かに石鹸の香りが漂い、その距離の近さを自覚させる。

彼女は彼の眼をジッと見据えてこう言った。

「プロデューサーは雛菜が”幸せにする”から、ちよつと待っていてね」

雛菜のその言葉にどう返せば良いか分からなくなってしまったプ

ロデューサーは一瞬であるが時間が止まってしまった。

脳内をフルスピードで回転させるも、アンサーが出てこない。

「えっと、雛菜？ それって……」

「あー！ 円香先輩、荷物忘れてるー！ ちょっと届けてくるね」

そして雛菜は台風のように現れて、またすぐに消えてしまった。

後に残ったのは彼女の石鹸の香り。

プロデューサーは一瞬何かを考えるとスマートフォンを確認し、先程のメールに取り敢えず返信をすることにした。

「…… うーん、この進捗だと旅行行けるかなーこれ？」

## 大紅蓮無間地獄編Ⅲ

「ねえ、プロデューサー。どうして空って青く見えるの？」

快晴の空のもと、来月発売されるファッション雑誌の撮影が都内の某公園で行われていた。

いつもの撮影スタッフたちが忙しく動く中、当の被写体である彼女、浅倉透は休憩中と近くの木製ベンチに腰を掛けてぼーっとしている。

そんな透の眼の前には手にいつものペットボトルのブラックコーヒーを持った彼、プロデューサーがいた。

「青く見える理由、ね……」

彼は少し考える素振りを見せる。

どう説明しようかということだろうか。

正確には透の性格を鑑みてのことなのであるが。

彼女は思考は読めない時が結構あり、自分で聞いておいて反応がとて薄かったりするなど、会話においては注意を払わないといけないのである。

透と似たタイプとしては芹沢あさひもそうだろうか。

まあ、それも出会った最初の方だけで最近ではそういったことは少なくなっただよな気はしているが、プロデューサーはその当たりの会話の仕方を少し引きずっていた。

「人間は光の波長を色として認識しているんだけど、その光、つまりは太陽光が大気中で散らばって、その散らばった光の波長が青だからそう見えるってこと、かなー。めちゃくちゃ簡単に言えば」

「へー。でもなんで青なの？」

「波長が短い光は特に散らばりやすいんだ。その中でも青は波長が短い光なんだよ」

そしてそんなほんの少しだけ悩んでいたプロデューサーは、特にスマートフォンで調べるわけでもなく何の気なしに彼女が疑問に思ったことを意図も簡単に回答した。

彼女にとって特に興味があつたわけではなく、ただなんとなく口に

出していた言葉ではあった。

実際学校で既に習っているはずではあるのだが、つまらない授業の内容が果たして透の脳用量にどれだけ占められているのか。

結果的に言えばそんなこと覚えていることはなく、プロデューサーから教えられても「あーなんか聞いたことある」といった状況にはならなかった。

でも何故か、プロデューサーが教えてくれたことはスツと透の頭に入ってくる。

きつと空が青い理由を彼女が今後忘れることは決してないだろう。

「プロデューサーってき、物知りだよね」

「ははは、そうかな？ まあ、透よりも10年くらいは生きている時間が長いからね」

プロデューサーはペットボトルのコーヒーの蓋を開けると、一口それを口に含んだ。

彼の男性らしい喉仏がコーヒーを飲み込むのに合わせて動くのが、彼女には妙に艶めかしく見えて、釘付けになってしまっていた。

そう、10年くらい。

透とプロデューサーの年齢的な距離であり、今後絶対に近づくことのないものであった。

「……プロデューサーって、高校のとき何してた？」

その質問は透にとってある種、致命的になりうるものであった。

今の今まで怖くて出来なかった彼の過去に迫る質問。

彼女は10年前にある公園で彼と出会っている。

その記憶は幼かった彼女の脳裏に灼き付き、決して忘れることがなかった特別なものだった。

このことは彼女の幼馴染たちも知らなかった。

言ってみれば透は事務所において彼の過去を知る数少ない人物の一人であったのだ。

「高校のとき？ そうだな、何してたかなー」

うーんと唸りながら彼は少し困ったように考える。

怖くて過去のことなどほとんど聞けなかったのだが、今の透は話の流れでつい聞いてしまっていたのだ。

「そうだね…… 高校のときはオカルト研究部に入ってたよ」

「オカルトって、お化けーってこと？」

うらめしやと両の手を前に出す透にプロデューサーは苦笑いしていた。

「まあそんな感じかな。あとUMAとか都市伝説とかかなー」

懐かしいなど彼の表情は少し頬を緩めていた。

プロデューサーにとってその記憶はとても暖かいもののだろうか。

透は少しだけ心が締め付けられたような気がした。

「なんか意外。バスケットかバレーとかやってるイメージだった」

彼の身長はかなり高く、普段の様子から見ても運動神経も悪くなさそうと判断した透は素直にその事実には驚いていた。

しかも運動部ではなく文化部。

さらに言えばオカルト研究部というかなりの色物である。

意外という他なかった。

「あーなんかよく言われるねそれ…… まあ自分から入ったっていうか、数合わせで入っただけなんだけどさ」

「人いなかったの？」

「うん、俺含めて4人しかいなくてね。部活動規定で最低4人必要だったらしくてそれで頼まれて席を置いていたっていうね」

「…… ちなみに部員って女の人のいたの？」

珍しく質問攻めをしてくるなどプロデューサーは思ったがそれは口には出さなかった。

それは無粋というものであるからだ。

「男2女2だったよ。全員同級生」

「ふーん」

プロデューサーの返答を聞いて、微妙な表情を浮かべる透。

これでもし男女比が彼以外女性であったなら思い切り拗ねてやる

うかとほんの少しだけ思っていた透であったが、実際は半々という丁度良い比率であった。

逆に男オンリーとかであれば笑って楽しそうだねと流せたのだが。

「ははは、今思い返してみれば心霊スポットとか行っただけど罰当たりだよ。まあ楽しくはあったけどさ」

「怖くなかったの？」

「うーん多少は怖いとかはあったと思うけど、毎回他の3人がビビりすぎて逆に冷静になってたかもしんないね」

「どんなどこ行っただの？」

「廃病院とか廃屋とかかなー。昔そこで事件があったとかそんな曰く付きのところ。まあ今じゃ取り壊されているところも結構あるけどさ」

あ、心霊スポット巡りとか危ないから絶対やらないでねと釘を刺すプロデューサー。

透ならノクチルの幼馴染面子を引き連れてやりかねないからである。

「あと呪われた人形とか謎の開かない木箱とか部長がどっかから探して持ってきてさ。その出処を探したりとか呪われてるならそれを解除出来るんじゃないかとかそんなことしてたよ」

「分かったの？ 出処？」

「うん、見つかったり見つかなかったりって感じかな。まあ俺から言えるのは触らぬ神に祟りなしって言葉だね」

何とも意味深な言葉を言うプロデューサーに透はもしかしてと言葉を発した。

「…… お化けに会えた？」

「…… いや、会えなかったよ。それなりにいろんな心霊スポット連れてかれたけど、やっぱりいないのかもしれないね」

何故か残念そうにするプロデューサー。

その表情に透は少し違和感を感じた。

儂げというかセンチメンタルというか、彼の表情は何だか変だった。

「……透は？」

「ん？」

「透は学校でどんなことあった？」

そしてこれ以上踏み込まれなくなかったのか、プロデューサーは今度はこちらの番だと透へ質問を投げかけた。

かなり大雑把な質問ではあるものの、透からの話の流れとしては別段違和感はないものではあるが。

「うーん、私はやってないけど周りのみんなはT i k T O kやってる子が多いね。先生に内緒で教室で撮ってるのバレて怒られてる子たちがいて、全校集会開かれたけど」

「あららバレちゃったのか。まあそれくらいの歳ならそういうことやっても仕方ないよな」

「でもその全校集会のお陰で一時間目潰れたからラッキーだった」

確かにそれはすごいラッキーだなとプロデューサーは笑った。

そう、プロデューサーはこういうことを言っても否定はしない。

普通だったら勉強は大事だとかそういうことを言うのかもしれないが、彼は意外にもこういうことに肯定的なのだ。

「俺も高校の頃、授業が怠くなったとき保健室に行って寝てたりとかしてたし」

「ふふふ、プロデューサー悪いやつだ」

そしてプロデューサーのさらに意外な過去に親近感を抱きつつ透は微笑んだ。

やっていることはただのサボりなのだが、彼がやっているというだけで可愛く思えてくるの何故なのか。

「頻繁には出来ないし、それなりに成績は維持してたのもあるけどさ。あと保健室の先生と仲良くしておくとかそういう時に便利だぞ」

俺からのワンポイントアドバイスだと、人差し指を立てながらそういうプロデューサーではあるが大の大人が学生に対して言うべき言葉ではなかった。

プロデューサーも分かっただけだ。

自分がダメなことを言っているのを。

だが学生時代というのはその時だけしか味わえない青春があるのだ。

確かに勉強は大事であるが友達や部活、学校行事などその後の人生のある種の礎を作る部分であり、大人になり社会人にもなればそんな体験は出来なくなってしまう。

だから硬いことは言わず、彼女たちには今の生活を楽しんで欲しいとプロデューサーは本心で思っていた。

「俺はさ、何事も出来れば楽しい方が良いと思ってる。だから透も、勿論多少は加減はして欲しいんだけど自分のやりたいことやいなよ。今だったら俺もいるから何かあっても助けることだって出来るしね」

『何でそんなつまんなそうな顔してるわけ』

『……そうかな?』

『お前みたいなガキンチョはもつと楽しそうにしてろよ。見ていてなんか——歯がゆい』

『はが、なにそれ』

『ははは、勉強するんだな。ほら時間も遅くなり始めてるからさっさと帰りなよ』

『……お母さんとケンカした』

『あーそういうこと。まあ気持ちは分からなくもないな。けどさっさと謝って仲直りしとけ。どうせ下らないことで喧嘩したんだろ』

『……なんでケンカしたんだっけ?』

『お前もしかして馬鹿なのか?』

ふと透の脳裏に封印されていた記憶が蘇った。

それは透にとって大切な10年前の夕日に染まるある公園での記憶。

その時に出会った歳上の彼。

ぶつきらぼうな口調ではあるものの暖かい優しさが含まれていて。

ベンチで本を読んでいた彼に何となく話しかけて、読書の邪魔をしたはずなのに透の話はずっと聞いてくれた。

何故だが分からないがそんな彼に透は全幅の信頼を置き、悪い人ではないと無意識に確信していたのだ。

最終的には時間が遅くなったからと家の近くまで送ってもらった。その時、また会える？と聞いたのだが彼は鼻で笑いながらこう言った。

『そうだな、お前がもつと大人になって美人になったら会ってやらなくもないな』

そう言つて彼は気付いたらいなくなっていた。

彼女はその後、何回もあの公園へ行ったが彼と再会することはなかった。

約一年前のあの日までは。

透にとつての幼少期のあの出会いが人生のターニングポイントと云うのならば、彼と再会したのは2度目のターニングポイントにしてある種今後の彼女の人生の線路を確定させてしまったと言つても過言ではなかった。

そうでなければアイドルのスカウトなど幾ら適当な透と言えど受けることはない。

現に彼女は何度もスカウトはされてはいたが全て断っていた。

しかし今度彼女をスカウトしたのはあの彼だ。

断るなど彼女にとつてそもそも選択肢になかった。

故に彼、プロデューサーは透にとつて人生の中心、謂わば太陽系で言う恒星のような存在であった。

彼女にとつて多少話し方は変わったかもしれないが、あの頃の彼と何一つ性格は変わってなどいない。

多少何があったかは勿論気にはなっているが、彼女にとつて彼と一緒にいれる今のこの環境こそが最も優先されるべき事項である。

だから彼がこの事務所を辞めてしまうというのは何としても阻止しなければならなかった。

これがもし透が成人していれば無理してでも着いていくことも可能であったが、まだ彼女は高校生の子供。

少なくとも高校を卒業出来る後一年の猶予は欲しかった。

少し前の彼女なら高校を中退してでも彼に着いていくことも選択の視野に入れていた。

だがそれを彼は決して望まないことは分かっていた。

彼とは今後の人生をずっと一緒にいたいのだ。

出来れば自分と彼、同時に寿命を終えたい程にだ。

だからこそ余計なしがらみを作りたくなかった。

しつかり高校は卒業して世間一般で言う成人になり、堂々と彼と一緒にいるために。

それまでは何としてもプロデューサーを辞めさせるわけにはいかない。

透にとってアイドル活動は今楽しいと感じるものである。

幼馴染4人で一緒にいれるのは安心する。

フアンの笑顔も勿論嬉しいものである。

両親も自分の活動をとてども応援してくれている。

でも彼女にとって一番大事なのは彼なのだ。

彼が褒めてくれるときの本当に嬉しそうな顔。

彼が楽しそうにしている優しい顔。

彼が困っているときの可愛い顔。

彼が仕事をしているときのかっこいい顔。

その全てが彼女にとって愛おしいものであった。

彼女の優先度は芸能界で生きるアイドルとしては許されるもので

はないだろう。

だが彼女は人間なのだ。

しかもまだ子供だ。

精神がまだ未成熟が故に、バレたときのリスクは度外視になっている。

そもそも彼女がアイドルをやっている理由は彼の存在があるからで、他の誰のためではない。

そんな彼女のやりたいことは既に心に決まっていた。

「……ねえ、プロデューサー」

「ん？ どうした」

「これからもずっと、ずっと側にいて欲しいな」

彼女の透き通るような瞳が彼を捉えていた。

それはまるで宇宙空間に現れた重力崩壊した超巨大天体の如く、何ものも逃さない。

「ははは、それじゃまるでプロポ」

「浅倉さーん！ 準備終わりましたんで次お願いしまーす！」

並大抵の男なら一瞬で勘違いしかねないその言葉にプロデューサーは苦笑しつつ、その真意を訪ねようとする。横から撮影準備が終了したスタッフが声をかけてくる。

「はーい……プロデューサー、今日はこの撮影終わるまでいてくれる？」

いつものように間延びした返事をする。透はプロデューサーの方を向いた。

気づいたスーツの袖を握られていた。

「すまん、あと30分くらいしたら次の現場行かないといけなくてさ」「そっか……。だったらそれまで私のことだけ見て、私のことだけ考えて。それで許す」

そう告げる透の表情は真剣で、冗談で言っているようにはプロデューサーは見えなかった。

彼女の瞳が彼を貫くほどに見つめていたのだ。

「わかったよ—— お前のことだけ見てるし、お前のことだけ考えてる。これで良いだろ？」

「……っ。うん、それで良い。バッチリ決めてくる」

プロデューサーの真剣な瞳に透も貫かれた。

顔が良いと評判のその容姿に、真剣な表情が合わされば最強に見える。

透はそんな彼から目を反らしてそう言うと、彼女にしては早足で撮影場所まで歩いていった。

そんな彼女の後ろ姿を見て、見られる側の人間として成長したなどプロデューサーはとても感心していた。

成長する子供を見る親の気持ちだろうか。

プロデューサーはそんなことを考えつつ、透の撮影を眺めていた。

カメラマンの指示に従い、ポーズを決めて着々と撮影を進めていく姿に安心を覚える。

「…… あのとときは馬鹿なんじゃないかと言ってしまったけど」

彼の目を通して見る透からそんな様子は微塵もない。

あるのは“出来るモデル”そのものだ。

そのミスティアスな雰囲気も重なってファンが多いのだから充分に領ける。

「…… 根っこのところでは10年前となら変わってはいないね。そこはまあ安心、かな」

彼は消え入るような声でそう呟き、進んでいく彼女の撮影を眺める。

しかし今日は気持ちの良いくらい天気が良い。

世間一般では日曜日で、もし休日であればこれ程までにないピクニックや散歩日和である。

だが彼は仕事であった。

彼は撮影の隙を突き、澄み渡る青空を一瞬見上げ、溜め息を吐いた。

——全体のスケジュール管理キツすぎんだろ！

先程した約束はすぐに破れられたのを透は知らない、というより知る由もなかった。

## 大紅蓮無間地獄編Ⅳ

283プロダクションが保有する社用車は2台存在する。

1台は4人乗りの黒のLEXUS。

もう1台は8人乗りのシルバーのALPHARD。

どちらも大概高級な日本車である。

これに関しては完全に社長の趣味で事務所に所属したときからこの2台であり、今でこそ少しは慣れてきたものの毎回運転する際に多少の緊張感に襲われるのは勘弁して欲しいとは思っていた。

まだ事務所がそこまで売れていなかった頃は営業に向かう際は態々目的の場所から少し離れた駐車場に停めていたのを思い出す。

調子に乗ってんなと思われかねないからである。

下らないとは思うが社会で生きていく上では面倒ではあるものの、気を使わなければならぬのだ。

「ごめんな、渋滞に嵌ったみたいだ」

「ぶ、プロデューサーさんのせいじゃないので大丈夫です……！」

現在、関越自動車道をノロノロと進む車達。

その中の1台である黒のLEXUSにはプロデューサーと福丸小糸が乗っていた。

運転席には勿論プロデューサー。

そして後部座席、ではなく珍しく助手席には小糸が座っている。

いつもならば後部座席の左側が彼女の定位置であるからだ。

車内で左側に小糸がいる感覚を少し新鮮に感じつつ、プロデューサーは目の前の渋滞する車達を眺めていた。

「工事で渋滞ねー。これだと事務所に着くの何時になるかなー」

プラスで1時間くらいで2時間ちよいはかかるかもと、少し辟易しながらホルダーに置いてあるスマートフォン画面を睨みつつ、プロデューサーは進んではまた止まるといふのを繰り返していた。

時間はまだ14時を過ぎた頃で、更に言えば現状彼が直接出向く必要のある仕事はなかったので問題はない。

まあ、だからこそ現在彼女の送迎をしているのではあるが。

「そうだ、今日の仕事改めてお疲れ様」

「は、はいっ………！ 着物も着れてなんだか京都みたいで楽しかったです！」

今日は埼玉県某所の小江戸と呼ばれる場所でロケがあり、内容としてはおすすめの観光スポット巡りというものである。

彼女含め、大御所の男性俳優に最近グランプリを取ったお笑い芸人コンビ、老若男女関係なく人気の女性タレントと某テレビ局の女性アナウンサーでの撮影であったのだが皆優しい人柄で小糸もあまり緊張しないで済んでいるようで良かった。

大御所の男性俳優さんに関して以前、小糸と番組で共演したことあつて気にかけてくれているようで、孫ほど離れている年齢差であるからか、本当に孫のように可愛がつてくれているようで担当プロデューサーとしても嬉しいものだった。

ちなみにその大御所俳優さんは着物姿の小糸を見たときに孫を思い出すなど言つて笑いを誘っていた。

「そっか、それなら良かった。あと着物すごい似合つてたな。次の仕事はそれ系でも良いかもね」

「えへへ、そ、そうでしたか……… えへへ………」

突然プロデューサーに褒められて、両手で頬を抑えてニマニマする小糸。

基本的にコミュ障に近い彼女から無防備なこの表情を引き出すのはかなり距離感を縮めなくてはいけないレアなものである。

小動物的な彼女は周囲の視線を気にしているところがあるため、隙を見せることは少なく常に緊張状態みたいなことになつていた。

幼馴染の前では勿論別ではあるのだが、その例外にプロデューサーも少し前に入ったのだ。

「しかし、久しぶりにあそこ来たけど、なんか関東じゃない感じがして変な感覚だったな」

「……… 前にも来たことあるんですか？」

目の前の渋滞を眺めながらそう話すプロデューサーに小糸はそう問いつ返した。

「うん、前につてか、何年前だろうな…… あー高校の時か。友達に行ってみたって言われて行っただよ」

思わず流れでプロデューサーの過去の話を掘り下げること成功してしまった小糸は内心でドキドキしていた。

いつも彼は雑談でも何でも最近あったエピソードを面白おかしく話してくれ、そこからこちらに話題を振って話を広げてくれるため、中々過去のことを聞くことが出来ないでいた。

聞いても軽く話してすぐに軌道修正されてしまい、283プロダクション内での彼の過去を知っている人物のパーセンテージは少ない。それが果たして彼が故意的なのか無意識なのかは判断することは出来なかったが。

「その時は何して過ごしたんですか……？」

「今日みたいな感じだよ。歩いて飯食べて、人力車乗ったり、和菓子作ったりとか本当に真っ当に観光してたな」

あと茶蕎麦が美味しかった記憶があるなど続けるプロデューサー。ちなみに今回のロケの彼女たちのお昼ご飯は茶蕎麦ではなくうな重であった。

めちやくちや美味そうだったとロケを眺めていたプロデューサーは空腹と戦っていたのだが、勿論それは表には出さず、お腹の音も謎の高等肉体制御で抑えていた。

「へ、へえ、そうなんですな…… ちなみに一緒に行っただお友達つて……」

ロケ中に食べたうな重もとても美味しかった小糸であったが、それよりもプロデューサーとその美味しかった茶蕎麦を食べてみたい気持ちの方が遥かに強くなっていたのは仕方のないことだった。

何ならプロデューサーと一緒に着物を着て、あの町を並んで歩いてみたいとさえ思っていた。

しかし、そんな妄想を楽しむのを邪魔するある疑問が小糸の脳内を支配していた。

一緒に行っただ友達は同性なのか異性なのか。

それは2人で行ったのか、それとも複数人なのか。そんなところが小糸は気になって気になって仕方なかった。勿論、他にも気になることはたくさんある。

何年の何月何日何時何分何秒にそこへ行ったのか。服装は何を着ていたのか。

そこまでの移動手段は何を使用し、帰りは何で帰ったのか。

どのようなルートで周り、何を体験し何を食べて何を買い、どのような話しをしたのか。

気になることはたくさんあつて聞きたいの山々ではあるが、今一番気になる情報はそこであつたのだ。

「あー…… 女友達だよ。いやなんかそういうつもりで話したんじゃないんだけどさ」

プロデューサーは全く意識していなかったのだが、少しやらかしてしまつたと後悔する。

これではまるで自分の過去を語りたがつている人みたいで痛い奴になつてしまう。

そもそも自身の過去のそういうエピソードなど誰も興味ないであろうに、このままでは何を言つても墓穴をほつてしまふそうだ。

連日のライブに向けての各方面との打ち合わせや、大きな渋滞に嵌つてしまつたことも合わせて生まれてしまつたある種の間隙であつた。

「それって、その…… 彼女、さん…… です、か……？」

恐る恐るといった感じで小糸は見上げるようにしてプロデューサーへ問う。

そう、これは箝口令ストレスというかラインを少し踏んでいる質問であつた。

下手をして、もし小糸を含めた283プロダクション女性陣全員が恐れるある答えが返ってきたらその瞬間に全て終わってしまう。

特に小糸はこのタイミニングで発覚してしまつたら渋滞に嵌つているのと合わせて車内は地獄と化するの明らかであつた。

「いや本当にただの友達。というか元々もつと大人数で行くことになつてただけど、当日に俺とその女友達以外急用が出来たから行けなくなつた連絡が来てさ。現地集合だったもんだからそのまま帰るの勿体ないつてのもあつて2人で回つたんだよ」

ちなみであるが、急用が出来た他のメンバーは皆カップル同士であり、この急用の意図は彼に中々アタックできない彼女の背中を押すためのものであつたのだが結果はご察しの通りである。

「へ、へえ〜………… そうなんですな」

安心と同情、その2つの感情が小糸の心を覆っていた。

まあ前者の割合がほぼを占めていたのだが。

「でも普通に楽しかつたけどね。歴史的な建物とかも見れたし」

そんな小糸の事情を知らないプロデューサーは純粹に楽しかつたと語る。

この男、神社とか城とかそういういった建物を見るのが好きなところがあった。

故に下心は一切なくただただ観光をしていただけだったのだ。

「えつと、その…………」

小糸の次の質問、つまりは今恋人がいるのかどうか。

箱口令を破る禁句である。

聞いてみたいという感情と聞いてはいけないという感情が小糸の中でせめぎ合つていた。

故にその次の言葉は中々吐き出されない。

「そういえば、小糸にと思つて買つていたんだよ」

ふとプロデューサーは思い出したのか、助手席の前にあるグローブボックスを指して、そこ開けてみると小糸に言った。

小糸は首を傾げつつ開けてみると、そこには花柄がプリントされた紙袋があつた。

「わあああ………… ぷ、プロデューサーさんっ、これ…………！」

「ははは、その様子だと喜んでくれてるみたいで良かった」

目を輝かせる小糸にプロデューサーは頬を緩ませる。

小糸の小さな手の中の紙袋には様々な種類の飴がたくさん入つて

いた。

普通の飴玉や断面が柑橘類や花の飴、四つ葉のクローバーを彷彿とさせる飴、千歳飴やアニメでよく見る棒付きキャンデーまで本当に様々だ。

見るだけで目を楽しませる鮮やかな色彩に小糸は夢中になっているようだ。

「見た感じ小糸が好きそうなのと俺が美味しそうだなって思ったの買ったんだ。ちなみにその薬草入りのど飴が一番人気なんだってさ」プロデューサーの言葉は果たして小糸に届いているのだろうか。

283プロダクションで生粋の飴好きの小糸は目の前の可愛らしい飴たちに夢中で気づいていないようだった。

そんな様子の小糸にプロデューサーは苦笑しつつも、とても買った甲斐があったなと手応えを感じていた。

「プロデューサーさんっ、ありがとうございます！ え、えっとお代を……」

「いやいやいや、そんなの要らないって。俺が勝手に買っただけだし、気にしないで」

「で、でも……」

しかし納得の行かない様子の小糸。

律儀な彼女のことだから納得させるのも少し難しいかなとそう一瞬だけ思ったが、プロデューサーはすぐに解決策を出した。

「じゃあさ、その飴たちは俺たち専用の飴にしようか」

「専用、ですか……？」

「そう専用。俺たちだけが食べられる飴。勿論小糸は好きなききに食べていいけど、俺が食べたくなったら俺はその都度小糸から貰う感じで」

小糸は最近というより少し前からであるのだが、プロデューサーの面倒を見たがるケースが増えてきていた。

例えば事務所では珈琲を淹れたり、外であれば飲み物をプロデューサーに用意していたり、乾燥して手がカサカサになったときはハンド

クリームをスツと出したりと出来る女ムーブをカマしている。

プロデューサーは考えたのだ。

明らかに小糸にとって見たらメリットはなく、面倒事を増やしているとしか言えないこの提案は逆に彼女の琴線に引っかかると。

恐らく9割方はこれで行けると謎の自信がプロデューサーにはあった。

「わ、わたしがプロデューサーさんに飴をあげる……………」

小糸は思案しているのか少し固まる。

その表情はいつにも増して真剣であるように見えた。

「分かりました。プロデューサーさんの言う通り、この飴はわたしたちだけのものにしましょう」

そして数瞬の時を経て、プロデューサーの提案は受諾された。

案の定、プロデューサーの読みは的中したのだ。

「よし、なら決まりだね。じゃあ早速その黒糖味の……………」

「だからプロデューサーさんは今後、飴はわたしから貰ったもの以外は食べないで下さいっ」

何故にそうなるとプロデューサーは即時に思い、小糸の顔を見る。

いつも通りの小糸なのは間違いないのだが、何かが違う気もする。

そう、いつもの小動物めいた真ん丸な顔に丸い目。

瞬きせず、しっかりとプロデューサーの顔を捉えている。

「小糸ー？ どうしたんだー」

「プロデューサーさんが言ったじゃないですか。この飴がプロデューサーさんとわたしの専用の飴だって。だからこの飴たち以外は食べちゃダメです。大丈夫です、無くなりそうになったら今度は2人で買いに行きましょう」

「いや、別にそんな重い誓約は課してないんだけど」

「あ、大丈夫ですよ。わたしも今度からは飴はここからしか食べませんっ。たまに円香ちゃんくれたりするんですけどそれもすっかり断ります」

だから安心してくださいと小糸はそう言った。

あれ、何かがおかしいぞ。

「いや、円香からの飴は素直に受け取ってやってくれな」

多分あの子表面上は顔に出さないだろうが、めちやくちやショックを受けると思う。

下手をしたら泡を吹いて倒れてもおかしくはない。

「で、でもそれだとプロデューサーさんがわたし以外の飴を食べることになっちゃいます……それは嫌ですっ」

「……うーん、そうだな。でももし飴貰ったらしつかり断れるのかー?」

「びえっ……ぶ、プロデューサーさん……酷いですっ」

そして突けばやはりいつもの小糸が出るので恐らく断ることは難しいだろう。

円香以外にも幼馴染メンバーからお菓子を貰ったり、何なら他のグループメンバーからも貰っていたりする。

いくらノクチルのメンバーがプロダクション内で特別他のグループと関わりが少ないとは言え、多少の関わりは勿論あるのだ。

「ははは、でもさ。俺的に無理する必要ないからみんなに愛される小糸でいて欲しいんだけどなー。それが原因で喧嘩してる小糸は見たくないよ」

少しずつ動き出す渋滞をゆっくりと車を進めいてくプロデューサー。

車内には音量抑えめのラジオがニュースを伝えており、その言葉の後、静まり返る。

続く小糸の言葉をプロデューサーは待っていた。

「そ、そうですか……?」

「うん。というか小糸にそういうのは似合わないよ。ドラマや映画の配役ならともかくとしてさ」

らしさの押しつけはよくないというのは分かっている。

これはプロデューサーの彼女への育成方針に抵触していた。

しかし、状況的に少し不穏気な小糸を変な方向に向かわせるのはプ

ロデューサーとして、いや大人として抵抗があったのだ。

こういう状況を過去にプロデューサーは経験している故の対応であった。

それが果たして正常に作用しているかは別として。  
きつと、それは間違つてはいないはずだ。

「だから取り敢えず飴食べようか。俺黒糖味のやつね。小糸はその蜜柑味のやつ良いんじゃないかな。レコメンドって感じで置いてたし」  
プロデューサーはそう言うと、左手を小糸の方に差し出し、飴を待つ。

小糸はムーっと少し悩みながらも、袋から黒糖味の飴を出す。

「……ぶ、プロデューサーさんっ、あーんしてくださいっ！」

「……小糸？」

何だか結局いつもと様子が少しおかしい小糸に疑問符を浮かべつつも、その表情を見る。

恥ずかしいのか頬を赤く染めており、目も何だか真剣であった。

そんなに恥ずかしいのならやらなければ良いのになどと無粋なことを彼は言うことはない。

「せめて、わたしが食べさせてあげます！ それに運転中ですしっ」

何がせめてなのかはよく分からないし、運転中とは言え、渋滞でほぼ動いていない状況であるので手渡し程度何も問題はない。

まあ、それも彼女に対して言うことはないのであるが。

「それなら仕方がないね——飴、プリーズ」

「は、はいっ、プロデューサーさん。飴どうぞっ……です」

小糸は少し身体を運転席の方へ向けると、プロデューサーの口に黒色の飴玉を入れた。

ころころと口内で転がすと、優しい黒糖の甘みが広がっていき、どこか懐かしさを感じる味であった。

「小糸、ありがとな」

「……いえ、はい、どういたしまして……」

小糸は緊張していたのか少し挙動不審であったが、どうにか心を落ち着かせるべくプロデューサーの言っていた蜜柑味の飴玉を口に放り込んでいた。

その甲斐あつてか、小糸の精神の波は大荒れだったのがまるで風のように静まってく。

「結構、美味しいな。この飴」

「は、はい。蜜柑のも優しい味がして美味しいです……」

そんなこんなで車内に一瞬流れた不穏な空気は完全に消え去り、平穏を取り戻す。

2人はその後、ロケ中の話や今後の仕事の話、更には最近あったプロデューサーの出来事や小糸の学校での出来事を話しながら、まだまだ続くであろうこの渋滞の道を進んでいく。

皆から貰ったグッズ案をまとめたけど、厳しいのが何個あるからもう一回考えてもらうかー。

Tシャツやスマホケース、ピンバッジはともかくお菓子とか食品系になると流石に間に合わないし食品衛生的にも厳しい。

時間がないので急ぎにはなってしまうが、仕方ないとプロデューサーは頭の中で考えながら最近の日常エピソードを小糸へ向けて吐き出していた。

流されちゃったけど、みんなからのを断ればプロデューサーはわたしがあげた飴以外食べないってことで良いんだよね。

出来れば飴以外にもプロデューサーの口に入るものは管理したいと思う小糸であったが、それをすぐに実行出来るとは思っていない。

だからこそ、小さな一歩ではあるもののゆっくりと歩みを進めてい

くことを決めた彼女。

取り敢えず、よく飴をくれる円香からの飴を断れるようになろうと  
そう決めた小糸であった。

## 旺裂仕舞學校編Ⅰ

「やっぱ大崎姉妹って良いよなー」

退屈な授業を乗り越えて迎えた休み時間。

購買で買った焼きそばパンを教室の後ろの席で食べながら、中学からの腐れ縁の友人は染み染みとそう言った。

既にパンは1/3は胃の中に収まっており、持って後1分と言ったところだろうか。

サッカー部に所属しており、髪型もスポーツ刈りのその男は成長期に加えて運動部ということもあって燃費が悪かった。

「……いきなり何だよ」

「いや、大崎って可愛いよなあつて……マジでさ」

この男が突拍子もなく、突然そういうことをカミングアウトするのは昔からであるので、別段おかしいことはないのだが、やはりそんなことを言われると少し驚いてしまう。

「……天下の売れっ子アイドル様だからだろ」

「いやいやいや。分かってないなお前って奴は」

ボソリとその男の与太話に付き合うことにした彼は紙パックのオレンジジュースを飲みながらそう言葉を投げた。

それに対して男は焼きそばパンを平らげて、包み紙を丸めながらやれやれと呆れている。

「つかさ、大崎姉妹がアイドルになる前から俺たちは知ってただろ？ その時からあいつらは男子の中じやめちやくちや人気だっただろ。てかお前は中学の頃から好きだっただろうが」

「ちよつ、止めろよお前さ……！」

そしてさらなるカミングアウトをされた彼はそのスポーツ刈りの頭を反射的に叩こうとする。

しかし文化部で運動も苦手な彼の反射神経では男の反応速度に付いていけないわけもなく、その手は虚しく空振りしていた。

「……そういうところだぞ、お前。そうやってすぐ手が出るの」

「うるさいな、お前が変なこと言うからだろ」

華麗にその攻撃を回避した男は半目で彼を見ていたが、彼は行き場を失ったその手をそのままオレンジジュースへ持つていきストロークから吸うも既に中身は空である。

「へいへい、そうですねー。っーか、俺は兎も角ってというか、本当に良いのか？」

「…………… どういう意味だよ、その質問は」

男は軽く溜め息を吐くと半目で彼を見る。

その表情はどこかその目線の先である彼を哀れに思っているように見えた。

「どういう意味って、お前さ。大崎に告白するって言って入学した時から言っただろうが。どんだけ時間経ったと思っただか」

「…………… っっっ。マジで余計なこと、言うなって、言ってる、だろう、がっっ！」

彼の貧弱な打撃が男を襲うが、机越しで微妙に届かずにまた空回りしている。

その打撃を本当に哀れだと悲しんでいる男は紙パックのコーヒール牛乳を飲み、トンと机へ置いた。

何故、彼がこんなに暴れてしまっているかと言えば、ここは教室で少し離れたところに件の大崎姉妹の一人である大崎甘奈が居るからである。

彼女はクラスどころか学校の人気者で常に様々な人たちに囲まれており、笑顔を振りまいていた。

容姿は完璧なおシヤレ美少女。

少しギャルっぽく近寄りがたいかと思えば誰にでも優しい性格で、その笑顔に何人の男たちが魅了されてきたことか。

「俺はこう見えて彼女居るから半ば冗談でこんなこと言えるけどさ、マジで早く行動しないと本当に手遅れなるぞ」

男には彼女がいた。

こう見えてサッカー部では副部長を勤めている彼は異性からも話しやすく面白いと評判であり、割りとモテていた。

そのため、他校のバドミントン部であるが中々可愛い彼女がいた

(先日彼女の誕生日に夢の国へ行ってきた言っていた)。

勿論、大崎には到底及ばないのではあるがと、内心で男からそう話された彼はそんな風に思ってはいたが。

そう、そんな持つている側の人間であり、昔からの幼馴染であり、腐れ縁であり、一般的には陰キヤと言える自分と関わりを持つてくれている男からの真剣な訴えに彼は自身のことを考えざるをえなかった。

「……分かってるよ、そんなの」

しかし出てくる言葉はそれだけであった。

彼は小学生のときから大崎という少女に惚れていた。

小学4年生のある放課後。

宿題を忘れ、居残りでそれを終わらせて帰ろうとした時だ。

一人大崎は彼女の教室で何かを探していた。

必死に何かを探している彼女の姿を見て、ただ単純に困っているのだと思い、声をかけることにした彼。

今とは違い、小学生のときの彼はあらゆる意味で強かったのだ。

彼女は彼に声を掛けられると、事情を話してくれた。

どうやら大事にしていたキーホルダーをどこかに落としてしまったとのことで彼女は泣きそうに見えた。

そこから30分程教室や別の部屋を探し、彼女の落としたとされるキーホルダーを遂に発見することができた。

それを彼女に報告した時は少し泣きながらに喜んでいた。

その時だ。

彼女に一目惚れしてしまったのは。

彼にとってその短くも彼女と二人きりで過ごした時間は、今後過ごしていくであろう人生の中で深く記憶に刻まれた。

もつともその日以降彼女を意識しすぎて高校生になった今でも話しかけることすら出来なくなってしまうたのであるが。

それが彼の甘くも苦い、今まで続く初恋のエピソードである。

「……あのな、大崎はアイドルになったんだぞ。ライブは学校の奴らだけじゃないんだ。芸能人とかスタッフとか、前よりもお前の告白成功率は下がってるんだぞ」

そんな強敵達相手に今のお前がどうか出来るのかと、男は言う。それは彼の心に酷く突き刺さっていたが、そんなことは言われるまでもなく分かっている。

今の自分がキラキラした芸能界の人間の足元にも及ばないことも。以前から言われていたのだ。

さっさと告白しないと手遅れになると。

それはこういうことなんだと、最近理解することができた。

「…… 良いんだよ、もう。無理だつてわかっているから」

「…… お前、マジでそれ言ってるのかよ」

そんな臍抜けた彼の言葉に男は呆れつつも、その瞳を見て何かを悟ったのかそれ以上何も言わなくなってしまうた。

その後、次の授業は何だったかや最近始めたアプリゲームのリセマラでTier1のやつが当たったなど他愛もない話をして昼休みは終わった。

彼の目線の先には時折、楽しそうに笑う大崎が映っていたが。

「…… あーあ。マジでこれめんどくさいな」

放課後の教室で彼は忘れていた英語の宿題に手を付けていた。

あの英語教師曰く、終わるまで帰宅するなどのことでこれは監禁になるのではないかと思っていた。

教室には放課後ではあるものの、まだ生徒は何人も残っており、皆お喋りに講じている。

そんな彼らを傍目に一人黙々と課題に手を付けていた彼はほんの少しの敗北が襲っていた。

「甘奈ちゃん、珍しいね。今日はお仕事お休み？」

「うん、そうなの。あ、でも事務所にはこの後行かないと行けないんだけどね」

そして教室で一際目立つ一輪の花。

大崎甘奈であった。

「そうなんだー。あれそうすると甜花ちゃんは？」

「甜花ちゃんは別のお仕事があったから先に事務所にいるんじゃないかな」

なるほど、だからあの大崎甘奈とは真逆の人種であり、彼女が一番お世話を焼いている人物であり、この時間になるといつも側にいる大崎甜花（姉）はいないのか。

大崎甜花とは彼女の双子の姉であり、甘奈と合わせてこの高校の2大人気と言っても過言ではない人物だ。

性格は甘奈と違い、どちらかと言えば彼のような陰キャよりと言えるものであまり男子達と会話をしているところは見たことがない。

女子とでさえそこまで会話をしているかと言えばそうでもなく、傍らにいる甘奈を介してのものを時偶見かける程度である。

しかし、コミュ障と言ってもいいのかもしれないがそれでもその容姿と甘奈の姉であるという点で彼女はある種特殊なポジションを確立していた。

「いやーごめんね。なんか甘奈ちゃんと甜花ちゃんいつも一緒にお仕事行ってるイメージだからつい」

根掘り葉掘り聞くようで申し訳ないと、割合甘奈と話しているクラスメイトの女子はそう言った。

確かに芸能界の仕事だから言えないこともあるだろうから、その辺り気を使わなければいけないのだろう。

甘奈は全然気にしてないよーといつも可愛らしい笑顔でそう言うのと、課題に追われる彼の心は少しだけ潤った。

「……そうだ、甘奈ー。最近あの人見かけないけど、どうしたのー？」

髪を金髪に染めた明らかギャルなクラスメイトは少しニヤニヤしながらそう問いかけた。

あの人、という単語に彼は少し不穏な空気を感じていた。

「あ、そうだよ。甘奈ちゃん。あのイケメン。前は学校近くまで車で迎えに来てくれてたよねー」

もう一人のかなり小柄な黒髪姫カットのクラスメイトはスマート

フォンを弄りながらそのギャルに続いた。

イケメンというさらに追加されたその単語に彼の課題を進める手は止まってしまっていた。

——学校まで車で迎えに来てくれるイケメン？ 誰だよ、

それ。俺知らないんだけど。

「うん、前に見かけたけど、本当にカッコいい人だったわー。オトナの男って感じで。てかあの人って芸能人とかじゃないよね？」

「てかてか、もしかして甘奈ちゃんの彼氏ー？ 良いなく。あたしの彼氏ガキっぽくてさー」

甘奈の友人達はそうやってやいのやいの話しているが、彼の心境は嵐の如く荒れていた。

芸能人レベルの容姿のイケメンがなんで甘奈の迎えに来るのだろうか。

もしかして、本当に付き合っているからそういう風に迎えにきていたのか。

いやそもそも未成年と交際するような大人がかっこいいのか。

そんなのただのクズではないか。

いやそれよりもそんなのスキヤンダルだろ、アイドル生命的に終わりだろうが。

「ぶ、プロデューサーさんのこと……？ 違うよ、プロデューサーさんは私をプロデュースをしてくれてる人で、芸能人じゃないよ。でも、そうだよ、プロデューサーさん、かっこいいよね…… えへへ」

——なんでそんなに嬉しそうなんだよ。褒められたのは自分じゃないだろ。

「あれ〜？ 彼氏は否定しないの甘奈〜」

「え、マジで!? 本当に付き合ってるの？」

「…… ははは、付き合っていないよー。プロデューサーさん、とつても大人だし…… それにいつも私だけじゃなくて同じ事務所の子たちの面倒も見ているから」

—— なんて残念そうな顔をするんだよ。まるで本当は付き合いたみたいいなそんな顔だろそれ。

「え〜でもでも〜。あのめっちゃくちやモテそうだよ〜。早く行かないと取られちゃうんじゃないの?」

「マジそれ。相手が大人なら尚更こっちからガンガン行かないと無理じゃね?」

このクラスメイト達は頭が悪いのではないか。

アイドルである甘奈にそんなことを勧めやがって。

そもそもそのプロデューサーという男が本当にまともな人間なのかも分からないのに。

何なら甘奈はそれに騙されている可能性だってあるのだ。

芸能界は所謂そういう胸糞の悪いことだって横行している可能性だってあるのに、誰が甘奈を守るのか。

本当に友達ならそんなこと勧めることは絶対にしないはずなのに。

「…… やっぱり、そう、思っちゃう、よね……」

—— だから何だよその表情は。

そんな顔、今までしたことなかっただろ。

「ああいうマジで出来るタイプの男は知らないところで声かけられまくりだよ絶対。彼女になる人苦労するよ〜」

「でもでも、そういうのひっくるめて好きになっちゃったんなら仕方ないよね。お姉ちゃんの彼氏さんも凄いいモテるからそこは大変って言ってたよ。あいつは確かにかっこいいけど本当に良いところは外面じゃなくて中身なんだよってすごい惚気けてきたけどね〜」

お前の姉の惚気は至極どうでもいい。

それよりも件のプロデューサーという男について俺は知りたいのだ。

「そう、なんだ…… そうだよね。プロデューサーさんやつぱりモテるよね…… 分かってたけど」

重く溜め息を吐く甘奈に周りのクラスメイトはきやーホの字だホの字だーと騒ぎ立てる。

今この教室には課題をしている彼に甘奈と二人のクラスメイト、他数人の女子のグループがいるくらいだ。

もしこの教室に男子が居たのなら彼みたいに関心したいに彼女たちの会話に耳を集中させていただろう。

本気でそんなよく分からない男に惚れてるのかよ。

彼の心はドス黒い何かに染まっていた。

いや空洞の黒というべきか。

俺の方が甘奈のことを昔から知っているのに。

プロデューサーさん、最近とっても忙しくてね、送迎もあんまり出来なくなっちゃって。でもプロデューサーさんは本当にごめんなって申し訳なさそうに言ってくれて、私も気にしないで大丈夫だよって言ったんだけど、もし何かあったらすぐ言ってくれよって言ってくれて、それでプロデューサーさんが……」

そして始まったのはあの甘奈からは信じられない程の惚気話であつた。

大崎甘奈はめちやくちやモテるのだ。

同級生、上級生、下級生関係なくモテる。

しかし今の今まで誰かと付き合っているという情報は一切なかった。

それ故に彼女がアイドルになると聞いたときもある種安心感があったのだ。

甘奈はそんな簡単に誰かと付き合ったりしないけど、だが実際はどうか。

彼女はプロデューサーという年上のまだ会った時間で言えばきつと一年程度（アイドルになってからの時間を踏まえれば）で、浅い関係だ。

しかも甘奈はまだ未成年だ。

そういうのはまだ早い。

「きゃーそうなんだー！ 超イケメンじゃん！」

「てかてか甘奈ちゃんとかこういう話できてマジで嬉しいー！」

——こいつら全員マジでこのヤバさを理解できてないの本当に頭悪いな。

女子というのは他人の色恋沙汰が大好物なのだ。

そこに女子高生というステータスが付与されればそれは尚更のものとなる。

しかもそれが高校一番モテて、色恋と縁もなく、今を輝くアイドルの少女となれば関係者であれば誰だって気になるものだろう。

「…… あっ、ごめん。電話だ」

するとスマートフォンを取り出したのが甘奈であった。

画面に表示された名前を確認したのか、彼女の表情は一変して目がキラキラと輝いているように見えた。

「も・し・か・し・て〜。愛しのプロデューサーさん？」

「ええ、マジで〜？」

そしてそんな甘奈の様子を微笑ましげに見る友達2人は早く出てあげなよと、促している。

「ちよっと、電話してくるね」

気のせいかな早足で甘奈は教室を出ていく。

その後姿を手を振って送る友達2人はニヤニヤしていた。

「いやー甘奈もついに恋、ですかー」

「寧ろ遅かったような気もするけどねー。でも幸せそうであたし的には無問題って感じー」

甘奈が席を外した後も彼女たちは会話を続けている。

「どうやら茶化しや冷やかしではなく、本当に甘奈のことを喜んでいようだった。」

「てか、ねえお前さあ。さっきっから何こっちジロジロ見てるわけ？」

そして甘奈の友達二人のうちの片割れ、金髪のギャルはギロリと視線を課題に手がつかなくなっていた彼に向いた。

「甘奈は優しいから何にも言わないけどさ、マジで見すぎだよー。もしかして自覚ないの？」

小柄な黒髪姫カットの女子は冷めた表情で彼を睨んでいた。

「は、はあ？ い、意味分かんないけど……」

「いやさっきから甘奈のことずっと見てたよね。ジーツと、さ。甘奈マジで困ってたからね」

「み、見てねーし……」

「見てたよねーずっと。途中であたしたちが席を移動して間に入っただの分からなかったのかな？」

確かに話しているときに謎に席移動はしていたが、ずっと見ていたなんてことはない。

彼はそう思っていた。

「……ねえ、それ私達もずっと気になってたの」

すると横から入ってきたのは教室にいた女子グループの一人であつた。

「あんたマジで自覚ないんだったらやばいと思うよ」

「大崎さんを見る目、本当に怖かったよ。瞬き一つしないっていうか」  
他のグループメンバーにもそう言われ、どうやらこの教室には彼の味方はいないようだった。

「お前、どうせ甘奈のこと好きなんだろう。でもさ、そういうのマジやめな。本気でキモいから」

「うん。まだ甘奈に告白して玉砕するまでだったら良いよ。でも自分

の好きな相手が困ることとか嫌なことはしないのが普通でしょ？」

「は、はあ!? ベ、別に、好きじゃねーよー!」

「うつき。そういうの小学生みたいだからやめろし。バレバレだろ」

「てかー大きな声出すのは本当にやめて。女の子ってそういうの本当に怖いって感じるんだよ」

「い、意味わかん」

そして彼は気づいた。

周囲の視線に。

先程の女子グループとその他数人の女子たちは彼を心底ドン引きした表情で見っていたのだ。

その瞳には恐怖や嫌悪、軽蔑など様々なものが含まれているように見えた。

「な、何なんだよ!!」

「だからさ、そうやってすぐ大きな声出すのやめろって言うてんじやん」

「…… ちょっとやばいかも。甘奈のバッグ持って合流しちゃおう」  
最初に指摘した彼女達も心底軽蔑した表情で彼を見ていた。

プラスの感情などそこには一切なかった。

「お前らあいつのこと全然分かってない癖に!!」

そう言うて彼は課題を放り投げて気づいたら教室から出ていた。

甘奈はそんなこと言わないのに。他の女はマジで糞だ!

彼はしゃがみ込むそうになるの抑えて走り、1階へ向かう階段の踊り場に足を踏み入れる瞬間、その足は止まった。

「えへへ、もうっ、プロデューサーさん。調子良いんだから」

その声は甘奈ものだった。

電話の相手は件のプロデューサーという男。

彼女の表情は今まで一度も見ることがない笑顔であり、その声もとても甘いもので彼の心をかき乱した。

「甘奈ね、今日英語の課題出したら文章の訳し方が一番良いですねって褒められたんだ」

——甘、奈？ そんな一人称であいつが話しているところなんて一度も見ることがない。

「え、プロデューサーさんも褒めてくれるの？ えへへく……じゃあ、今度で時間ある時で良いから、またあのカフェに連れてってくれる……？ その、2人きり、で……」

頬を赤く染めて恐る恐る告げる彼女の姿。

それは誰が見ても間違いなく、文句の言いようがない程に。

——恋に落ちてるじゃないかよ、こんなの!!!!

「え、ほんと？ 連れてってくれるの？ えへへ、甘奈との約束だよ。プロデューサーさん」

彼の心はズタズタに引き裂かれて、今にも消えてしまいそうだった。

自分が惚れた女の恋する表情に、心臓は潰れ、脳は焼き尽くされそうだ。

彼は今、完全に思考停止状態で只々そのやり取りを聞くことしか出来なかった。

「……うん、うん。じゃあ、また事務所だね。バイバイ、プロデューサーさん」

そう言っただけで電話を切った彼女は足取り軽く教室へ戻っていく。

そんな彼女に彼は話しかけることは出来なかった。

彼女もすれ違う彼を一瞬だけ見るとすぐに目を逸らし、歩いていく。

彼はもう灰燼と化していた。  
心が。

「もう、終わったわ。何もかも。あーあ、糞みてーだわマジで」

そして彼はそれ以降、二度と学校へ来ることはなかった。  
一人空いた教室の席。

誰も気に留めもしなく、気づけばまるで最初からいなかったかのよう  
に高校生活という時間は過ぎていく。

以上が大崎甘奈に狂わされた一人の哀れな男の話。

誰しもがなりうる悲しい話。

これはこの広い世界のその一端である。

## 大紅蓮無限地獄編Ⅴ

283プロダクションの事務所。

一般家庭においてリビングに該当するその場所はアイドルたちの溜まり場になっている。

基本的には中央にドンと鎮座している長方形のテーブルとL字のソファで雑談をしたり、特に何をするでもなくスマートフォンを弄ったり、読書をしていたりと各々自由に過ごしていた。

皆多忙であり、全員が集合することそうそうないのだが（そうなる」と事務所がかなり手狭になってしまおうが）、それでも多くて4、5人いる場合は結構な確率である。

そんなある種皆の憩いの場であるそこには現在2つの人影があった。

「……………」

「……………」

三峰結華と黛冬優子。

アンテーカーとストレイライトのメンバーである。

互いにソファに座ってはいるが、距離にして4人分程のスペース。別段仲が悪いわけではないのが、そこまで絡みがあるわけでもなく、ややプラス寄りの仲といったところだろうか。

この二人きりになった今のシチュエーションに際して、積極的に声をかけて話すかと言えばそうでもなく、自由に過ごしたほうがお互いのためと判断したのであろう。

そのため2人は沈黙を貫き、手元のスマートフォンに目を向けていた。

SNSを更新したり、多種多様な眩きを見るなどしていた2人であったが、それでも少し経てばやることは段々と無くなってくる。

欲しいグッズやお気に入りブランドの新作なども調べて見ているのだが、ついぞ限界はやってきた。

「…………… ふゆゆ、そのスカート可愛いね。どこのやつ？」

「ありがとう♪。えっとね、このブランド〜」

最初に話かけたのは結華であった。

冬優子の履いていたスカートを褒めつつ、牽制といったところかジャブを仕掛ける。

彼女は笑顔で礼を言うと、スマートフォンを操作してそのスカートのブランドの公式サイトを見せてきた。

しかしそのサイトを見た結華はある違和感を抱いていた。

「可愛いね。でもなんだかふゆゆにしては珍しいチョイスだね。いつもならなんかこう、もつとガリーな感じっていうか」

――量産系な感じだよね。

結華の口からその言葉は出ることはなかった。

別に自身のことを棚に上げて他人のファッションに対してとやかく言うつもりなどない上、量産系というジャンルを悪く言うつもりもない。

ただジャンルとしての名前がそうになっているからそう呼ばざるをえないためである。

結華的には似合っていれば別段問題ない上、実際冬優子にはとても似合っていた。

しかし、今日彼女が履いているスカートいや、全体のファッション。結華が事務所に来てからずっと抱いていた違和感の正体。

ジャブとは言ったが、それは結華にとってストレートに近いものもあつた。

「今日は何だかいつもよりシツクだね。いつも可愛いと思ってたけど今日も凄い可愛いなって思ってたさー」

「えーありがとー♪。たまにはこういうのもありかなーって思ってた。結華の抱いていた違和感。」

あの黛冬優子が自身のファッションの方向性をそんな簡単に曲げるのだろうか。

彼女のファン層は一見男性が多そうにも見えるが、実際は女性の方が多い。

理由としては彼女の精神性によるものだろう。

自分の着たいものを着て好きなようにファッションを楽しむとい  
うある雑誌のインタビューで彼女が答えたその言葉は、若い女性を中  
心に指示を集めた。

冬優子のファッションは世間一般的にはある種着るのが難しいと  
も呼べるジャンルで着てみたいと思っても手が出し辛いものがある。  
しかし、冬優子はそんなこと一蹴するかのようにこう答えてみせ  
た。

誰も責任なんて取ってくれないんだから好きなこと  
を好きなようにやらないと損です♪

めんどくさいことなんて考えないで、思いっきり今を  
楽しんだ方が良いですよ♪

そのインタビューから若い女性を中心に指示を集め、彼女のSNS  
のフォロワーは倍増していた。

そんな彼女が、だ。

他のものから簡単に影響を受けるのだろうか。

確かに今日の彼女の服装も地雷系と言えるジャンルに近いのであ  
るが、履いているスカートだけ少しシックというか大人なデザインに  
なっていた。

まるでそのスカートに合わせるために他の服装を調整したかのよ  
うなそんな様子だ。

普段であれば結華はここまで他人のファッションを気にすること  
などはなく、ファッションの話から話を派生させて相手とお喋りに講  
じることができるのだが、今日の彼女は停滞していた。

周囲と別け隔てなく接することができると彼女は観察を得意として  
いた。

そのため、感じた冬優子への違和感。

看過することが出来ないその違和感。

どうしてか嫌な予感が頭を過ぎるその違和感。

今日事務所で冬優子に会った時から彼女の心臓は早鐘を打っていた。

「でも、それを言うなら結華ちゃんもいつもと少し違うっていうか」

——プレツピー寄りっていうか、普段そんな格好しないでしょ。

彼女の好きな色と言うべきか。

パーカーやキャップでカジュアルに決めることもあれば、プレツピースタイルをポップな雰囲気落とし込んでお洒落に着崩しているイメージが強いのだが今日の服装はどうだろうか。

全体的にシックな装いというか、グレーのチェック柄のミニのタイトスカートにタートルネックの黒のニットセーター。

膝には脱いだ赤のカーデイガンが置かれており、しかも今日に限ってはメガネを外して髪も下ろしていた。

「いやー三峰もたまにはこういう格好も良いかなと思いましたが」  
明らかにおかしいのである。

彼女の普段の傾向から考えれば見かけないスタイルであった。

冬優子から見て、結華のファッションにはこだわりが垣間見えていた。

これという芯が決まっており、ズレることのないものがあつただ。

それであるのにこのいつもと違うファッションの方向性。

冬優子は普段周りのファッションなど気にすることはなかった。

好きな服を好きなように着れば良いと思っっているし、指摘することもない。

しかし、冬優子が今日事務所に来て彼女に感じた違和感がそれを許さないでいたのだ。

男、か。

彼女たちの頭の中でほぼ同時にそのワードが過ぎったのである。いや次の瞬間に別のワードをそれを塗り潰していた。

あいつ（あの人）か。

お互いの頭の中では同一人物が優しい笑顔を浮かべて彼女たちに笑いかけていた。

既に彼女たちは答えをえていた。最早聞かなくても分かる。

あいつ（あの人）の好みってやっぱり。

互いに一体どこで染め上げたのか知らないが、事務所に普段と違う服装で来ている。

しかもスケジュール的に他のアイドルたちは仕事が終わったら直帰になっており、事務所に立ち寄る必要があるのはこの場にいる2人だけ。

事務員である七草はづきは現在少し出かけており、戻ってくるまで後30分といったところか。

「……………ところで結華ちゃんはこの後はどうするの？ 今日って午前中で上がりだと思ってたから」

結華は午前中にあつた雑誌のインタビューで今日の仕事は終わりではなく、そのまま直帰して問題ないはずなのである。

「……………えーそれを言うならふゆゆだって、もう上がりじゃないのかなーって」

冬優子も午前中にあつたファッション誌の撮影で今日はもう仕事は終わりのはずであった。

直帰可能であれば互いに事務所に戻ってくる理由はないのである。「ふゆはちよつと確認したいことがあってー」

「三峰もちよーつと確認したいことがあってさー」  
嘘である。

2人が今日中に確認しなくてはいけない事項は全くもってなかった。

というより、確認事項があるのならCHAINでもメールでも利用すればいいだけの話である。

—— やっぱりね。

そして両者の思考はシンクロしていた。

いやこの場合、どこの誰でも理解することはできるか。

—— あいつ（あの人）を待つてるのね（待つてるのかー）。

この2人は所謂同類であった。

特定の人物以外には猫を被っている冬優子と誰にでも別け隔てなく接することのできる結華。

どちらもサブカルチャーに詳しいというところがあつたが、それよりも似ているのはその状況判断能力である。

周囲の空気を瞬時に察知して理解するというそれは、他社と軋轢を生まないという点ではとても優れたものであつた。

冬優子に関しては自分を貫くというところである種矛盾したそれを内包しており、それらを共存させて崩壊しない社会性を保有していた。

それ故に結華もそうであるが互いに苦しんでいる部分はある。

しかしそれも今の彼女たちにとっては些細なことであつた。

「戻りましたー。あれ、なんでいるの?」

そして、その絶妙なタイミングで戻ってきたのは件のプロデューサーだった。

直帰しているはずの彼女たちが事務所にいることに疑問を抱くのは至極当然のことである（とは言いつつもプロデューサーに会うため

に態々事務所に戻ってくるアイドルは割りといえるのだが、結局帰ってくる時間がかち合わず会えない場合が多い。

彼はいつものスーツ姿にビジネスリュックを背負い、左手には某コンビニのビニール袋が握られていた。

彼が普段利用している事務所の近くのコンビニで購入したのであろう、見た限りペットボトルのコーヒーが入っているのは確認できる。

「おかえりなさいい♪ プロデューサーさん♪」

「おかえりーPたん」

そして、先程まで流れていた何やら不穏な空気は霧散し、2人は笑顔でプロデューサーを迎えた。

その動きもとてもシンクロしているように見え、彼は少しビビっていたが。

「プロデューサーさん、何でいるのって酷くないですかー」

「そうだよ、Pたん。こんな可愛い女の子2人に失礼じゃない？」

「ああ、いやごめんごめん。直帰だと思ってたからさ」

プロデューサーは自身のデスクまで行くと荷物を置くとPCを起動し、2人に対して謝罪をする。

確かに何でいるのというの言い草としては酷いなど自覚したからである。

「てか、2人とも。なんかいつもと雰囲気違うね」

そしてプロデューサーは2人の様子にすぐに気づいた。

というよりも事務所に入った瞬間に気づいてはいたのだ。

彼は相手の容姿に変化（この場合は髪型や服装、指先、化粧などを指す）に対してかなり敏感である。

何故ならすぐに相手を褒めるためであるのだが、この男はそれを無意識に行っているためそれが当たり前とさえ思っている。

「可愛い…… いやとても綺麗だね。似合ってるよ」

プロデューサーは2人の服装がいつもより大人な雰囲気纏められているのをギャップも含め、とても似合って良いと心の底から思っていた。

そのため、本心からの褒め言葉をごく自然な笑顔でそう告げた。

「……………」

「……………」

それを真正面からまとも食らってしまった2人はもう限界寸前であった。

可愛いと褒められることはあっても綺麗と褒められることはなかったからである。

彼はこういったことで嘘は絶対に言わないというのを理解しているため、それが完全な本心であることは明確であった。

そのため、2人の頬はまるで赤のチークを付けたかの如く染まっており、その言葉に何も返せないでいた。

これがもしスタッフや他の男性に言われたのならお礼を返して終わりなのだが、ことプロデューサーから言われるのはそれとは事情が違う。

彼の言葉は特別なのである。

プロデューサー1人から綺麗と言われるのとその他男性10000人から綺麗と言われるのは価値として月とスッポン、天と地ほど変わってくる。

お金持ちのイケメン男性と最高級レストランで食事を取るより、プロデューサーとファミレスで食事を取る方が2人いや283プロダクションの女性陣にとって圧倒的に価値があるのだ。

「てか結華。その服まだ持っていてくれたんだね。久し振りに見たけどやっぱり似合ってるよ」

プロデューサーのその一言に結華は顔を赤くしつつも、俯き目を反らした。

冬優子はその言葉に少しギョツとして結華の姿を確認した際に彼女が少しニヤニヤしているのを確認できた。

「…………… うん、Pたんが選んでくれた服だもん。大事にするよ。それに、先週言ってたじゃん。またあの格好の三峰見たいって」

「ああ、そう言えば」

プロデューサーは思い出す。

先週、結華とのCHAINのやり取りで以下のようなやり取りがあった。

プロ『そういえば今日の撮影の衣装似合ってたね。普段とは違う感じだ』 22:04 既読

結華『Pたん、褒め上手だねー。褒めても何も出ないのにー』 2:04

結華『……ほんと?』 22:05

プロ『どっちだと思う?』 22:05 既読

結華『もう! そういうところ!』 22:06

プロ『冗談、マジで似合ってたよ。怒らないで』 22:07 既読

結華『そういう冗談は女の子にはいけないのです。三峰だから良かったけど』 22:07

プロ『大丈夫、結華にしかしないよ』 22:08 既読

結華『Pたんは今度三峰にご飯を奢る刑です』 22:11

結華『Pたん? ご飯は冗談っていうかさ。別に本気で怒ってないし……ごめんねー』 22:25

プロ『ごめん、仕事の電話きてたから見れなかった』 22:31 既読

プロ『ご飯行こう。最近結華と行けてなかったし』 22:32 既読

プロ『てか行くからな? 拒否権は無しね』 22:32 既読

結華『うん、行く』 22:33

結華『前に行ったラーメン屋さん行く。味噌ラーメンが美味しかったところ』 22:34

プロ『ラーメンでいいの? 他になんか行きたいところない?』 2:34 既読

結華『うん』 22:36

プロ『どうしたの?』 22:37 既読

プロ『おーい』 22:45 既読

プロ『 41:19 』 23:26

結華 『ごめんね、Pたん。めんどくさくて』 23：26

プロ 『気にすんなー』 23：26 既読

プロ 『そうだなら久し振りに前に買い物行つたときに買ったあの服着てきてよ。ニットのやつ』 23：27 既読

プロ 『見たい。あとそれが罰ということで』 23：27 既読

結華 『Pたんはああいう感じが好きなの?』 23：28

プロ 『普段の結華の服装も好きだけどああいうちよつと大人な感じ?のけつこう好きだぞ』 23：28 既読

結華 『うん分かった、着ていくね』 23：30

結華 『惚れ直すなよー』 23：31

プロ 『へいへい。てか明日も早いんだからさっさと寝なよ』 23：

### 31 既読

結華 『わかつてるよー。Pたんもねー』 23：31

プロ 『りよーかい。おやすみ』 23：31 既読

結華 『ごめんね、Pたん。あとちよつとだけ』 23：35

プロ 『良いよー』 23：36 既読

結華 『34：33』 0：11

というやり取りが先週末にあつたのだ。

ちようどプロデューサーは事務所におり、オールスターライブに向けての準備を進めていたときだった。

普段から仕事をしながらアイドルたちとCHAINのやり取りをすることはあるのだが、ときたまこういうことがある。

プロデューサーのマルチタスクを持ってすれば仕事をしながら会話は造作もないことであつたのだが、流石にずっとスマートフォンを耳に持っているのは疲れるのでイヤホンを使用していた。

だからかと、自分で言っておいて忘れていたことを申し訳と思いつつも、あの結華が素直に着てきてくれたことに驚いていた。

改めて言われると恥ずかしがる結華のことだから着てくることはないと思つていたので（少し失礼ではあるが）。

「もう、忘れてたのー?」

「ははは、ごめん。今思い出した。うん、やっぱり似合ってるよ」  
やってしまったなどプロデューサーは後悔していた。

普段であればこんなミスはしないのであるが、最近のオールスター  
ライブの調整で疲れが出ているのかもしれない。

思い出したという言葉を皮切りに結華の表情に陰りが差したのを  
プロデューサーは見逃さなかったからだ。

「プロデューサーさん♪ ふゆのこのスカートどうですか?」

そして軽く空気になっていた冬優子は笑顔でそう詰め寄った。

目の前で変な空気を作られれば冬優子でなくとも嫌であろう。

「うん、可愛いよ。やっぱりそのスカート似合うね。俺のチョイスに  
間違いはなかったみたいだ」

プロデューサーは最早、後処理は未来の自分に託すことにした。

冬優子は笑顔を浮かべているが、その実不満と怒りが混ざっている  
ようだった。

不穩の結華と冬優子のダブルパンチである。

ご機嫌取りとすべきか、彼の手腕にかかっている。

「プロデューサーさん、服のセンスとっても良くてふゆもびつくりで  
したよー♪」

プロデューサーは思い出す。

そう、これも先週のCHAINでのやり取りのことであった。

冬優子『どのスカートが良いと思う?』22:07

冬優子『(ブランドのホームページ)』22:07

プロ『右の』22:08 既読

冬優子『あんたそれ適当じゃないでしょうね』22:08

プロ『適当じゃないよ。ちゃんと似合ってるの選んだし』22:0

9 既読

プロ『いや似合ってるってか、俺の好みだったな』22:09 既  
読

冬優子『知ってるわよ、あんた衣装決めるときもこういう系提案す  
るじゃない』22:09

プロ『なんだわかってんじゃん』22:09 既読

冬優子『まあ良いわ、あんたの選んだのにする』22:09

プロ『そつちこそ決めるの早くね？ もっと悩むところじゃないの

？』22:10 既読

プロ『冬優子の好み的には左のやつだろ』22:10 既読

冬優子『良いの！ もう充分悩んだし』22:10

冬優子『てか、あんた仕事の中よね。ごめん邪魔して』22:11

プロ『邪魔じゃないよ。そんなこと気にしないで』22:11 既

読

プロ『てか優しいね冬優子。どうしたの？ 悪いものでも食べた

？』22:12 既読

冬優子『はっ倒すわよ』22:12

冬優子『ふゆはいつも優しいでしょうが』22:12

プロ『わかってるよ。本当に冬優子が優しいのなんて』22:13

既読

プロ『いつも身に沁みてる』22:14 既読

冬優子『……何か食べたいのある？』22:15

プロ『なんでさ』22:16 既読

冬優子『今から事務所行くからついでに買ってくわ』22:17

プロ『やめなさい』22:17 既読

冬優子『もう家出たわ』22:18

プロ『引き返しなさい』22:18 既読

冬優子『嫌よ』22:19

プロ『03:57』22:24

冬優子『あんたってほんとバカ』22:25

プロ『バカでいいからさ』22:26 既読

プロ『今日は早く寝なさい。お肌云々かんぬん』22:27 既読

冬優子『子供じゃないんだから分かってるわよ』22:28

プロ『物分りがよくて嬉しい』22:28 既読

冬優子『……でもあんたも早く帰りなさいよ』22:29

冬優子『でないと本気で事務所行くから』22:29

プロ『はいはい帰りまーす』22:30 既読

冬優子『……今から行くわよ?』22:31

プロ『分かってるよ、もう少しでちょうどよくなるからそれで終わりにする』22:32 既読

冬優子『そう、なら良いわ』22:32

冬優子『じゃあ、おやすみなさい、プロデューサー』22:32

プロ『おやすみ、冬優子』22:32 既読

このようなやり取りがあつたのだ。

つまりは購入したスカートを見せにきてくれたということになる。可愛いところがあるなどプロデューサーは微笑ましいと思つていた。

ちなみにこのやり取りの後、プロデューサーが帰宅したのは天辺を過ぎた頃だった。

「センスっていうか、冬優子は何でも似合うからね。うん、可愛いよ」  
「……そういうところだつて言つてんのよ」

顔を赤くした冬優子はボソツと何か言ったようだが、プロデューサーの耳には届かない。

恐らく素が出たのだろうと彼は予測していたが、特に何も言わなかつた。

この事務所で冬優子の素を知っているのはプロデューサーとストレイライトのメンバーの計3人だけである。

故に下手に触れて素を暴露するのは良くないとの判断であつた。

「つとごめん、電話だ」

プロデューサーはポケットで振動したスマートフォンを取り出すと即座に仕事モードに切り替え電話に出る。

相手は広告会社の担当であつた。

「はい、はい……ええ、ありがとうございます。あと先程のメールの件なんですが」

打って変わって真面目なプロデューサーのその表情に2人は少し見惚れていた。

出来る男の顔である。

容姿が整っているもあつて尚更にその輝きは増していた。

「……ほんと単純」

冬優子はそんな彼の表情を見ただけで黙らされてしまう自分に軽く自己嫌悪しつつも、やはりかつこいいいと改めてプロデューサーのことを再認識していた。

こいつより良い男なんているのかしら、そんなことを考えてしまった思考を冬優子はすぐにかき消していたが。

「……はあ、Pたん」

好き好き好き好き。

溢れ出そうなその感情をどうにか抑え込んだ結華は息を吐いて心を落ち着かせる。

もう自分はこの人にダメにされてしまったと結華はある種諦めの境地にいた。

プロデューサー問題。

今事務所内を騒がせている大きな問題。

オールスターライブが決まったことにより、半年後に退職という危機は去ったがその後はまだ分からない。

はたまた恋人がいるのかどうかも。

だからこそ、そのリミットまでにプロデューサーと極限までに仲良くなつて彼を物にする。

それが283プロダクションのアイドルたちの総意であった。

そしてこの時プロデューサーに夢中になっていた冬優子と結華の思考はまたもやシンクロしていた。

もし、プロデューサーが仕事を辞めた後自分の家に転がり込んできたら。

それはただの妄想である。

夢小説の類に近いそれはサブカル件の知識に富んでいる彼女たちの中では普段からしていたことでもあった。

仕事を辞め、無職になったプロデューサーを自分が養うというその妄想。

『朝ごはん作ったから食べなさいよ。お昼代もそこに置いておくから』

『ごめんな、ありがとう』

『良いのよ。ほんとはお昼も作りたんだけど仕事抜けて戻れないし』

『ほんとにありがとな。あ、そうだ。はい、いつてらっしやいのハグ』

『……仕事終わったら爆速で帰るから待つてなさい』

『おはよーつて。あらあらまだおネムみたいだねー』

『……んー結華ー?』

『はいはい三峰はここにいますよー』

『……愛してるぞー』

『ははは、もう……三峰もあなたのこと愛してるぞー、なんて』

彼女たちの脳内CPUは毎晩そんな謎妄想に使用されていた。

故に寝不足になることもあったりなかったりなのであるが。

ちなみに妄想内のプロデューサーと現実のプロデューサーでは性格に相違があるので、これの真偽は不明である。

「はい、はい……失礼致します——ごめん、電話終わってたって、どした?」

電話を終えたプロデューサーが目にしたのは、彼から顔を反らして頬を赤く染めている2人の姿であった。

何があつたのかは聞かないことにした。

それはきつと2人の名誉に関わることだとプロデューサーは直感していたからだ。

——うん、広告も結構大々的になってきたな。

既に283オールスターライブの広告は都内を中心に至るところで見かけるようになってきた。

テレビから駅構内まで、盛り上がりを加速させるように侵食している。

ネットでもファンたちの間でも楽しみだと評判になっていた。

———後はステージセットとその他諸々ってまだまだあるけど、まあ順調って感じかな。

取り敢えずプロデューサーはコンビニの袋からコーヒーを取り出すと、それを一口飲む。

それは可もなく不可もなく、いつもの味であった。

## 大紅蓮無限地獄編VI

「「「乾ば〜い（乾杯）」」」

「…………… 乾杯」

カンッとグラスがぶつかる音の後、注がれたアルコールやソフトドリンクは各人嚙下していく。

その場所は居酒屋でもなければバーでもない。

ごくごく一般的な住家であり、店員に該当する存在や他の客がいるはずもなく、現在6人がそこには集まっていた。

「あ、そうだ、これお土産よ。皆で食べましょう！」

そう言って紙袋をテーブルの上へ取り出したのは赤ワインの入ったグラスを置いている有栖川夏葉。

既にテーブルにはたくさんさんの酒の瓶やピザや唐揚げなどの料理が様々置いてある。

夏葉がそこへ置いた紙袋の中には様々な種類のチーズがたくさん入っており、カマンベールチーズやモッツアレラチーズなどよく見るものから、ミモレットやパルメジャーノレッジャーノ、ロックフォールなど珍しいものまで様々であった。

共通しているのはどれもそれなりの値段のするチーズ達であることだ。

「わー、美味しそう！ カマンベールチーズ好きなんですよ〜」

「千雪は一緒に飲む時、いつもチーズをおつまみにしてるもんね」

多種多様なチーズを見て、喜色満面といった表情を浮かべたのは手前に焼酎のソーダ割りを構えている桑山千雪で、視線はそこへロックオンされていた。

それを見て、釣られて笑みを浮かべているのは手前に焼酎の入ったグラスを置いている七草はづきである。

二人は並んで座っており、既にチーズを皿に開け始めていた。

「はえ〜お酒のおつまみ、って感じですねー。というか結構独特な匂いしますね…………… そうだ、美琴さんはお酒じゃなくて良かったんですか？」

「うん。あんまりお酒得意じゃなくて」

そしてはづきと千雪の反対側に座っているのは、七草にちかと緋田美琴の二人である。

にちかは未成年なので勿論ソフトドリンク(コーラ)であるのだが、美琴はあまりアルコールが得意ではないらしく烏龍茶という選択肢であった。

ここは都内某所のマンションの一室、七草家のリビングであった。皆、床に敷いてあるクッションに座って、わいわいと話に花を咲かせているのであるが。

そう、ここには6人いるのだ。

夏葉、千雪、はづき、にちか、美琴の5人に加えてもう一人、異性がいた。

「プロデューサーさんはお酒好きなんですか?」

「……人並みにはって感じかな。家でも偶にだけど飲むくらい」

そしてそんな女所帯の中で少し所在なげにしていたプロデューサーは、彼の隣でコーラを一口飲みながら質問するにちかへそう返答をする、取り敢えず手元にあるグラスを呷った。

中身はハイボールであり、ウイスキーのスモーキーな味わいと炭酸水の爽やかな喉越しが、彼の喉を潤す。

「……それ、美味しい?」

「美味しいよ。ははは、美琴もちよつと飲んでみるか?」

ああでも美琴はアルコール苦手なんだよね、そう言って一言謝るとプロデューサーは半ば冗談で言ったその言葉をなかつたことにしようとする。

確か飲めなくはないが単純に味が好きではないとかそういう理由だったはずだと彼は彼女から前に聞いたことを思い出していた。

283プロダクションでも勿論飲み会というイベントは存在する。

プロダクションのメンバーがほぼ未成年ということもあって、必然的に参加者は成人している5人(社長に関してはいつもお金だけ置いてすぐに帰る)になるのだが、フルメンバーになることは一度もなかった。

理由は単純明快でスケジュールが合わない、それだけである。

皆順調に売れ始めたことは良いことであるのだが、その分休みを合わせることはかなり難しくなっていた。

そのため多くて3人、一度だけ4人で飲み会をしたことがあったくらいで、更に言えばそもそも揃って飲みに行けること自体かなり少なく、プロデューサーも成人組の誰か個人と何回か行ったことがある程度であった。

全員と差しで飲みに行ったことがある。プロデューサーは彼女たちの飲酒事情もそれなりに把握しているため、いざとなったら止める算段もこつそり組み立てていた。

その中でも美琴に関しては、飲みに行くよりも彼女のレッスンを見た後に食事に連れて行くパターンの方が多かったため飲酒することがまずなく、プロデューサーも相手が飲まないならと合わせてソフトドリンクを頼んでいた。

まあ、アルコールに極端に弱い体質とかではないので、万が一飲んでしまっても問題ではないとそう判断できるが無理に飲ませることなどしてはいけけないし、別段飲めなくとも生きることには不自由することなどはない。

そのためプロデューサーは再度、先程まで考えていたある思考に戻ろうとする。

「飲んでみる」

美琴はプロデューサーが飲んでいたグラスを隣からスツと奪取すると、一言コクリと嚙下する。

普段からそこまで感情豊かではない彼女の表情は親しい者なら分かる程度、ほんの少しだけ苦いものになっていた。

そんな彼女の様子を見て、本当に飲むとは思わなかったなという驚きと、ここが店とかじゃなくて良かった（さすがに現役アイドルが異性の飲み物に間接キスというのは心象がよろしくない）という安心の2つの感想を抱きながらも美琴のその美味しくないという表情に苦笑していた。

まるで大人の真似をして初めてブラックコーヒーを飲む子供のよ

うである。

「ははは、口に合わなかったみたいだね。ほら烏龍茶で口直

その時であった。

プロデューサーは自身に向けられている視線に気がついたのは。いや気が付かないほうがおかしい。

美琴から返すねと言って返ってきたグラスを手に持つプロデューサーを穴が空く程見つめているはづき、千雪、夏葉、にちかの4人は少し固まった後に抗議とも言える訴えを起こした。

「ちよつと美琴さん!? それは、か、間接き—— いやいやダメですよ男の人にそういうことをしちゃー! というかプロデューサーさんも何で何の躊躇いもなく渡してるんですか!」

真つ先に来たのは美琴親衛隊隊長とも言えるにちかであった。

アルコールは入っていないはずだが、少し顔を赤くして鼻息を荒くしながらプロデューサーへ詰め寄ってきている。

何故か右隣に美琴、左ににちかという並びであり、二人の会話も彼を間にされていたのだ。

そんな配置かつ何故か二人から結構詰めて座られていたため、そもそも距離が近いというものもあったのだが、にちかはさらに詰め寄るように胡座をかいて座っているプロデューサーの膝に手を置きながら訴えてきていたのだった。

「いや躊躇いもなくつていうか寧ろ取られたというか——」

「そ、そうよ、プロデューサー! そんな簡単にグラスを取られる程あなたは鈍っていないでしょう!」

今度は美琴の正面に座っている夏葉がそう訴えてくるのだが、グラスを取られた程度で身体が鈍るとか関係うのだろうかと単純な疑問符をプロデューサーは脳内で浮かべていた。

簡単に取られたの美琴があまりに自然にグラスを取ったというただそれだけの理由なのにと。

夏葉からしてみれば、以前暴漢から華麗に命を救われた経験からプロデューサーはとても強くてカッコいい理想の人というイメージが

あつたのだ。

それ故にそんな強い人が簡単にグラスを奪われるはずがないという極端な思考に陥っていた。

「別に鈍つてはないけど」

「……プロデューサーさん。私の耐ハイも、その、飲んでみませんか？」

そして千雪は既に自身の酒を飲み干して二杯目に突入し、そのまま少し減っている二杯目のグラスをプロデューサーへ渡そうとしていた（なぜか飲み口の位置を調整して渡していた）。

その表情は勢いと後悔と嫉妬と様々なものが混ざっており、間接キスにまさかこの年齢（とし）でここまで反応してしまったことの気恥ずかしさも見える。

以前、酔い潰れた千雪を自宅へ送っていったことがあるプロデューサーであったが（勿論事務所のメンバーに秘密である）、その経験から彼女のアルコール耐性はそれなりに高いはずであるため、そこまで危惧する必要はないと考えていた。

しかし、現状既にグラス一杯をものの開始数分で飲み干していることから、少し警戒レベルをあげないといけないとプロデューサーは内心でそう思いつつも、はづきの自宅であることから最悪ここに泊まらせれば良いかと楽観的にもなっていた。

「ははは、ありがとう。でも俺のはまだあるから。というか千雪、あんまりペース早いのは」

「プロデューサーさん。あんまりそういうことしちゃうと女の子的には……」

少しモジモジして頬を赤らめながら上目遣いでプロデューサーへ訴えるのははづきであった。

彼女も千雪と同じ感情を抱いているようで、プロデューサーの言動を強く咎められずにいた。

実際、今のプロデューサーを正当に責めることが出来るのは彼と交際しているまたは婚約関係、婚姻関係の何れかに該当する人物だけである。

そもそもそこまで大問題になるようなことでもないのであるが。そしてそんな妙に“女”を感じる姿の姉を、妹であるにちかは何とも言えない表情で見ていた。

身内のそういう部分を間近で見るとはきついものがあるだろう。にちかの現在の心境は中々に混沌（ケイオス）であった。

「……はづきさんも中々いじらしいところがあるん」

「……プロデューサー？ 私、プロデューサーのお酒飲んじやダメだった？」

美琴は横からチョンとプロデューサーの袖を引っ張って、眉を少し八の字にして彼を見上げていた。

一応、彼女は今ここにいるメンバーの中で、プロデューサーを除けば最年長のはずなのだが、誰よりも幼く見えるのはどうしてなのだろうか。

「いやダメではないんだけどさ」

「ダメ（よ）ですよ!!」

「……やっぱりダメなの？」

この時、プロデューサーは何なんだ今のこの状況はと頭を抱えそうになっていた。

いやそもそもだ。

どうして自分のはづきとにちかの自宅で、かつこのメンバーで飲み会的なことをしているのかと言えば。

← 成人組全員の休みがたまたま被った。

← オールスターライブ前とは言え、こんな機会は然う然う（そうそう）ない。

← 飲み会をしよう。

← しかしこの人数とメンバーを店に集めるのは身バレを考えると厄介。

← さらに言えば飲酒によってトラブルが起きるのはライブを控えているのを考えると危険。

← 宅飲みにすれば良いのでは？

『それなら私の家はどうか？』

← はづきの提案により七草家で飲むことに。

『じゃあ羽目を外しすぎないようにね』

← 異性の家で宅飲みということで勿論プロデューサーは不参加を表明する。

『??????』

← 案の定、成人組たちはその発言に首を傾げる。

『え？』

← 『プロデューサーさん、一体何を言ってるんですか……』

← それを聞いていたにちかがプロデューサーへぽつよーんしながら  
そう言い出す。

← 『じゃあプロデューサーさんも参加ということで。時間とかは後でグループCHAINに送りますね』

← 後日、はづきから以前作っていた成人組CHAINに要項が送られてくる。

←

飲み会当日、プロデューサーは車で迎えにきた夏葉に連れられてそのまま七草家へ

そして現在へと繋がるわけである。

世間体を考えるとプロデューサーはかなり不味い状況にあるのだが、彼のタスクは極めて冷静であった。

—— みんなにはここに来るのに固まって動かないよう指示はしたし、それに俺も誰かに見られている気配はなかったし、問題はないはず。

あとは帰るタイミングを間違えなければと、プロデューサーは取り敢えずハイボールを口に含みながらそう考えていた。

美琴を除いたメンバーからはまた抗議の視線や言葉が飛んでくるも、ここで飲まないと変に美琴を傷つけてしまうのでそのまま飲むことにした。

なんなら千雪の酎ハイも一口貰うことにした。

そしてその流れでなぜかはづきの日本酒や夏葉の赤ワイン、美琴の烏龍茶、にちかのコーラも一口貰った。

様々なドリンクの味の移り変わりに軽く脳が混乱したが、この場が変に混乱するより圧倒的にマシであったため、彼は最後にハイボールでそれを流し去る。

ちなみに彼は知る由はなかったが、彼女たちはプロデューサーによって口をつけられたグラスを何故かジーツと見つめながらその飲み口に恐る恐る口をつけ、脳を沸騰させていた。

間接キス程度でそこまでなるかと思うかもしれないが、彼女たちにとってみればそれ程のことであったのだ。

好きな相手と間接的とは言え、経口接触していると考えれば彼女たちの思考を加速させ、排熱が間に合わなくなるのも仕方のないことなのかもしれない。

「この唐揚げめちやくちや美味っ」

そんな彼女たちを尻目に腹を空かせていたプロデューサーはテーブルに鎮座していた唐揚げに手を出していた。

「ふ、ふっふーん！ それ、私が作ったんですよプロデューサーさん！」

唐揚げの作者であるにちかが間接キスによる脳の沸騰から回復し、ドヤ顔をプロデューサーへ見せた。

彼女はプロデューサーが今日ここに来るということで、ひっそり彼の好物をリサーチしていた。

と言っても彼から送られてくる食事の写真の傾向を見ただけなのであるが。

プロデューサーはラーメンやカレー、ハンバーグなど子供受けする料理が好きだということ突き止めた。

子供受け、というか小学生6年生みたいだと呆れつつも、そんなプロデューサーをめちやくちや可愛いと思い、メニューを必死に考えた。

そして考えついたのが、唐揚げだ。

姉であるはづきからプロデューサーはよくハイボールを飲んでいることを聞いたにちかはネットでハイボールに合う料理を検索したところ、一番上に出てきたのが唐揚げであった。

彼の好物の傾向と見事マリアージュを遂げ、彼が来る数時間前から準備を重ね、そして彼が来る5分程前から揚げ始めて最高の状態で提供していた。

気づけば50個ほど揚げていた。

こんなこと家族であるはづきにもやったことはなかった。

ちなみにプロデューサーは知る由はなかったが、現在ここにいるメンバーで一番料理が上手いのは誰かと言えばなんとにちかである。

彼女は昔から身体の弱い母と、それを支えてアルバイト尽くしだったはづきを支えるため七草家の家事全般を担っていた。

勿論はづきも家事は一通り出来るのだが、にちかはほぼ毎日家事をやっていたため、家事スキルがめちやくちやに高かったのだ。

結果、その家事スキルは283プロダクション内でも上位に入るほどになっていた（それを知っているのは誰もいないのだが）。

「マジで美味い…… これもつと食べて良い？」

「つ…… え、ええ！ どうぞ！ 何ならまだまだ揚げられますからね！」

無心で唐揚げをひよいパクひよいパクする彼に得も言われぬゾクゾクとした謎の高揚感を抱きつつ、彼女の脳内ではドーパミンが大量分泌されていた。

「…… にちかはマジで良いお嫁さんになれるな」

唐揚げをハイボールで流し込みながら一息つくくと、プロデューサーは幸せそうな笑顔を浮かべながらにちかへ称賛の意を込めてそう言った。

美味しい食事というのは素晴らしいものであり、それを作れる人は同じく素晴らしいものであるとプロデューサーは思っていたのもあり、にちかの旦那さんになる人はそれだけで勝ち組などと、ただ単純にそう思っていた。

それ故の彼の発言であったのだが。

「えっ…… あ、はい…… その…… お掃除や洗濯も、一通り…… できます…… ので……」

にちかは顔を真っ赤にしながら汐らしく何故かプロデューサーへ他にも家事が出来ることを報告していた。

それを聞いたプロデューサーは唐揚げを食べながら何の気無しに一言。

「…… これなら毎日食べれるな」

ボソリと呟いた彼のその一言ににちかの情緒は粉碎しかけていた。プロデューサーの見た目は大分細く見えるが実は結構な健啖家であり、常人なら満腹になってしまう量の食事も余裕で平らげた上で同じ量をさらに食べることができるとはたくさん食べることが出来る。

例えばラーメン○郎の大を二杯を余裕で食べられる程である。

そんな彼だからこそ目の前に君臨していた割りと多めの唐揚げを

見ても毎日食べられるという感想が出てきていたわけなのだが、にちかにとってみればよくあるプロポーズみたいな言葉の羅列を脳内で処理しきることができなくなるのは仕方がなかった（これをプロポーズと勘違いできるのかという単純な疑問はなしということ）。

「……プロデューサー！ それも、よく、ないわ！」

そして夏葉は割り込むようにまたプロデューサーへ抗議を飛ばす。

アルコールが入っているということもあり、恐らく無意識に声が大きくなっているであろう。

プロデューサーはここがマンションということもあり、騒音問題に気にし始めていた。

「……プロデューサーさん、やっぱり……いや、でも、ええと、うん……」

千雪は一瞬何か考えついたようだったが、すぐに脳内で訂正が入り、うーんと考え始めていた。

そのお陰かアルコールの減少速度は抑えられているようで、プロデューサー的には良かったと思っていた。

「……うん、美味しいね」

美琴はプロデューサーが美味しそうに食べていたのと、にちかの手作りということで唐揚げを一個口に運んでいた。

食事をして珍しく味の感想を言っていることにプロデューサーは感動すら覚えていた（スイーツを食べても甘いなどの感想がほとんどである）。

「にちか……」

はづきは先程のにちかと同じ感情を抱きながら戦慄とも呼べる表情を浮かべていた。

にちかの顔は誰が見てもわかるほどに“女”の顔をしているからである。

「……マヨネーズ付けて食べよう」

プロデューサーはそんな周囲の何故か自分を責めるような状況を少し面倒になったのか、聞かないふりをして唐揚げを食べつつハイ

ボールを楽しんでいた。

食べ合わせとしては勿論最高である。

そして味変としてマヨネーズを取って唐揚げへかけようとすると、それに気づいた千雪は自分の近くにあったプロデューサーへ手渡した。

「はい、どうぞ。プロデューサーさん」

「ありがとう、千雪」

お礼を言っただけマヨネーズを受け取ると、唐揚げにかけて一口。

プロデューサーは笑顔になった。

「ふふふ、唐揚げにマヨネーズかけると美味しいですよ。ちよつと背徳感が凄いですけど」

千雪はそんなプロデューサーの子供のような表情を微笑ましいと思いつつ、自身もにちかお手製の唐揚げを詰まんだ。

確かにとても美味しくライブがまだ少し先とは言え、たくさん食べてしまいそうだと懼いてしまう。

この唐揚げの山はプロデューサーのためににちかが用意したものである。

それはこの場にいる皆（プロデューサーと美琴を除いて）誰しもが分かっていた。

だが勿論プロデューサー以外が食べても別段問題ない（飲み会で唐揚げの山を一人だけ占領するというのは些か変である）。

食べたとして一個や二個ならそこまで影響はなく、寧ろたくさん食べようがその分カロリーを消費できれば問題ない。

しかしそれはそんな簡単な問題ではないので皆きちんとセーブしていた。

だがこの唐揚げには、それすら惑わすスゴ味があると千雪は自身の腹部に手を当てた。

「…… 本当に美味しいわ。うちのシェフに負けないくらい」

幸せそうなプロデューサーや千雪に釣られて、先程までプンスカしていた夏葉に唐揚げを一口すると、目を見開いた。

彼女の父親は家は世界的にも有名な車製造メーカーの社長であり、

所謂お金持ち、セレブと言える。

そして幼い頃から外でも家でもレベルの高い料理を食べてきた彼女の舌はかなり肥えていた。

細やかな味の違いや使用されている食材が何処産なのかまで当てる彼女は年末の格付け番組でも活躍する程だ。

そんな彼女が専属のシェフ（元二ツ星レストラン料理長）に負けなると評価するのはつまりそういうことである。

「……なんかいつもより美味しい気がする」

はづきも一口食べたのが、普段食べている料理よりもかなり手が込まれてることに複雑そうな顔を浮かべているものの、幸せそうに唐揚げを食べているプロデューサーをそれはそれで眼福と眺めており、もつと勉強した方が良くかなと今度料理本を買いに行くことを決意した。

「そうだ、プロデューサーさんは最近自炊してしてるんですか？ C HAINに送ってもらってる写真結構な割合でコンビニかお弁当屋さんなんですよ」

にちかはそういえばと気になっていることを聞くことにした。

彼がとてつもなく忙しいことはにちか含め誰しもが分かっている。

しかし、それとは別に彼の健康状態を心配するのは当然でもあった。

それを言っても彼は大丈夫だから気にしないで笑顔で言うのだから質が悪いのではあるが。

「最近なー。休みの日にたまに作るくらいだなー。ちよつぴり面倒……いやわかってはいるんだけどさあ」

言葉の途中、周囲の視線が鋭くなったことを感じたプロデューサーは少し慌てて弁解になっていない弁解をする。

普段から忙しく、最近はオールスターライブに向け更に忙しくなっている彼にとって休日も資料を纏めたり、アイデアを考えたりと休みという休みになっていなかった。

そんな状態で食べるのは近くのコンビニ弁当など健康に良いとは言えないものであり、それを彼自身自覚はしていたのだが今優先すべ

きことはライブの成功、というのが頭にあって結果的にこんな食生活になっていた。

勿論サラダや野菜ジュースも摂取しているので辛うじてセーフといったところか、などと考えているプロデューサーであったがこれが露見すれば283プロダクションの女性陣にアウトだよ詰められてもおかしくない。

だから偶に一部アイドル（恋鐘や灯織など）がお弁当を作ってきてくることもあるのだが、それを知るのは当人間たちだけなのでここにいるメンバーは知らない。

プロデューサーもその事情を隠したのはただ単純に歳下の女の子に食事を恵んでもらっていることに羞恥を感じただけであり、修羅場になる可能性など彼の頭には一切なかったのだった。

「だったら私に任せてプロデューサー！　うちのシェフに栄養バランスを考えた究極の健康弁当を作ってもらおうわ！」

まずは先陣を切ったのは夏葉である。

彼女の家の専属シェフは言うまでもなくプロフェッショナルであり、なんなら管理栄養士の資格も持っている。

そんなプロフェッショナルが作るお弁当であれば彼の健康維持は完璧になるというのが夏葉の算段であり、実際それが実現すればプロデューサーの健康状態は著しく改善するのは間違いなかった。

「いや流石にそれはあの人に悪いって。というか一体いくら掛かるんだそれ……」

しかしそんな提案をこのプロデューサーは快諾できるわけもなかった。

有栖川家専属シェフであるその人物とは実は顔見知りである。

夏葉の例の事件があった際、彼女の実家に伺ったときに夕食を食べ歩いていくことになったのだがそこで顔をあわせていた。

一言二言話した程度であるが、夏葉お嬢様を助けていただいたにありがとうございますと言われたのはしっかりと覚えていた。

そこで夏葉からそのシェフが凄い有名レストラン出身の凄腕だと聞いていたのだ。

そんな凄い経歴を持つシェフにいくら夏葉の知り合いとは言え、食事を提供してもらうことへの申し訳なさが勝ったのだ。

さらに言えばゲスな話ではあるが、かなり値が張りそうなその提案に少し戦々恐々もしていた。

端的に言えばビビっていたのである。

「あら、プロデューサーのためって聞いたらうちのシェフは喜んで作ってくれるわ。それにお金なんて取らないから心配しなくて大丈夫よ」

プロデューサーの心配を他所に夏葉は笑顔でそう告げた。

夏葉の命を救ってくれた時点でシェフのプロデューサーへの好感度は高く、断られることなどありえなかった。

「それなら私がプロデューサーさんにお弁当作ってきますね。私、肉じゃがが得意なんです」

料理はそれなりに得意なんですよと言ったのは千雪である。

彼女は一時期283プロダクションの寮に住んでいたのだがある時を堺に一人暮らしにシフトチェンジした。

理由としては一人暮らしなら自宅へプロデューサーを連れ込めるという利点があるからなのではと一部のメンバーから推測されているのは真実は不明である。

「ちよつと、千雪まで…… プロデューサーさん、私にもちか程じゃないですけど料理できるんですよ…… 里芋の煮ところがしとか」

親友の千雪が思わぬ行動に出たのに焦ったのかはづきも参戦を決め込んだ。

肉じゃがに対して里芋の煮っころがしといふかなり渋めのチョイスでの対抗ではあるが、にちか曰く『お姉ちゃんの煮っころがしはたまに無性に食べたくなる味なんですよねえ』とのことではづきも自信のある料理であった。

「…… プロデューサーさん！ さっきも言いましたけど家事全般できるんですよ私！ だから、プロデューサーさんがよければ本当にお弁当作りますし、何ならお部屋の掃除だってしますし、だから……！」

気づけばプロデューサーの腕を掴みながら縋るようにそう訴えかけるにちかはまるで恋人に捨てられまいと必死に引き止める姿にも見えなくもない。

成人男性と女子高生という絵面で大部危険な香りがプンプンするのではあるが。普段生意気な小娘といった感じの子が少し情緒不安定になる姿は何とも言えない愉悅を感じてしまう(なおプロデューサーはただただ戸惑っているだけの模様)。

「うん、私料理しないし、家事も全然……」

そしてこの場で自身の生活スキルの低さを自覚し、少し恨んでいるのは美琴であった。

昔からダンスと歌に人生を注いできた彼女に備わっている家事スキルは最低限以下のものであり、ランク付けすればEランクである(にちかはAランク)。

絶望的なまでの差に美琴はプロデューサーに対して何もしてあげられないことに珍しく瞳が潤んでいるようにも見えた。

先程少しだけ飲んだプロデューサーのハイボールのせいもあるのだろう。

「ははは、皆ありがとね。気持ちだけでもらっておくよ」

そんな彼女たちにできるプロデューサーの返答は笑えば良いと思うよ、であった。

正直言ってお弁当を作ってくれるというのは実際とてもありがたいのであるが今はライブが迫っており、自身のために労力を注いでもらうより彼女たち自身のこと集中してもらいたかったのだ。

ただ恋鐘や灯織は断つても作ってきてくれることがあり、流石に食べ物で粗末にすることなどプロデューサーにできるはずもなく食べなくてはいるのだが。

「「「……」」」

「「……？」」

すると突然、美琴以外の4人は黙り込んでしまった（元々美琴はあまりお喋りではない）。

まるで何かを深く考えているようなそんな様子で、急に部屋の中に静寂が生まれる。

流石にプロデューサーも唐揚げを摘まむ手が止まり、“俺、何かやっちゃいました？”と自身の心に問いかけるも何も分からない。

彼の私生活をサポートできない人がパートナーになる資格があるのだろうか。

『無理矢理にでもうちに連れてきて一緒に暮らす……それなら今よりもっと広いところに引っ越すのもありね。カトレアもプロデューサーが大好きだから大丈夫でしょうし』

『同棲するとしても私もプロデューサーさんも仕事が長引けば帰りが遅くなるかもしれないけど、少なくともご飯の作り置きだって作っておけるしお掃除だってできるから生活は絶対改善するはず。それにそういうことだってしてあげられるし』

『この家に一緒に住んでくれれば私もちかもいるし、私生活も仕事以外でもサポートできる……お母さんだってプロデューサーさんなら何も文句はないって言ってたし』

『私は絶対に22時までには仕事は終わるし、毎回そんな時間まで続く仕事はないからプロデューサーさんのご飯作って、洗濯して、掃除して……プロデューサーさんの家に通う……何ならプロデューサーさんの家で暮らすのも』

彼女たちの中に様々な想いが駆け抜ける。

側にながら彼を大切にしないのなら、無理矢理にでも奪ってしま

えばいい。

プロデューサーに恋人がいるということに最早疑問を抱かず、さらに言えばその恋人から彼を奪うということに躊躇はなく、頭の中を占めている奪った後の話だ。

ただしその恋人というのは完全な空想の存在であるのだが。

思い込みというのは大変恐ろしいものである。

「……プロデューサー、家事できない人は嫌い？」

そんな中、美琴は隣にいるプロデューサーへそう問いかける。

「別に家事なんて得手不得手があるからそんなことじゃ嫌わないよ。というか一緒にやればいいと思うし」

不安そうな表情を浮かべる美琴にプロデューサーは安心させるようにそう言うのとさらに続けた。

「そこまで難しいわけでもないし、やってれば何れできるようになると思うよ」

プロデューサー自身、確かに料理ができたり家事ができることに越したことはないとは思っているが、別にそんな理由で相手を嫌うことなどない。

どちらかに負担が掛かるのは申し訳ないと彼は思っているのも、もしそういう関係の相手ができたらなら分担していききたいと思っていた。

まあ、そんな余裕が今のプロデューサーにあるかと言えば微妙なところではあるが。

「……そっか。私頑張るね、プロデューサー」

「……？ うん、頑張れ美琴」

何かを決意したような表情の美琴とクエスチョンを浮かべるプロデューサー。

確実にすれ違いが起きており、噛み合っていない。

というより、ここ最近のアイドルたちとの会話を思い出し、それらも同じように違和感を生じさせていたのを思い出す。

「……あれ」

そのとき、プロデューサーはあるものに目がついた。

目線の先にあるのは一つの写真立てでそこにははづきとにちか、彼女たちの母親、そして一人の男性が写っていた。

あれ、もしかして。

その時、プロデューサーの超直感がまるで雷光の如く脳裏へと奔った。

もしかして、そういうことか？

## 幻想遊行夜光虫編

秋と冬の間という季節のせいかまだ16時を少し過ぎたところだと言うのに、外を見れば空は少しだけ赤に染まっている。

担任の退屈な話が終わるとそれに合わせてチャイムが鳴ると、ザワザワと学校という束縛空間から開放された生徒たちは各々帰りの支度を始めていた。

「下校の時間だ。帰ろ?」

「ん、ちよい待ちー」

そう言つて学校指定のバッグに教科書を詰め込んでいるのは、高校二年生どころか日本人から見てもかなり身長の高い部類に入る青年であった。

気怠げに教科書を入れるその横顔は誰が見ても整っており、隣の席に座っている帰ろうと促した少女も心なしか見惚れているような気がする。

「てか透。お前、ちゃんと課題とか入れたよな……」

そう言えばと青年は早く帰ろうと既に立ち上がっている少女、浅倉透を見上げた。

「うん、入れたよ……多分?」

「いや、確認しとけよ。休みに取りに来るの面倒だろ」

以前、彼は課題を忘れたのを前日の夜に気づいた透と何故か一緒に朝早く登校し、手つかずのそれを手伝わされたことがあった。

夜中にふと連絡が来て、何事だと思ひCHAIINを開くとただ一言助けてとしか書いておらず、詳細を尋ねるとそういうことだった。

勿論面倒だから嫌だと言つて断つたのだが、朝の5時半くらいにピンポンが鳴つて出てみれば透が居り、おはようと爽やかに告げる彼女を見たその時の彼は、軽い苛つきと共にデコピンを喰らわせるとりあえず着替えて登校の準備を始めることになったのだ。

故に彼は寄越せと手を差し出すと、何故か透は嬉しそうに自身のバッグを渡した。

「ったく……って、え、マジで課題一つも入ってないじゃん。お前バ

カなの」

「うーん、入れたような気がしたんだけどな」

割りと煩雑な中身のバッグを漁りながら本当に課題が入っていないことを確認すると、惚ける透へ溜め息を吐きながら彼女の机の中からそれらしきもの探し出し彼は整理して入れ始める。

そんな彼の様子に透は別段抵抗するわけでもなくされるがまま机の中とバッグの中を弄られていた。

本来、異性から（というか同性でも）自分のバッグの中身を見られるはあまり気持ちの良いものではないはずなのだが、こと彼に関して透は気にしている様子は全くないようだ。

透は椅子に座り直すとスマートフォンを弄り始めており、彼はそんな彼女にとりあえず教科書で頭を軽く叩いておいた。

「痛いよ……もしかしてDV？ これは」

「愛の鞭だ愛の鞭」

「愛されてるの、私。きゃー」

全く照れてる様子に見えない彼女を少しウザいなど思いつつそんな適当なやり取りをしていると、背後から誰かが近づいてくる気配を感じる。

「あはー♡ せ〜んぱい♡」

「つぐ……いきなり首を締めるの止めてくれるか、雛菜」

ちょうど課題を纏めて詰め込め終わったタイミングで頭部から頸椎部に掛けて優しく強襲された彼。

ふわりと甘い香りが立ち上がり、彼は柔らかい2つの感触とその香りに包まれていた。

「え〜、雛菜そんなことしてないもーん。ぎゅーって、ハグしてるだけだよー？」

自覚はないのか全く悪気のない様子で彼女はさらにハグを強めていく。

すぐ横を見れば雛菜の顔が彼の頬にピッタリとくっついており、逃げられる状況ではないようだ。

「楽しそう。私もやろうかな」

「透先輩、ちょっと待ってー。先輩は今は雛菜のものなのー」

顔の距離が近すぎてよく視認はできないが、恐らく嬉しそうにして  
いる雛菜は頬を擦り寄せてきていた。

少し透の表情がむっとしたような気がするが、この場で気づいたも  
のは誰もいなかった。

「つか雛菜テンション高いな。何か良いことでもあったのか？」

「うん♡先輩に会えたことと、こうやってぎゅーできたことー♡」

この女は何を言い出すのかと彼は頭を抱えたくなった。

本気で言っているのか分からないが、彼女は昔からこうなので気に  
しても仕方ないことかと思いを強制終了させた。

昔からことあるごとに雛菜は彼に引っ付いてきたため慣れたもの  
である。

読書中やゲーム中に背中から来ることもあれば、歩いている時に腕  
に抱きついてきたり、最近はないが真正面から来たりもした。

そんな彼女の行動を読むのは言動に慣れきった彼を持つてしても  
難しいものであった。

「先輩は雛菜に会えて幸せ〜？」

「うん幸せ幸せ。だから一回退け、な？」

「やだ〜♡」

「交代、まだ？」

「まだ〜♡」

「雛菜、マジで一回離れる。こんなことしてるとあいつがやって

「あいつが、何？」

背中では雛菜の柔らかさに包まれているはずなのに、何故かゾワリと  
背筋が震える。

雛菜に完全に背中を固定されており、背後を振り向くことは出来な  
いがこの状況を見て抑揚のない声を出しているのは誰なのか。

シユレディングアの猫というものがあり、詳細は語らないがつまり

は振り向かなければ可能性は無限大で――

「やつほー樋口」

気の抜けた透の挨拶で可能性は一つへと絞られてしまった。  
運命とはひどく残酷である。

「円香先輩、こんにちは〜……先ほーい。円香先輩が怒ってて怖い  
〜」

「は？ 別に怒ってないけど。てかさっさと離れたら？ 公衆の面前  
で、鬱陶しいから止めてくれる？」

雛菜のきやくと彼へ更に身体をくつつけるようにして、助けを求め  
てくるが現在進行系でこの場の体感温度はどんどん下がっているよ  
うな気がした。

凍てつく波動を出している彼女、樋口円香の刺すような視線はもし  
実体であれば雛菜ごと彼を貫いていたことだろう。

「あー、円香。このくつつき虫を退かしてくれるか？ 俺ではこの怪  
力をどうすることも出来なくてな」

「先輩ひどーい。雛菜、そんな力持ちじゃないもん」

案の定であるが雛菜の抗議の視線と感触が彼を襲った。

怪力とまではいれないが女子にしては少し身長も高めで、確か体力  
テストで握力が―― と思いつつも考えることをやめた。

そう、雛菜の名誉のためである。

「は？ なんで私がそんなことしないといけないわけ。自分でどうに  
かすれば？ ミスター蛍光灯」

そしてまたこれも案の定であるが円香は極寒とも呼ぶべき、絶対零  
度の声色で彼と告げた。

まるで地獄の裁判のようである。

というか蛍光灯ってそれは暗に雛菜を虫扱いしているのかという  
疑問が彼には出てきていた。

あと微妙に分かりにくい例えだとも。

「出たよ円香のミスター節。ほんと冷たいよなー円香は。そう思わな  
いか雛菜？」

「先輩、雛菜を退かそうとしてたー」

「………… そう思わないか透？」

「待ってる。交代まで」

「あれ、味方いないの俺…………」

如何に円香の機嫌を取るかが重要なのに、誰一人役に立たないこの状況に彼は絶望していた。

まるで複数パターン3連複を買ったのに入着したのは全く予想していなかった馬で、全部ハズしたときのようなそんな感覚だ（競馬は大人になってから健全に楽しみましょう）。

「………… 本当に、なんでこんな奴に、私は」

そしてまるで苦虫を潰したかのようなそんな表情で円香は何かを呟いていたが聞き取ることは出来なかった。

恐らく自身の悪口を言っているのだと彼は予想して少し悲しくなっていた。

それでも俺はやっていない、と。

「あーほら雛菜。そろそろ、な」

彼は意を決してポンポンと雛菜の頭を撫でてそう言うと、彼女はーいと、不本意そうに退いた。

感じていた背中中の温かみが消え、少し違和感を感じる。

「次、私の番？」

「本日の営業は終了です」

「ちえー、品切れかー」

「雛菜が最後だったみたいだね。朝から並んだ甲斐があったー」

そんな冗談交じりのやり取りをしていると彼のすぐ横には先程まで機嫌の悪かった円香がいた。

距離にしたら本当にすぐ横で、3センチ先と言ったところか。

彼女のその何やら複雑そうな表情から、彼に何か訴えているようである。

「あなたは誰に対しても良い顔をして…………」

「そんなつもりはないけどなー。てか円香は俺に対してもっと優しくしてくれないかな」

「これでも既に限界まで優しくしているつもりだけど？」

「嘘でしょ……？」

まさかの円香の言葉に軽く衝撃を受けた彼。

円香は基本的に彼に対して当たりが強い。

昔はそんなことなかったような気がするが、気づけば彼に対してだけ彼女は毒舌になっていた。

本気で言っていない(？)ことは何となく分かるため、別にそこまですべて彼は気にしているわけではなかったが。

「……嘘だと思うの？」

「……うん、円香さんは優しいな」

円香と彼とは対象的に、目の前では透と雛菜がイチャイチャしており、まるで自分たちは関係ないと言わんばかりであった。

恐らく彼が悪いのであろう。

きつと、多分、恐らく。

「全く……というか浅倉。課題は忘れてないでしょうね。また忘れたとか言われても私、嫌だから」

「うん、ちゃんと入ってる。というか、入れてくれた」

「はっ」

「いやなんでっ」

透はバッグを指差すと、その視線は彼へと移る。

それを見た円香はまた表情を凍らせていた。

「またそうやって、甘やかして。というか異性のバッグの中を物色するとか最低……」

「いや課題忘れたとか言って手遅れになるより良いだろ？ そうなったら俺がお前に来るんだからさ」

好感度がどんどん下がっていくこの状況に辟易しながらも彼は、まるで茨の道を無理矢理通るかのようにして円香へそう進言した。

そう、透が課題などで泣きつくときに超高確率で被害者になるのは彼か円香なのである。

その考えに思いついたのか、円香もそれ以上何も言えなくなったようだ。

「……仕方がないから減刑してあげる」

「それを言うなら無罪放免だろうか」

この女は一度吐いた言葉は飲み込めないタイプだったと彼は思い出す。

しかしとりあえず罪は軽くなったことを彼は良しとすることにした。

彼女に無駄な言い訳は通用しないためである。

「……せ、先輩？」

また背後から、今度は消えるようなか細い声が聞こえる。

現在集結している4人はあと1人を加えていつものメンバー、略していっメンという集まりであった。

そのあと一人というのがこのか細い声の持ち主である。

「おつ、小糸。今日はビリだったな。うーん、残念だけど今から罰ゲームを受けてもらうことになりました、はい」

「ぴえっ、ば、罰ゲーム……？ な、何されちゃうの……？」

怯えたように言うのはかなり小柄な少女、福丸小糸であった。

そんな彼女は罰ゲームというワードに少しビビっている様子ではあるものの彼のすぐ後ろにおり、もし彼が少しでも頭を倒したら触れることになるほど近く、どうやら既に罰ゲームは受け入れている様子にさえ見える気がする。

「小糸ちゃん、罰ゲームだー」

「うーん、何が良いかなー。先輩にぎゅーされるのは？」

「ぴ、ぴえっ!? せ、せ先輩からハグっ!? え、ええと、そ、それは、その、心の準備が……」

「え、てか俺にハグされるのって罰ゲームなの？ 俺かわいそう……」

冗談で罰ゲームと言ったものの、最終的にダメージを受けたのは彼であった。

インガオホーである。

「ちよつと、小糸に変なことしないで三馬鹿」

その様子を見ていた円香は小糸を引き寄せるようにして彼女を守る態勢に入る。

そんな円香の言葉にひどーいと透と雛菜は訴えるもののすぐにそれは黙殺されていた。

ちなみに彼が何も言わなかったのは言っても無駄ということを知っていたのと元凶が自分であったからだ。

「小糸にはこれから初めてのおつかいで隣町まで買い物に行つてもらうから」

「わ、わたしおつかい初めてじゃないよつ、円香ちゃんつ」

なお、この女もノリノリである。

そう、円香はこう見えてこういったノリには乗るタイプであり、お笑いにもシビアなところがある。

以前、某お笑いグランプリ番組と一緒に見ていたときに一位になった芸人に対して、絶対にこつちのコンビの方が面白いのにどうかしていると言っていた。

その時、彼は普通に面白かったけどなど言ったのだが、如何にこの芸人のネタが計算されて作られているのかを小一時間説明されたので、以降彼は変にお笑いに関しては何も触れないことを決めたのはそのすぐあとの話だ。

「ん、ちょうどお母さんから晩御飯のおつかいCHAIN来てた」

透が差し出したスマートフォンに彼女の母親からにんじんや油、その他諸々のおつかいリストが載っていた。

材料的にこれはカレーである。

「円香、お前まさか、図つたのか……？」

「すごい、円香先輩超能力者みたーい」

そんな円香に彼と雛菜は驚愕と称賛、各々の感情を発露させていた。

覚醒円香、恐るべしである。

「いや普通に考えてありえないでしょ。というか浅倉の家の夕飯なんて私知らないし」

そして一瞬で冷めるのも彼女の特徴でもあった。

温度差言えば北海道と沖縄くらいだ（なお夏になるとどちらも大概暑い模様）。

「じゃあ一緒に買い物行こうか、小糸ちゃん」

「ほ、ほんどに行くの……？」

小糸の意見は最もで、彼女自身罰ゲームが彼の冗談だということは分かっていた。

あの優しい彼が小糸の嫌がることはしないと、そんな信頼を寄せていた。

故に小糸はあんな反応をしつつも特に怖いとは実際思っていないなかつたのだが、どうやら透は一緒に行く気満々のようである。

「うん、1人より2人で行った方が楽しいよ、多分。あと軽くなる、荷物」

その前者と後者を並べると後者の方が強めに出るだろうと彼は内心思っていたがこれもまた何も言わなかった。

理由は言ったところで以下略。

「えー！ 雛菜も透先輩とお買い物行きたーい！」

そして意図せずして小糸と透が放課後デートをする流れになったの見て、雛菜ははいはいはいとビシツと手を上げてアピールしていた。

雛菜は透のことが大好きであり、ことあるごとに一緒に出かけているのは彼も知っていた。

透も雛菜も容姿は美少女と言っても過言ではない容姿を持っており、そんな2人が並んでいたらそれは絵になる。

透の少しボーイッシュな容姿からカップルに間違われることもあるそう。

「ちよつと、それなら小糸は巻きこないで2人で行ってきて」

そして円香は呆れながら小糸に助け舟を出しつつ、2人から引き剥がそうとしていた。

透と雛菜の持つ独自の世界観は周囲を巻き込み、無差別に被害をもたらすことを円香は今までの経験から嫌でも知っている。

小糸の優しい性格では断りきれないと判断した結果、自身も巻き込まれる覚悟で間に入ったのだ。

「いやてか、もうさっさと帰るぞ。毎回さうだうだ長いし」

そして彼はこのまま延々とこの放課後の教室でやり取りが続きそうと判断したため、強制的に帰宅を促すことにした。

彼は別段放課後の教室で残ってお喋りに講じるようなキャラではなく寧ろ早く家に帰りたい派閥であったのだが、この4人がいると最低でも30分はこの場に拘束されることが確定してしまう。

従って彼が今早く帰宅するためにすべき行動即ちそういうことである。

「はいい♡ 先ばい」

立ち上がった彼の横にすぐに現れ、腕組みポジションを獲得したのは雛菜であった。

さつきまで透へラブコールしていた彼女のその変わり身の速さは最早脱帽である。

「…… お前、なんか気の多い女みたいなムーブしてんな」

「あはー♡ そんなことないよー、雛菜の一番は先輩だよ♡ ねえ嬉しい?」

あざといポーズで彼の腕にしがみつきながら言う彼女のそれは並の男であれな瞬殺できる破壊力を持っていた。

「わー雛菜に振られたー」

「あ、勿論透先輩も大好きだよ。というかどっちも大好き♡」

いつの間にか横に来ていた透に、彼にしているのと同じように腕に組み付く雛菜。

正確には透も彼の隣に行こうとしていたのを雛菜に捕まったというものであったが。

「…… はあ、3人横に並ばないで。通行の邪魔だから」

そんな彼と透に挟まれて幸せ全開オーラを出している雛菜へ溜め息を吐きながら、円香もその後ろを着いていく。

「ま、待ってよみんな…… つて、透ちゃん! バッグ忘れてるよっ!」

まるで暴風雨のような時間に圧倒されながらも、小糸は透が忘れていたバッグを持ちながら急いで追いかけていく。

「あ、ごめんね。小糸ちゃん。ありがとう」

「……その変に捨てちゃって良かったんじゃない？」

「わー円香先輩、そういうのイジメって言うんだよー」

「てか透は捨てられても気づかなそうけどな。ありがとな小糸……こいつらに比べて、お前はほんとに優しくて良い子だよ」

「ぴえっ!? ふ、ふふん、 やっぱり透ちゃんも先輩もわたしがいないとダメなんだから……！」

バッグを渡されてお礼を言う脳天気な表情の透。

捨て置けとスマートフォンを弄りながら冷酷無比に呟く円香。

さらにそんな冷酷無比な言葉に頬を膨らませて抗議をする雛菜。

唯一小糸だけは自身に対してストレスを与えない存在だと改めて理解した彼。

彼の少し弱気な発言に謎の高揚感を得ていたトヤ顔な小糸。

そんな5人は幼稚園の頃から家族ぐるみの、世間一般的に言う幼馴染と呼ばれる間柄である。

そう、幼馴染であるが故のこの気安いやり取りであった。

「あ、食べに来るのだった」

全員が透のスマートフォンを見た。

そこには今日はみんな晩御飯食へに来るの？と彼女の母親からメッセージが送られてきていた。

「雛菜行く。先輩は〜？」

「うーん、どうするかなー」

「ま、円香ちゃんは？」

「……食べてきてだって」

既に親へ連絡済みの雛菜と根回しされていた円香。

円香に関しては彼女の両親が仕事で遅くなると分かったタイミンで先に透の親へ連絡していたようだ。

何なら円香と透は家が隣同士であるため、何か不測の事態が起きても問題はない。

「じゃ、じゃあわたしも、行こうかな」

みんなが行くのならわたしも小糸は両親へCHAINへメツ  
セージを送っている。

彼女には妹が1人いるのだが、今日は友だちの家でお泊り会のこ  
らしく家を空けていても問題はなかった。

「みんな行くのね……俺はちよつと悪いから、いいかな

」

「だめ。もうみんなで行くって打っちゃったから」

流石に4人という大人数で行くのに気が引けたのもう一つの理  
由から鑑みて彼は断ろうと思ったのだが、既に手遅れのようにであ  
つた。

気のせいか透は若干拗ねているようにも見える。

「雛菜、先輩も一緒に良い〜。というか逃さなくい♡」

彼は腕をガツチリホールドされ、絶対に逃さないという強い意思を  
雛菜から感じる。

目がガチであった。

「そうやって集団行動を乱すの何？ 単独行動している自分がかつこ  
いいとか思ってるの？ ミスター・アーチャー」

そう言えば最近某運命のアニメと一緒に見たなと思い出しながら、  
凄まじい切れ味の口撃を放ってくる円香に少し涙が出そうになる彼。

そう、飲み会を開いた際に敢えて遅れてやってくる上司のような、  
そんな謎の恥ずかしさを何故か彼は感じていた（彼は未成年です）。

そんな意図は全くないのであるが。

「せ、先輩……」

小糸はそれ以上何も言わなかったが、それだけで言いたいことがわ  
かった。

行かないなんて言わないよねと、気弱ではあるが誰よりも頑固な彼  
女の瞳から逃れることは出来ない。

「いや、俺高燃費だから————はい、行きます……」

そしてそんな彼女たちに折れるしかない彼はただただ首肯するの  
みであった。

彼は実はかなりの大食漢であり、大盛りのチャレンジメニューを余

裕でクリア出来るレベルである。

ちなみに食べきったら一万円という超絶大盛りラーメンを完食し、その賞金でゲームソフトを購入していた。

別段食べる量は周囲に合わせる事ができるため、誰かの家でご馳走になる際に大食いを完全開放するわけではないのだが、あまり誰かの世話になるのが好きではないというそれだけである。

しかし、この中で誰が一番折れやすいか、それは勿論彼である。食事に誘われた際、いつも彼はほぼ強制的に連行されていた。

円香の家、雛菜の家、小糸の家。

透も合わせて全員の家の味を体験していた。

そして彼女たちも彼が同じ食卓にいても違和感を感じておらず、寧ろ来ないと不機嫌になる。

別に幼馴染全員で毎回各家へ行っているわけはなく、彼女たちの誰かの家に彼だけ呼ばれることも何度もあった。

その際、彼女たちの両親には良くして貰っている彼であったが何故か毎回“これがうちの味”というのを口にされている。

彼がその真意に気づくことはないのだが。

「うん、それでよーし。じゃあ、行こっか。買い物」

しゅっぱーつと、目的地を家の近所のスーパーに切り替えてゾロゾロと向かう5人組。

全員容姿が整っているもあり、それはそれは大分目立っていた。

いや“普段から”、であるのだが。

「結局全員円香の罰ゲームだったな」

「確かにそうだ。みんなビリだー」

「つ、次は勝つねっ!」

「あれはジョークだったんだけど」

「円香先輩、ジョークのセンスなーい♪」

は？ とキレる円香。

こわーいと彼を盾にする雛菜。

盾にされて自分ごとぶち抜かれそうになっている彼。

それを見てアワアワする小糸。

雲の形がすき焼きに見え(!?)、ボケーツとしている透。

そんな5人のいつまでも変わらない穏やかな日常はこれからもずっと続いていく。

——とは限らない。